
光の砂漠 闇の迷宮

招夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の砂漠 闇の迷宮

【Nコード】

N1520W

【作者名】

招夏

【あらすじ】

世界が崩れ落ちる時、人は何を守りたいと思うのだろうか。

無駄なものをそぎ落とし、余分なものを削り取り、必要なものさえ切り崩しながら、最後の瞬間まで守り抜いた一欠片は、どんな色をしているだろうか。どんな輝きを放っているだろうか。 惑星

ハルシリーズ第三弾 スペースファンタジー (注意) この

作品は、作者が思いつくままに書きながら更新しております。なので矛盾が生じた場合や単に展開が気に入らない場合でも、ちよこちよこマイナーチェンジする場合があります。そう言った運営方法が

嫌いな方は、ご注意ください。 m () m すみません。 *が付
いているお話は残酷な描写があります。お気を付け下さい。

惑星ハルの世界観

惑星ハルの世界観

□ 惑星ハルと現状

惑星ハル（地球型惑星 公転周期398日）衛星数3つ

衛星（1） ルシフェル（赤い月）

衛星（2） ウェスペル（黄色い月）

衛星（3） フォボス（いびつな月）

中心の恒星 ジタン

（主系列星末期状態 主系列星とは中心部で水素の核融合反応を起こしていて、星の一生で最も長く、最も安定した期間。太陽も現在の段階にある）

惑星ハルは、地球に良く似た水の惑星だった。八つの大陸があったが、地球に比べると圧倒的に陸地の面積が少ない。現在は砂漠の惑星。

惑星ハルが公転している中心の恒星はジタン。ジタンは太陽と同様に水素の核融合反応を起こしているもっとも安定した期間にあったが、五百年ほど前から、主系列星をはずれつつあった。

そして、悲劇は起こった。

暴走し始めたジタンに、まずハルの極冠の氷が解けた。解けた氷は、さして大きくはない惑星ハルの大陸をじわじわと飲み込んだ。六千メートル級の高山の頂を残し、一旦ハルは青い水球となった。当時文明を築いていた人類は、逃げ惑った挙句、わずかに残った山頂の陸地を拠点として地下都市を形成し、細々と暮らしていた。次

いで大地は干上がり、惑星ハルは完全に生物を拒絶する不毛の大地となった。これがジタン末期の大災害である。

このストーリーは、ジタン末期の大災害から数百年経った惑星ハルが舞台となっている。惑星ハルの地表は、火星に似た赤褐色の茫漠とした砂漠が広がる大地となっている。

□ 惑星ハルの居住地域

惑星ハルで、生物が生存している地域は四か所（生存の可能性も含む）

- （１）地下都市ハデス
- （２）地表の森アール・ダー
- （３）地表の街ヴェスヴィウス（人を寄せ付けぬジャングルになってしまったと言われている）
- （４）地表の村ダイモス（流星群に直撃されて壊滅した）

□ 惑星ハルに存在する文明

末期の惑星ハルに存在していた文明は人類が築いていたが、人類は三つの種族に分かれている。

（１）一般人

標準型の人類、地下都市ハデスで暮らしている。科学技術を進めることによって、ハル文明を存続させる役割を担っている。ハル連邦政府はほぼ一般人で占められている。人口は三つの種族の中で最多。

（２）ファームの民

地下都市ハデスで暮らしている。（おもに地下都市のバイオラングであるエリアEに居住）体内に葉緑体を持ち、光合成をする。地下都市の植物管理にあたっている。忍耐強く、やや排他的な性質をもつ。

（３）森の民

地表の森アール・ダーに住んでいる。見かけは一般人と同じだが、植物を操る能力を持っている。病弱。特殊な力を持つ為にハル政府が手厚く保護・管理している。地下都市での寂光下でも光合成ができるなどの有用な植物を生み出す役割を担っている。

森の民の力の源は未だに解明されておらず、森の民を分解再生するとその力が失われてしまうことが確認されている。人口は三つの種族の中で最少。

ハル連邦政府の方針で、地上と地下都市は隔絶されていた。一般人とファームの民が地上で暮らすことはなかったし、森の民が地下都市で暮らすことは、一部の例外を除いて、ない。

□ ハル連邦が誇る科学技術

メインコンピューター ハル

ジタン末期の大災害以降、人類を生き残らせる為のサバイバルプロジェクトを遂行する為、様々なプログラムを管理統括している。また、その他のコンピューターおよびアンドロイドを統制している。

アンドロイド

トウキ型（セキュリティ担当）、ムラサキ型（エデュケーション担当）等がある。

大脳コンタクト

直接人間の脳にアクセスできる器械。大抵は対で使う。ヘッドホンのような器具を頭に装着すると、言葉を交わすことなしに相手と考えていることがダイレクトに伝わってくる。だから言語が違っていても伝わるし、相手が見たものの記憶をまるでその中にいるように見ることができる。記憶を記録したり、逆に情報や記録を他者に定着させたりすることもできる。

分解再生装置

あらゆるものを分子レベルまで分解し、逆に再生できる装置。この装置の開発により、地下都市の生活レベルが格段に向上した。

□ 地下都市ハデスにおけるエリア区分

エリア A

ハル連邦政府の中枢および、関連施設群があるエリア。一般人のほとんどは、このエリアで働いている。

エリア B

メインコンピューターをはじめとする様々な制御システムが集積されているエリア

エリア C

居住区。すべての国民は政府によって居住スペースを与えられているが、政府への貢献の度合いによって居住スペースに差がある。

エリアCは地下都市内部の複雑な地形を利用している為、隙間スペースのような場所に住居がある者もいる。

エリアD

備蓄倉庫等が集まった補給部エリア。基本的に、個人は所有できる物品数に制限がある為、不要かつ余分な物の処分を徹底指導されるが、緊急に大量に必要なになる可能性があるものは、ここで備蓄している。例えば、緊急時の食糧、医療品等。

エリアE

地下都市のバイオラング。地表の三分の一の光度を保ったジャングルエリア。三分の一とはいえ、他のエリアに比べれば格段に明るい。寂光下でも育ち、効率よく光合成をおこなえる植物が集められている。

エリアF

データバンクエリア。子どもたちの教育機関（つまり学校）もここにある。

エリアG

技術作業部。あらゆる科学技術を駆使した装置や機械は、すべてここで造られる。大脳コンタクトや分解再生装置のメンテナンス等もここで行われる。

エリアH

医療センター 精神と健康を保つための、トレーニングマシンや遊戯施設などもここにある。

主要登場人物

□ 主要登場人物

カナメ・P・グラブラ

一般人 男性 主要エンジニア 再生分解装置の開発者の一人（分解担当）

ディモルフオセカ・オーランティアカ 森の民 女性 逃亡中

ルド・B・ラキニアータ

一般人 男性 地下都市ハデスの市長。ハル連邦公安委員会委員長

イブキ・ピラミダリス

一般人 男性 主要エンジニア 再生分解装置の開発者の一人（再生担当）

コブ・ケルクス ファームの民 男性

フェリシア・アメロイデス 一般人 女性 ハル連邦政府官吏

トウキ セキュリティ担当アンドロイド（少年型）

ブローグ

世界が崩れ落ちる時、人は何を守りたいと思うのだろうか。

無駄なものをそぎ落とし、余分なものを削り取り、必要なものさえ切り崩しながら、最後の瞬間まで守り抜いた一欠片は、どんな色をしているだろうか。どんな輝きを放っているだろうか。

惑星ハルの最深部。地下都市ハデスは常に薄闇だ。朝なのか夜なのか、それを知っているのは、黙々と時を刻む時計のみ。

ハル連邦政府の中枢機能があるエリアAに限れば、巨大なスペースを有する地下都市なのだが、それ以外のエリアは割とこじんまりしている。特に、それぞれのエリアをつなぐ回廊ときたら極狭で、背の高い者ならば、かなり圧迫感を感じる高さだ。その狭く薄暗い闇の中に、道は迷路のように敷かれていた。無論、わざわざ迷路にするために道路を作ったわけではない。この地下都市は、元々、地底奥深くにあった空洞を利用して作られたものなのだ。故に道も自然の造形そのままに迷路のように曲がりくねっていた。イメージとしては人間版アリの巣の様なものを想像してもらおうといいだろう。

地底奥深くに穿^{うが}たれた無数の空洞の集合体。

それが地下都市ハデスだった。

電力の使用量を極限まで絞りこんでいるため、必要のない場所は特に闇が深い。主要道路こそ舗装してあるが、脇道に逸れればごつごつとした土の道に変わる。にもかかわらず、そこには一本の草さえ生えていなかった。

ここは惑星ハルを暑く輝り焦がす恒星ジタンの光さえ届かない奈落の底……。否、よく目を凝らして周囲を見てほしい。そうすれば、

天井や壁のそこに、ひっそりと光る付着物に気づくことだろう。光苔の一種だ。その幽かな光は、地下都市ハデスが真の闇に吞まれることを、かろうじて引き止めていた。

奈落の底の一步手前の薄闇に、惑星ハルに存在する唯一の国家、ハル連邦の中枢機関が設けられたのは、既に数百年余も前のことだ。

この国のありようは、まさにこの国が、ひいてはハルという惑星が置かれている状況を的確に表していた。文明のみならず、母惑星ハル自体が、ギリギリの崖っぷちで、奈落の底に落ちていくことから踏みとどまっていた。

第一話（前書き）

（注意）この作品は、作者が思いつくままに書きながら更新しております。なので矛盾が生じた場合や単に展開が気に入らない場合でも、ちょこちょこマイナーチェンジする場合があります。そういった運営方法が嫌いな方は、ご注意ください。 m（――）m すみません。

第一話

人氣が途絶えた暗闇の中、女は住居の壁面を擦っていた。ザスザスと硬い壁面を擦る音が闇に吸い込まれていく。

どうして……女は思う。どうして、こんなに光ってしまっただろう？

答えは出ていた。かそけく光るその光が、自分と愛する家族を闇に引きずり込もうとしていることも知っている。それでも女は、その答えを打ち消すように壁を削り続ける。

突然、背後から聞こえた明朗で快活な声に、女ははっとして振り返り向いた。

「奥さん、困るなあ。光苔は政府によって繁殖させられている、いわば公共物だ。それを、こんなに擦り落とすなんて……」

公安の職員を従えた、すらりとした長身の男が立っている。歳の頃は四十代半ば、しかし、その若い容貌とは裏腹に、彼が遥かに長い年月を生きている人間であることを、この地下都市ハデスで知らないものはいない。銀色の鋼のような髪に冷徹無比なアイスグレーの瞳、国家公安委員会の委員長であり地下都市ハデスの市長、ルド・B・ラキニータは、穏やかで砕けた口調でありながら、大抵の者を疎みあがらせてしまっただ。

「ひっ……」

女は息を呑むと、大方の定石通り疎みあがった。

「ママあ？ どこ？ リリイ寂しいよお」

その時、稚い声とともにドアが細く開き、中から三歳くらいの小さな女の子が顔を出した。亜麻色の長い巻き毛にサファイアの瞳。

「ほお。これは見事な森の民だ」

ルドは目を細めて嘆息すると、鋭い瞳で女の子を凝視した。

「リリース！」

母親は慌てて娘を腕の中に抱きしめた。無論ルドの視線から隠す為だ。

「奥さん、その子を渡してもらおうか。ちょうどその子が生まれたあたりからだそうじゃないか。光苔がこんなに光るようになったのは」

ルドの朗々とした声が、闇の中で閃く鋭利な刃物のように響いた。「違います。この子のせいじゃない。この子は森の民なんかじゃないわ！ この壁は前からこうだったのよ！」

女は絶叫すると、リリースを抱きしめたまま部屋の中に飛び込んで鍵をかけた。

「やれ！」

ルドの一言で、公安隊はあつという間にドアを開錠し、家の中へと乱入した。女の悲鳴と子供の泣き声が闇を切り裂く。

「トウキ、女を処分する。子供を確保しろ」

トウキと呼ばれた少年は、軽く頷くと、部屋の隅で抱き合って震えている母子と対峙した。

トウキは目を細め、手を伸ばすと怯えた表情の母親の眉間に指先で軽く触れる。女は、一瞬大きく目を見開いた後、クタリとその場に倒れこんだ。

「ママっ？ ママっ！」

母親に縋りついて泣く子供に、トウキは静かに話しかける。

——ママは少し疲れちゃったんだ。眠っているんだよ。静かにしてね。

その優しい声は、直接リリースの脳内で響いた。だから半狂乱になって母を呼びリリースにも届いたのだ。はっとしてリリースはトウキを見つめる。人懐こそうな深い紫色の瞳。トウキはその場に相応しくない程、何事もない様子で穏やかに微笑んだ。

「ママは、眠っているの？」

床に倒れこんでいる母親は、確かにただ眠っているだけのように

見える。

そうだよ。ほっぺだつてこんなに温かい。リリイは、縋りついた母親の胸に顔を埋めた。いい匂い。

ママの匂いは、いつだつてリリイを安心させる。

ほら、胸だつてちゃんとトクントクンって動いてる。このお兄ちゃん言う通りだ。

「そうだよ。あっちのおじさん達が、ママにお話があるんだってだから、少しママとはお別れだよ」

今度は、トウキも声で対応する。

「やだ、ママと一緒にいる」

リリイは、再び母親に縋りついた。

「君と一緒にいると、おじさん達もママもお話ができないよ。後で必ずママと会わせてあげるから、いい子でいようね。用事が終わるまで僕がついていてあげる。僕はトウキ、君を守るものだよ」

「トウキ？」

「そう」

「後でママと会えるの？」

「ああ、必ず会えるよ」

トウキは、揺るぎない様子で頷いた。

トウキが会わせるといふママと、本来の母親が、確かに同一人物なのかなどと、僅か三歳のリリイに、どうして疑うことができただろうか。リリイはトウキの言葉を信じ、従った。

『森の民』の力は、植物を操る力。力を発症した者は、地下都市には居られない。当時のハル政府は、森の民を保護すると言つ名目で、捕獲し、隔離し、管理していた。それこそが、地下都市の子を持つ親が、力の発症を極端に恐れていた理由だった。

第二話

ハル連邦公安委員長室に、足音も荒く一人の老人が入ってきた。白髪に褐色の鋭い瞳。深い皺が刻まれた色素の薄い顔には、怒りが濃く滲んでいる。

「ルド、昨夜保護した森の民の母親を、その場で処分したと言うのは本当のことなのか？」

老人は、デスクで市長専用端末に向かっていているルドを睨みつけた。「おお、カナメか。何だ？ お前、いつまでそんなヨボヨボの姿でいるつもりなんだよ。俺より年下の癖に……。まさか、俺より年上に見せたいが為にそうしている訳じゃあるまいな。それが理由なら、ちと子供っぽ過ぎないか？」

ルドは端末から目を挙げると、目を細めて悪戯っぽく笑んだ。

「質問に答えろ、ルド」

子供っぽいと言われた老人は、眉間にしわを寄せて更に詰め寄った。

「ああ、本当のことだ。仕方がなかったのさ。少し前、おまえが言ったように、森の民の子供を匿った母親を見逃してやったことがあるんだが、その母親どうしたと思う？」

ルドは、口をへの字に曲げて続けた。

「子供に会いに行く為にガイアエクスプレスに忍び込んで、アール・ダー村に入ろうとしたんだぜ？ ハデスの無修正情報がアール・ダーに入ってみろ、プランDはめちゃくちゃだ。お陰でアール・ダーの入村管理システムを強化する羽目になったんだぞ？ お前のクレジットから人件費を引いてやろうかと思っただくらいだ」

ルドはアイスグレーの瞳で上目づかいにカナメを見つめながら、両手の長い指を開いたまま軽く打ち合わせた。

「それとこれは別件だ。ハデスでは、いつから他人の罪まで償わな

ければなくなつた？ 命を軽く扱うなといつも言っているだろう？」

カナメはルドを睨みつける。

「その命の重みとやらを軽くした張本人に言われたくねーな」

ルドは、端末のキーを乱暴に叩いて終了させると、片手で頬杖をつきながら挑発的にカナメを見上げた。

「……」

カナメは、歯ぎしりをしてルドを睨みつける。

「昨夜のあのチビの目、お前に見せたかったぜ。燃えるようなサファイアブルーの瞳をしていてな。思い出したよ。アイリスをな。あのチビは役に立つ森の民になることだろう」

カナメは、ルドの言葉に益々怒りの度合いが高まった様子でこめかみをピクピクさせていたが、しばしの沈黙の後、無言のまま踵を返すと市長室のドアの開閉ボタンを叩き壊さんばかりの勢いで押した。そして振り向きざま、ルドをねめつける。

「僕が、どうしてこんなじじいの姿のままでいるか教えてやろうか？」

カナメの瞳が、憎々しげにルドを見下ろす。

「あんたを殴り殺さないでいられるようにだ」

カナメはそう言い捨てると、肩をいかせて出て行った。

「やれやれ、歳をとると怒りっぽくていかな」

ルドは唇を歪めて微笑すると、再び何事もなかったかのようにデスク上のモニターを睨みつけた。

地熱でむせかえる路地を抜けて、警備の厳しい居住地区のエリアゲートをくぐる。利き腕ではない方の腕に書き込まれた生体認証システムのデータで通行許可が下りる仕組みだ。

「異常はないか？」

カナメは警備員に問いかける。

「ええ、全く問題ありません」

恰幅のいい警備員は敬礼してカナメに返答した。

「御苦労」

カナメは警備員に軽く敬礼を返すと、無表情のまま中へ入った。カナメはエリアC特別居住地区で一人暮らしをしている。長年の政府への功績を認められ、一人暮らしにしてはかなり広めのコンパ―トメントを用意されていたが、たまに帰るその部屋は、まるで他人の家のように肌になじまずよそよそしい。

カナメは上着をリビングのソファに投げ捨てると、深いため息をついた。

アイリスの名前を聞いて、思った以上に激昂してしまった自分に腹が立つ。年甲斐もなく怒り、怒りにまかせて早足で家まで戻った。息が切れる。

その時、それは唐突に起こった。

「うつつっ！」

激しい胸の痛みがカナメを襲う。机の引出しにある薬を取り出そうともがいたところでカナメは気を失った。取り出しかけた薬の瓶が床に転がり、中の錠剤が床一面に散乱する。

後は、ただ、闇……。

* * *

赤いライトの明滅が緑に変わった途端、カナメは深い沼の底から引きずり出されるように目覚めた。

見慣れた部屋、見慣れた機械、いつもの威圧感のある重苦しい空気。

——カナメ、キブンはどうです？

いつもの気遣わしげな声が頭の中に響いてくる。

「……」

最悪だ。

しかし答える必要などない。ここにいる限りすべてを把握されているからだ。脈拍だって血圧だって脳波だって、体調だろうが、気分でさえ、お見通しなのだ。聞く必要のないことを何故訊くのか。カナメはイライラと起き上がる。

——イライラしていますね？

声はどこまでも優しげだ。

「……」

カナメは、目の前の精密な機械をハンマーでたたき壊す……想像をしてイライラをやり過ごした。

——ハッケンがアトイチジカンオクれていたら、サイセイできなかったかもしれない。ですからイッコクもハヤクサイセイチリヨウをウけるようにスズめていたのですよ。

あと一時間……。

一時間先にあつたはずの別の未来を思い浮かべてみる。冷たい骸となって横たわる自分。老いさらばえて、小さく縮んで見えたことだろう。しかし、その顔は平穏な表情を浮かべているに違いなかった。

深く溜息をつくとき、皺ひとつなくなった自分の手のひらを見つめて、ギョツとした。

自分の手？

——コンカイのサイセイはヒジョウにフアンテイでした。シキソのテイチャクがかなりワルかったので、エリアEにハイルバイはサングラスだけでなく、シャコウフクもチャクヨウすることをスズめます。

再生される度に色素が少しずつ抜けていたのには気づいていた。しかし今回のように一目で分かるほどののは初めてだ。機械の金属部分に映る自分の姿に驚愕する。二十代くらいに見えるが、髪は銀色で瞳はポモナの実のように赤い。

どうして……どうして、こんなにしてまで……。カナメは両手で顔を覆った。

どうしてこんなにしてまで、生き続けなければならない？

——カナメ、プランEの、イチニチもハヤいシドウをネガっています。

分かっているさ。それなしに僕に平穏は訪れない。それまでは餌を鼻面にぶら下げられた馬のように、ただ疾走するしかない。分かっているとも。

カナメは体についている器具を引き剥がし、よろめきながら立ち上がると、壁のスイッチを幽かに震える手で押し、部屋から退出した。

第三話

エリアEは、地上の三分の一の光度に保たれている植物育成ゾーンだ。広さは、中枢機関があるエリアAの約三十倍、地下都市随一の広さを誇る。地上の三分の一の光度とはいえ、通常の生活エリアに比べると格段に明るい。重いドアを開けた途端、目が眩むような光に圧倒されてカナメは踏鞣たたらをふんだ。

サングラスを掛けてさえこれだ。直視すれば視神経をやられるに違いない。なんて様だ。

エリアEの管理棟まではトラムで移動する。いつものことながら、ここは酸素濃度が高い。植物たちの清冽な香り、緑陰で蠢く小さな生き物たちの息づかい、濃密な土の匂い……。どれもが少しだけカナメを落ち着かせ、浄化してくれる。

「よう、カナメ無事再生したんだってな。ずいぶん若返ったじゃないか。じじいのお前を見慣れてたから、一瞬分からなかったぞ」

同じく遮光用グラスを掛けた背の高い男が、発車間近のトラムに乗車してきた。カナメの幼馴染、イブキ・ピラミダリスは、カナメに近寄るなり拳を突き出した。カナメもニツと笑うと拳を突き出して応じる。

再生治療を繰り返し、長い年月を生きてきたカナメと同様に、彼もまた長い人生を背負っている。カナメにとってイブキは、長い時間を共に過ごしてきた親友であり悪友だった。イブキとカナメは同じ年だったが、イブキは既に五年前、八度目の再生をしていたので、今では再生したてのカナメよりも見かけ上少し歳上だ。八度目の再生後にしては色素がしっかり定着していて、未だに褐色の髪を維持している。さすがに目の色素はかなり抜けているので遮光用グラス

は欠かせないようだが。

「イブキ、なんでおまえがここにいるんだ？」

カナメは思わず緩んでしまった顔を引き締め、しかめっ面で迷惑そうに問う。

昔からそうなのだが、イブキの前では何故だか素直になりにくい。遠い昔、まだ二人が学生だった頃、優等生で通したイブキに対してカナメは常に問題児だった。その名残で、未だに彼がいると問題児らしく振舞ってしまうのかもしれないとカナメは時々思う。

「おまえがエリアEに向かったって聞いたから一緒に行こうと思つてな。しかし、なんだ？ そのカツコ」

イブキは呆れたようにカナメの頭からつま先までをジロジロと眺めた。

「遮光服を知らないのか？ それとも、とうとうボケが来たか？」

カナメは渋面で問い返す。

「ついに遮光服の世話になることになったか……日頃の行いが悪いから、再生不良になるんだぞ」

「なに、イブキが作った再生装置がへボなもんだから、こうなつてしまっただけさ」

カナメが澄まして答えると、イブキは目を吊り上げた。

「なんだと！ 俺のマシンは完璧だとも。おまえの分解装置がへボなのに決まっている！」

二人は剣呑な様子でしばらくにらみ合った後、どちらからともなくクスクス笑い出す。

「どちらも改善箇所ありつてとこか？」

イブキが肩をすくめると、

「違うない」とカナメは小さくため息をついた。

狭小な地下都市での生活を継続可能かつ快適にしたのが、彼らの開発した分解再生装置だった。分解再生装置は、あらゆる物質を分

子レベルまで分解し、思いのままに再構築する。最終的に分解再生装置は生物までも分解再生することを可能にし、結果として、再生を繰り返すことにより何百年も生き続ける人間を発生させた。生物、殊に人間に関しての分解再生については、再生の為の様々な厳しい適用基準が設けられていたが、開発者である二人に関しては、無条件で再生治療を受けられることになっていた。彼らが、何百年も生き続けることになった所以だ。ゆえん

管理棟に近づくにつれ、トラムは緩やかに減速を始めた。

エリアEは、地下都市のバイオラングだ。地下都市で必要な酸素をここで賄っている。エリアEを管轄管理しているのがファームの民だ。

ファームの民は緑色の肌を持っていて、皮膚で光合成を行う。大抵が黒髪か濃い褐色の髪を持っているが、中には緑色の髪をしていて、髪でも光合成をするタイプがいるらしい。カナメはまだ見たことはない。

「コブが、倒れている僕を見つけてくれたんだそうだ」

せつかく死ねそうだったのに、という言葉は呑み込む。

「俺が様子を見に行ってくれと頼んだんだ。俺、外せないフェーズだったから」

イブキは背を向けたまま窓の外を見つめて、そう言った。

「イブキが？ 何故？」

「なんとなく、気になったから……」

イブキが振り返る。

「イブキだったのか、どうりで……」

やけにタイミングがいいと思った。

いくら職場で顔をしょっちゅう合わせる仲間でも友でも、居住区にあるカナメのコンパートメントまで来る者は滅多にいない。カナメ自身、そう言う付き合いしかしてこなかったし、そもそもカナメがコンパートメントにいる時間など、ほとんどなかったからだ。今

回、倒れた場所が場所だっただけに、誰かが訪ねて来なければ、恐らく死後数日は経っていた筈だった。

イブキは昔からそう言う奴なのだ。こいつがいる限り死ねそうにないな。

再生治療を受け続ける身になって以来、ずっと消極的自殺願望を持って生きていたカナメは、こっそりため息をついた。

「虫の知らせってやつだな。特におまえに関しては、そう言うのをよく感じるんだ」

イブキは真顔で言った。

「……ありがたいね」

カナメはひきつった笑いを浮かべる。

「おまえ……一人で、易々と死ねると思うなよ？」

突き刺すようなイブキの強い視線に、カナメはふと顔を上げる。

「お見通しって訳だ」

カナメは苦く笑う。イブキは眉間にしわを寄せて、一瞬苦渋の表情を浮かべたが、すぐに弱く笑んだ。

「そう言えば、おまえ覚悟しておけよ。第一発見者のコブは相当動揺していたからな。泣くぞ、あれは……」

イブキは器用に片方の眉をあげて見せる。

カナメは盛大なため息をついた。

ホームで、見上げる程の大男がトラムを待ち構えていた。深い緑色の肌に黒く波打つ髪。髪は無造作に一本に束ねられている。身長百八十センチはあるカナメとイブキでさえ、小柄に見えるほどだ。

「カナメえ！」

大男はそう言うなり、太い両腕でカナメをがっしりと抱きしめた。

「コブ、苦しい……やめろ……」

「イブキに言われて部屋を覗いたら、こっちの心臓が止まっちゃうかと思ったじゃろうがっ！」

そういいながらコブはカナメをぎゅうぎゅう抱きしめた。再び心臓が止まりそうだ。

「ぐはっ、悪かったよ。頼む……放してくれ。もう二度とコブの前では死なない」

息も絶え絶えにカナメは言葉を絞り出す。

「バカたれ！ 俺の前じゃなくても死ぬなっ」

カナメは背中を強かに叩かれて、つんのめった。

エリアEは、ジャングルのような広大な森林と地下都市最大の地底湖からなる巨大なバイオラングエリアだ。ほとんどのファームの民は、ここで森林の世話をして暮らしている。中央部の湖畔に、エリアE唯一の建造物である管理棟が設置されていて、ハル政府から衣食住が提供されていたが、ほとんどのファームの民は各々好き勝手にテントや小屋を作って気ままに暮らしている。

管理棟の最上階には展望台兼談話室が設けられていて、ジャングルを一望することができる。休日ともなると、見学に訪れた子供達でザワザワしているのだが、今は閑散としていた。

ほぼ貸し切り状態の談話室で、カナメはコブのお小言を謹聴していた。

ファームの民の一部は非常に長命だ。まるで大きな木が何千年も黙々と時を刻んで存在し続けるように、コブもまた数百年という長い歳月を、再生治療も受けることなく黙々と生き抜いてきた。だから、さすがのカナメもイブキもコブの説教には頭が上がらない。

「なあ、カナメ、生きちよれば、色々嫌なこともあるじやろう。うまくいかんことだってあるさ。再生するんが嫌じゃち考えるん無理はねえ。じゃけんがよう、生きちよってくれよ。おまえがおらんようになつたら寂しいじやろうが」

節くれだつた指で、顔をゴシゴシ擦っているところは育ちすぎた穴熊みたいだ。

「泣くなよ、コブ。僕が苛めたみたいじゃないか」

カナメは顔を顰める。苛めたのと同じだ、とコブはさらに盛大に鼻をかみ始めた。

「聞いて驚くな？ あのムラサキが心配していたぜ」

イブキが、良い報告だと言わんばかりの顔で口を挟んだ。

「大した間抜けだよ、お前は。本気でムラサキが心配すると思ってるのか？」

カナメは眉間に皺を寄せて吐き出すように言う。ムラサキは子供の頃からの養育係だ。養育係アンドロイドだと言った方がいいだろうか。

「相変わらず嫌ってるなあ。その歳で未だに反抗期か？ アンドロイドって分かっても、ムラサキに関しては、なんか感情移入しちまうんだよな。俺たちがこーんな小さい頃から面倒を見てくれるからかな？ 情が湧くって言うか……」

イブキは、親指と人差し指で五センチくらいの長さを作ってみせた。

「そんなに小さいわけないだろう？」

カナメがうんざりした顔で言う。

「うんにゃ、おめーらは本当にちっこかったっちゃ」

コブが飲み物を運んでくる。

「コブがでか過ぎるんだ」

カナメとイブキが声をそろえた。

「そのムラサキが、コブの所に行って礼を言うべきだってしつこいんで、ここに来たんだ。世話になった、ありがとう」

カナメは仏頂面だ。

「おまえ、それは礼を言ってる態度じゃないぜ」

イブキが呆れたように盛大なため息をついた。

* * *

「で？　なんで皆ついてくるわけ？」

エリアEを出て、カナメは困惑したように振り返る。

「カナメ一人で帰すわけにはいかんじやろうが。おまえの部屋は、あのままになつちよる。発作を起こしちよったから、部屋はかなり荒れとつたはずじゃ」

そう言いながら、コブが気遣わしげについてくる。

「俺は、おまえんちと方角が同じじゃないか。どちらかって言うとおまえがついて来てるように俺は感じるぜ？」

イブキは悪戯っぽく笑んだ。

「ふーん」

滅多に部屋などに帰らない癖にという言葉を懸命に飲み下す。

分かっているのだ。二人がカナメのことを心配してくれていることは……。しかし、それが逆にカナメには息苦しく、重苦しく、そして……。心苦しい。生きることへの執着が、希薄になっていくことを止められない。

「それに、最近物騒な話を聞いちよるからの」

コブが心配そうに声を潜めた。

「物騒な話？」

カナメは首を傾げる。再生治療を受けている間に何か事件があったらしい。

「ああ、それなら俺も知ってる。なんでも、留守中に忍び込んでいて、帰宅したところを襲うんだそうだ。主に女性がターゲットにされているんだってさ。それが、ここだけの話なんだが……」

イブキは声を低めた。

「バラバラにされているらしい」

「バラバラ……」

コブとカナメが同時に呻く。

「被害者は無条件で再生治療を受けられることになってるんだが、第一発見者の心的外傷がひどくてな。中にはもう二度とあんな目に遭った妻を見たくないからと再生を拒む者さえいるそうだ。まだ捜査中の事件だ。詳しい報道はされていない。必要以上に市民を動揺させたくないからな。誰にも言うなよ」

おいおい、お前が言ってるだろう？ 公道で……。

カナメは遠い目でイブキを見つめる。

「ところで、コブのその荷物はなんだ？ まるで泥棒みたいだ。何を持って来たんだよ」

カナメが怪訝そうに問いかける。

「気にせんでいい。じきに分かるからの」

コブは嬉しそうに大荷物を重そうに担ぎ直した。

居住区はエリアCにある。大抵の人は、独りなら一部屋とバス、トイレ、ダイニング付き、家族がいればその人数に応じた部屋が付いたコンパートメントを政府から貸与される。カナメは独りだった。が、長年の政府への貢献を認められて、他よりもかなり優遇された住居を与えられていた。

大股で歩いていったコブが先にカナメの部屋に到着する。大きな荷物をドサリと置き、認証カードキーを取り出そうと胸のポケットをまさぐっていた腕がドアに触れた途端、ドアは勝手に開いた。

「ありや、鍵かけるの忘れちよったか？」

頭を掻きながら荷物を背負い、中へ一歩踏み入れたところで、コブは、はっと息を飲み後ずさりながらドアを閉めた。

「おい、コブ、どうした？ 殺人鬼でもいたか？」

イブキがニヤニヤしながら問いかける。コブは真つ青だ。

「カナメが……倒れちよる」

はあ？ という顔のイブキの後ろから、ゆっくり歩いてきたカナメが問いかける。

「何かあったの？」

カナメは怪訝そうに自分のコンパートメントを覗きこんで瞳目した。

第四話

人が倒れていた。ズタボロの服を着た少年だ。

彼の手の先でオロオロとうろつき回る変な緑色の生き物。奥の小部屋にはガラスのような破片が床一面に散らばって、まるで宝石のように光を乱反射していた。

カナメは奥の小部屋の入り口で呆然と立ち尽くす。

壊れている。粉々に……。

「おい、カナメ、緊急用のインターホンを使うぞ。公安に連絡しよう。殺人鬼には見えないが……」

イブキがインターホンのボタンを押そうとした時、コブが小さい悲鳴を上げた。

「こいつ、刺しよったっ」

見れば、緑色の生き物がコブに向かってトゲのようなものを発射したところだ。

「こら！　まて！」

コブがその生き物を捕まえようと手を伸ばして、届くか届かないかの刹那、倒れていた少年の指先から光がほとばしり出た。白っぽい霧のような光がその緑色の生き物を包み込む。光を纏ったそれは、次の瞬間、薄い透明な翅を得て空中へ舞い上がった。

「森の民だ！」

カナメが呆然と、イブキが驚愕して、コブが恐怖に引きつって、同時に叫んだ。イブキはインターホンを押す手を止めて少年に歩み寄る。カナメは少年の呼吸を確認した。

「生きてる」

「生きた森の民か……」

コブは言葉もないまま、じりじり後ずさった。

「じゃあ、この生き物は植物？　まさか……アイリスの……」

パタパタとうるさく目の前を飛びまわる生き物を、カナメは信じられない気持で見つめた。

枯れかけていた。それは分かっていた。イブキが後数年はもつと保証して封印してくれたカクタス。アイリスの形見。見るたびに黒ずんで、見るたびに溜息をついていたのだ。

それが、飛び回っている。

「生きた森の民を見るのは、久しぶりだ」

イブキが呆然として言った。

「……そうだね」

カナメが同意する。

「どうする？ これ……」

カナメは困惑してイブキを見上げる。

「どうするって……」

イブキは難しい顔で見下ろした。

「公安に知らせたら罰せられるだろうか。フォボス行きかな……」

フォボスと聞いてイブキは顔を歪める。

「エリアE関連の研究施設から逃げ出したのならば、そこまでの罰は課されないだろう。捕まって怒られるくらいじゃないのか？」

イブキも自信なさげだ。

「もし地上から来たんだとしたら？」

二人は顔を見合わせる。

こうしようと提案したのはイブキだった。

まず本人に確認して、研究施設から逃げてきたことが分かれば公安に知らせる。もし、地上から逃げてきたのであれば公安には知らせない。

これは又とないチャンスかもしれない。イブキは続けた。生きた森の民を分解再生したことがない。森の民は厳重に保護されている。それは今までに、森の民の遺体をその力を損なうことなく再生したことがないからだった。

「でも、どこに置いとくんだよ」

カナメは顔を眉間にしわを寄せる。

「ここはお前の部屋だ。所有権はお前にある」

イブキはカナメの両肩をがっちりつかんだ。

「所有権って……」

「これは落し物なんだ。そう思うといい」

「んな無茶な……」

カナメは顔をひきつらせた。

呆然とするカナメには構わず、イブキは少年の観察を始める。自分で切ったのかと疑うほど乱れたショートカットの栗色の髪、森の民特有の色素の濃い褐色の肌、少年にしては華奢過ぎる細い手足。苦しげに閉じられた目の下の隈がいかに病的で、全体的に憐れな様子だ。

「それにしても薄汚れてるな。まずは綺麗にしないと」

イブキは少年の頬をペチペチと叩いた。

「おい少年。起きろ。おい」

ゆすつたり、たたいたりしてみるが、うんともすんとも返事はない。

「しょうがないなあ」

イブキは溜息をつくとシャワールームをオートに切り替えた。次いでカナメに呼びかける。

「おい、その少年の服をむいて連れてきてくれ」

「なんで僕がこんなことしなきゃならないんだか……」

ブツブツ言いながら服を脱がしていたカナメの手が、はたと止まる。

「イブキっ！ これ女の子だぞっ」

「なに？」

イブキがシャワールームから驚いた顔をピヨコンと出す。

「僕はパスするよ。女の子の服脱がすのはイブキの専門だ」

「なんで俺が専門なんだよ。お前は男専門なのかよっ。女だったって、子供なんだから平気だろ。おお！ そうだ。子供ならコブが専門だ。

なんたつて三児の父、十三児の祖父、えつと……何人の曾祖父だっけ？」

遙か彼方で、ことの経緯を見守っていたコブはブンブンと首を横に振った。

ファームの民は大抵、森の民に触れることを極端に恐れる。それは植物同様、その体内に葉緑体を持つからなのだが、それは、植物を操れるならばファームの民も操れるに違いないという思い込みに過ぎない。

「森の民に触るなんて、とんでもねえ。おりゃあごめんだ」
青くなつて固まっているコブに、イブキは無言でゴム手袋を手渡した。

「こげなんでシールドできるんか？」

コブは涙目で問い返す。

「大丈夫だ。それに相手は気を失っている。力は使えまい」

イブキは無責任に言い切ったが、ついさっきカナメの植物が目の前で飛べるようになったことを、コブは動転していてすっかり忘れていた。カナメに至っては全くの無視で、さつさと奥の小部屋の散乱した樹脂を片づけだしている。

コブは溜息をつく少年、否、少女をシャワールームへと運び込んだ。

第五話

ひどい気分だった。体が鉛のように重く、痛い。

少年と間違えられた少女、デイモルフオセカは目覚めると、自分が四角い白い小部屋の寝椅子に横たえられていることに気がついた。慌てて起きあがり、辺りをキョロキョロと見回す。

ここはどこだろう？ 確か、地下都市に侵入して……。

訳あって地上から地下都市へ潜入し、公安から逃げ回り、見知らぬ誰かの部屋に忍び込んだ拳句、そこで行き倒れたのだとようやく思い出す。

デイモルフオセカはドアの隙間から外の様子を覗った。誰もいないようだ。

逃げた方がいい。心の中で警鐘が鳴る。

逃げなくちゃ。今しかないっ。

戸口まで全速力で走る。ドアの外に飛び出すと、周りも見ずに通りへと駆けだした。入り組んだ住宅街の小路を抜けて、人の通りがあるところまで来て一息つく、ようやく辺りに目をやる余裕ができた。

あれ？ 見られてる？

誰もが一樣に、怪しいものを見るような目でデイモルフオセカを見て通り過ぎる。

え？ 何？ 私、何か変？

デイモルフオセカは自分の格好を確認して赤面した。
バスローブだ！

デイモルフオセカが身につけていたのはバスローブただ一枚だけで、他には何も身に付けていなかった。真っ赤になって、二、三歩後ずさると出てきた部屋に慌てて駆け戻る。ドアの前には、銀髪シ

ヨートヘアの背の高い見知らぬ男が腕組みをして立っていた。男は呆れたようにデイモルフオセカを見つめると、低い声で言った。
「まさかバスローブ一枚で通りに出ていく女がいるとは思わなかった」

「ふ、服を返してもらえませんか？」

デイモルフオセカはビクビクと男を見上げる。

女ってばれてるってことは……このバスローブはこの人が……。

デイモルフオセカは事情に気づいて赤くなり、事態が悪化していることに気づいて青くなった。デイモルフオセカの言葉には返答せず、入れという仕草だけで部屋の中へ入って行った男の後を、デイモルフオセカは仕方なくついて行った。

「で？ 君は何者で、どこから来て、何のために僕の部屋にいたのか説明してくれるかな？ ま、とにかく、座ったら？」

男は顎でソファを指すと、自分はダイニングの椅子を引っ張ってきてそれに座った。

「服を返してください。そうしたら、すぐに出て行きます。ご迷惑をかけるつもりはありませんから……」

デイモルフオセカは立ったまま俯く。

「服を返してほしいなら説明をしなさい。迷惑なら既に被っている」男は冷たく言い放った。剣のある言葉にデイモルフオセカはびくりと顔を上げる。

ところが、座って足を組んでいる男の瞳を見た瞬間、デイモルフオセカは息を呑んだ。男の目の色が、深紅で禍々しい血の色をしていたからだ。

なんてひどい充血！

ぐつと体を乗り出して顔を覗き込むデイモルフオセカに、男が反射的に体を引く。怪訝そうに首を傾げる男に、デイモルフオセカは慌てる。

「あつ、あのつ、それ、すぐに冷やしたほうがいいですよっ！」
「は？」

急に男の瞳から力が抜け、ポカンとした表情になる。

「は？　って、痛くないんですか？」

「何を言っているんだ、君は？」

男は眉間にしわを寄せる。

「目が真っ赤ですよ」

デイモルフオセカの声に、男は不快そうに顔を顰めた。

「君の目は瞳が赤くなって痛くなることがあるのか？」

男は呆れて問い返す。

「え？　あ……ああ……」

言われてみれば、普通充血して赤くなるのは瞳ではなく、目の白い部分の方だ。彼のは瞳自体が赤いのだと気付く。赤い瞳など見たことがなかったので、つい動転してしまった。

「君は……初等部で苛められているだろう？　馬鹿だって」

その男は冴え冴えとした目で言い放った。

デイモルフオセカは脱力して、ストンとソファに腰を下ろした。

同時に男の言葉に慄然とする。

人が心配して言ってるのに、なんという暴言。しかも初等部って言いきつたし、この人……。

初等部は六才から十五才までの子供が通う学校だ。デイモルフオセカは、十八歳、高等部だった。やせっぽちのせいかな、年齢よりも幼くみられることはよくあることだったが、確認することさえ考えていない様子の口調にムツとする。

「僕の瞳のことで話を誤魔化そうとしているなら、馬鹿げたことで時間をつぶさないでくれと言うよ。質問に答えなさい」

男の言葉にデイモルフオセカは小さくため息をつく。

だからあ、心配して言っただってば……。

「名前は？」

「……デイモルフオセカ」

「ファミリーネームは？」

「……オーランティアカ」

デイモルフオセカは投げやりな様子で名前を口にする。

「では、デイモルフオセカ・オーランティアカ君、事情を説明したまえ」

この人、裁判官……とかなのかな？ まさか公安だったりしないよね……。

自分とさほど歳は離れてなさそうなのに、やけに威圧感があつて偉そうだ。男の厳めしい表情をしげしげと見つめながら、デイモルフオセカは想像を巡らせる。

「実は……」

デイモルフオセカはソファに腰を下ろすと、言葉を探すように視線を泳がせる。

やっぱり、何とか隙を見て逃げた方が良いよね。この人絶対やばいつて。どうしたらいい？

「あの……その前に、お水をもらえませんか？ 喉がカラカラで……しゃべるのが辛いんです……けど」

デイモルフオセカは上目づかいに懇願する。ダメもとで頼んでみた要求を、意外にも男は聞いてくれたらしい。盛大な溜息をつくと水を汲みに行く。男の背中をチラ見してから、デイモルフオセカは再びドアへと走った。

ダイニングでサーバーから水を汲んでいるとドアが開く音がした。カナメは慌てて振り返る。逃げ出したデイモルフオセカの後姿が一瞬だけ見えた。

「あいつっ！」

イブキめ！ あんなの押しつけやがつて！ しかも、イブキの言葉なんて全然あてにならない。服がなきゃ逃げないだど？ バスロ―ブで逃げる女がいるぞ、ここになっ！

* * *

もう、やめるっ。私、女やめるよ！ バスローブだろうが何だろうが構わない。

デイモルフオセカは構わず逃げることにした。

そもそも、自分が女だからこんなことになったのだ。男ならば、まだオーランティアカの家にいられたはずなのだ。女だから逃げるのにもあんなに苦労することになったのだ。髪だってこんなに短くしちゃったんだし、もう、女なんてうんざりだっ！ やめる！

もう二度とここには入らない、そう心の中で誓ったはずだった。

だけど、行く当てがない。デイモルフオセカは地下へと続く階段を降りたところで蹲った。柵の中へ入る勇氣は……まだない。

カメラリア……。

デイモルフオセカは頭を抱え込んだ。お尋ね者なのだということを実感する。その時、唐突に強い力で柵の中に引きずり込まれた。

「おいっ！ おまえ、ヒースの所にいたやつだろう？」

野太い男の声に、デイモルフオセカはびくりと顔を上げる。

地下都市に来てすぐに、わけも分からぬまま下水道へ逃げ込んだ。下水道は、ハル政府の敷いた体制からドロップアウトしたお尋ね者の達の巢窟になっていた。そして、そこで出会ったのが、ヒースとカメラリアだ。ヒースは森の民であることを隠し、下水道の一角に身を潜めて暮らしており、カメラリアは森の民の管理官になることを拒否して下水道に逃げ込んでいた。デイモルフオセカは覚えていなかったが、目の前に居るこの男は、ヒースの部屋で自分を見たことがあるらしい。

「へえ、いい格好してるじゃねーか」

男はデイモルフオセカの胸倉をぐつつかんだ。

「はなしてよっ！」

デイモルフオセカはめちやくちやに腕を振り回した。意図せずして拳が男の顔を殴る。男は顔を顰めるとデイモルフオセカの頬を何度も叩いた。最後に拳で鳩尾みぞおちを殴られて、デイモルフオセカは崩折れた。

「ぐぐっ」

だからやめるって……言ったのに……女なんてやめるって。この力の差は反則でしょう？

上からのしかかってくる男の吐息に顔を顰めながら心の中で愚痴る。

その時辺りが青白く光った。天井からパラパラと光の粒子が落ちてくる。

「なんだ？ こりゃ？」

男がそれに氣をとられた一瞬、デイモルフオセカは男から逃げ出そうともがく。しかし、それくらいのことでは逃げられるはずもなく、男の意識はすぐにデイモルフオセカに戻ってきた。

「おまえもヒースと同じ化け物なんだな？」

男はニヤニヤしながら言った。

「でも関係ねーさ。こんな光の粒がぶったって、何の害もねー」

男の言うとおりだった。苔ほどの力では、いくら森の民の力を使おうと、できることは高が知れていた。バスローブの裾から差し込まれた男の手が、内またを撫でる。

気持ち悪い……。

悪寒とともに、体の端々から血の氣が引いていくのをデイモルフオセカは感じていた。意識さえばやけてくる。森の民の力は命を消費すると言われる。それ程、体力を消耗するのだ。デイモルフオセカを絶望感が包み込む。何度か空しく抵抗した後、デイモルフオセ

力は意識を手放した。

カナメがディモルフオセカを見つけたとき、ディモルフオセカには意識がないようだった。男が一人、覆いかぶさっている。

それを見た瞬間、カナメの頭に一気に血が上った。

「おい！」

カナメの声に、男は顔を上げて振り返った。

「なんだあ？ おまえ」

地下都市の明かりを背にして立っているカナメを、男は胡散臭げに目を眇めて睨みつけた。下水道にはびこっているチンピラだ。それはその男の風貌を一目見れば分かった。

「今すぐ、立ち去れ。そうすれば公安には黙っていてやろう。今日のところは見逃してやる」

下手に騒いで、彼女を盾に取られては困る。

「なんだとお？ おまえなんぞに何のかんの言われる筋合いはね！ お前こそ立ち去りな！」

男は立ち上がるとカナメに詰め寄ってきた。

腕つぶしに自信があるらしい。好都合だ。だてに長く生きてきたわけではない。

久しぶりの手合わせに高揚する。

いきなり繰り出された拳を避けると、カナメはすばやく男の後ろに回り込み、背後から腕を締め上げた。

「うわっ！」

男が悲鳴を上げる。

「他愛もないな。どうする？ このまま腕を折ってしまおうか？」
嗤いを含んだ余裕のある声だ。

「うつつ」

脂汗を流し始めた男は、カナメを振り返って驚愕の色を浮かべる。強い光を湛えた瞳は血のように赤く、静かだが冷酷で残酷な色を湛えていた。まるで獲物を甚振って楽しんでいる肉食獣の瞳。

「た、助けてくれっ」

男の懇願にもかかわらず、カナメは腕を締め上げた。ゴリユツと嫌な音がして、男の悲鳴が下水道に響き渡る。

「しばらく悪さができないように、外しておいてやったよ」

まるで、服についていたゴミをとってやったよとでも言うように、にこやかに言うと、カナメは手を離れた。男は痛みと恐怖に顔を歪めた後、だらりと垂れた腕を庇いながら一目散に下水道の闇に消えて行った。

「じじいのままでなくて良かった。若いと、やはり体の動きが素早くていいな」

一人呟くと、カナメはデイモルフォセカのもとへ歩み寄る。まくれ上がったバスローブを直し背中に担いだ途端、その体の冷たさに驚いた。

「もしかして森の民の力を使ってしまったのか……」

本来ならば、壁の高い位置にしか生えていない光苔が、床面に散らばっているさまを見てカナメは納得する。

「急ごう」

カナメは顔を顰めると足早に立ち去った。

地下都市ハデスは、地熱の為に気温が常に高い。冷やす装置や器具なら五万とあるが、温めるものは乏しかった。暖かい飲み物くらいだろうか。それさえあまり人気がないので、メニューの隅っこに数種類ある程度だ。

カナメは空調を切ると、寝室から剥がしてきたブランケットをデイモルフォセカに巻きつけてソファに横たわらせた。

「おい、君、しっかりしなさい」

蒼白な顔を両手で包んで揺する。ずいぶん強く叩かれたのか、目の横の皮膚が内出血していた。カナメは自分の迂闊さに舌打ちする。あんな格好をさせていた以上、外へ出られないようにしておくべきだったのだ。彼女は逃亡中だった。止むにやまれず逃げだす可能性

があつた。

「……寒いよ、ママ……」

まだ、子供なんだ。うっかりしていた。
カナメは深いため息をついた。

第六話

「君、身分証は？」

威圧感のある巨体の警備員は、その厳つい顔を努めて和らげ、体を屈めて話しかけてきた。

「み、身分証？」

デイモルフオセカはうわずった声で呟くと、反射的に服のポケットをまさぐった。身分証など持っているはずがないのは分かっていたが、予想していなかった質問を突然ぶつけられて、咄嗟にとった行動が良い結果をもたらした。

「家に忘れてきちゃったのかなー？」

警備員は悪戯っぽく笑った。

「ほらほら、取りに帰る！ 身分証を持っていないと公安に連れて行かれちゃうぞ？」

警備員は小動物でも追い払うように小さく手を振った。

「身分証忘れかい？」

通りすがりの別の男が警備員に声をかける。

「そうらしい」

警備員は笑って返事をした。男が左腕を軽く曲げてスキャナーに近づけると、モニターに緑色の Accepted の文字が浮かび上がった。警備員がゲートを開ける。

「子供も身分証じゃなく、生体認証システムを導入すれば良いのに、そうすれば忘れることもない。なあに、痛いっていったって、ほんの小一時間我慢すれば済むことさ。政府は子供に甘いからなあ」

男はそう言いながらゲートをくぐり抜けた。

「まったくさ」

警備員もにこやかに相槌を打つと、男に軽く手を振る。

デイルフォセカは、男たちのやりとりをしばらくの間ボンヤリと眺めていたが、間もなく、自分がこれから立ち去らなければならないことに気がついた。なぜなら、警備員が不審気な顔でデイルフォセカを見つめ始めたからだ。

地下都市ハデス、人はこの都市をそう呼ぶ。薄闇のこの都市に、死を司る神ハデスの名を冠したのは、皮肉なのか、自嘲なのか。

あのゲートを通るには身分証が必要だ。分かったのはそれだけ。トボトボと歩きながらデイルフォセカは思案する。思うことは一つだけ。地上と地下都市を繋いでいるガイアエクスプレスの駅から、少しでも早く、少しでも遠く離れなければならないということ。

見つければどうなるのか……実は自分でもよく分かっていない。でも、家に連れ戻されて、叱られて終わりという生半可な罰では終わらないことだけは分かっていた。

更に下へと続く、細くて、暗い階段を見つけたのは、間もなくのことだった。地下都市から更に下へ降りる階段。ゲートをくぐらずに、このエリアを出られるかもしれない、自らを鼓舞し足を踏み入れた。

下りた先の錆びついた門扉をガタガタ揺ると、金属が擦れ合う厭な音をたてながら開き、僅かばかりの隙間ができた。そこは下水道だった。黴臭く、湿っていて、暗い。それでも目が慣れてくると、ぼんやり光る壁面に照らされて、内部の状況がつかめてきた。生活排水用の下水道らしい。ぬるそうな汚水が流れる溝の脇には狭い歩道があつて、どこまでも続いている。下水道は曲りくねり、分岐し蜘蛛の巣のように張り巡らされていた。デイルフォセカはゲートをくぐり抜けられる方角を目指して歩きだした。歩いた時間はほんの数分。後悔は一瞬にしてやってきた。

「ときなさいよっ！」

そう喚^{わめ}いてデイルフォセカを突き飛ばしたのは、長い髪をなび

かせて走ってきた女だった。彼女の後ろから、数人の男たちが追いかけてくる。突き飛ばされたデイモルフオセカは、壁に背中を強かに打ちつけた。蹲ってしまったデイモルフオセカに足をとられた男の一人が転んで舌打ちをする。逃げていた女は、すぐに捕まってしまったようだった。男たちは女を捕まえると、デイモルフオセカが蹲っている場所まで戻ってきた。

「あんたのせいよ！ そんな所でぼんやり突っ立ってるからっ！」
女は蹲っているデイモルフオセカを憎々しげに見つめて言った。

「あ、あの、ごめんなさい」
デイモルフオセカの震えるか細い声に、男たちからヒューという口笛が起こる。

「暗いから、細っこくて分かんなかったが、こいつも女だぜ」
男たちの下卑た嗤い声があがる。不穏な空気にデイモルフオセカが後ずさると、デイモルフオセカに躓いて転んだ男にぶつかった。汗臭く、酒臭いすえた匂いの息が顔にかかり、デイモルフオセカは顔を顰めた。

「おっと、まだお詫びをしてもらってねーなあ。お前のせいで、随分派手に転んじまったんだぜ？」

男はそう言いながら、デイモルフオセカの背中をドンッと力いっぱい押した。

「ご、ごめんなさい」

デイモルフオセカの震える声に、男たちは更に下卑た笑い声をあげた。

次の瞬間、デイモルフオセカには何が起こったのか分からなかった。男に押されて前につんのめった体を別の誰かが、更に別の向きに力任せに押したのだ。押されたデイモルフオセカの体は、女を捕まえていた男をなぎ倒し、もろとも下水の中に落下した。最後に聞こえたのは、女の「はなせよっ！」という悪態と、男たちの怒号と、共に落下した男の悲鳴だった。

* * *

すすり泣く声が聞こえた。あれは誰の声だったか……。

『ちがう、ちがうわ。この子は森の民なんかじゃない!』

必死な形相で叫んだ女の……しかし、その顔はのつぺらぼうで輪郭しかない。

デイモルフオセカは、はっと目を覚ました。

薄暗い部屋の中。扉が僅かに開いていて、隣の部屋の明かりが漏れ入ってくる。女の声は隣の部屋から実際に聞こえていた。拒絶し、すすり泣き、呻く声。幾人かの男たちの息を弾ませた声や、他にも女が居るのかさざめき笑う声や、嬌声も聞こえる。デイモルフオセカは耳を塞いだ。

その時、部屋の奥から小さな足音が響いて、ドアをきっちり閉める。隣の部屋の音は遮断され薄暗い部屋は静寂に包まれた。

「おまえ、下水に落ちてラッキーだったな。臭くてヤルきにもならないって、みんな文句言ってたぜ?」

デイモルフオセカは驚いて声のする方に目を向けた。デイモルフオセカと同じくらいの年頃の少年が部屋の隅のソファに座っている。

「あ、あの?」

「俺はヒース、おまえは?」

ヒースと名乗った男は、灰汁色の髪とアイスグレーの瞳を持っていた。

「デイモルフオセカ……」

「なんだって? ずいぶんややこしい名前だな」

ヒースは顔を顰めた。

「友達は、私のことをディムと呼ぶけど……」

「俺は、おまえの友達じゃない」

「……そだね」

「でもデイルと呼ぶか。面倒くさいからな」

「……うん」

「じゃあデイル、説明しておこう。ここで無事に生きていたいと思うなら、俺の言うことを聞くことだ。この男たちは俺の言うことなら聞く。俺の一存で、おまえは男たちの慰みものにもなるし、無事でいられることにもなるという訳だ」

ヒースはそう言っで意地悪そうに笑った。

「あの人は、あなたに逆らったの？」

デイルフォセカは閉じられたドアを見る。

「あの女は話しにならなかった。喚き散らして人の話を聞かないから、好きなようにしろって言った」

「ちがう……」

デイルフォセカは黙り込む。

「ちがうって何だ？」

ヒースは怪訝そうに眉間にしわを寄せた。

「あの人は怯えてただけ。あなたの話を聞かなかったんじゃないよ、聞けなかったんだよ」

デイルフォセカは、あの女の追い詰められた目を思い出す。

「おまえ、馬鹿じゃないの？ あの女は自分が逃げる為に、おまえを盾にして男もろとも下水に落としたんだぜ？」

ヒースは馬鹿にしたように嗤った。

「分かつてる……分かつてるよ」

デイルフォセカは小さくため息をついた。

何時間か経った後、隣の部屋は静かになった。男たちがいなくなったのを見計らって、デイルフォセカは女を奥の部屋へ運び込んだ。ヒースが渋々許可してくれたのだ。女は半裸状態で、いたるところに内出血の痣があった。

「ひどい……」

デイルフォセカは、ヒースが自分に貸してくれた大きめのタオル

ルを彼女に羽織らせる。彼女がどういう目に遭ったのか分からない歳ではなかったが、何をしたら少しでも楽にしてやれるのか、知識も経験もなかった。

女はキツと恨めしそうな顔でデイモルフオセカを見上げた。

「あんたのせいよ。あんたのせいで、あたしの人生はめちやくちゃ。なんであたしが……なんであたしが、こんな目に遭わなきゃならないの？」

赤い髪を振り乱して、女はわめき散らした。

「……あなた、どうして、あんな所にいたの？」

デイモルフオセカは躊躇いがちに問いかける。

「それはあたしのセリフでしょ？ あんたがあんな所にいるからっ！」

女はまくしたてた。

「そうじゃなくて、どうして下水道なんかにいることになったのって訊いてるんだけど」

「逃げてるからに決まってるじゃない。こんな所に好きで来ると思う？ あたしは森の民の管理官なんかになりたくなかったのよ！」

あんな人たちと関わりたくなかったのっ！ 拒否したら、国家反逆罪になるぞって脅されて。だから逃げ出したのよ！ 他にどうしろって言うの？」

デイモルフオセカは女の言葉にたじろいだ。思わずヒースの顔を見ると、彼は能面のような顔をして女を凝視していた。

「あの……森の民と関わりたくないって、それって……」

デイモルフオセカは口ごもる。

「当然だな」

その時、突然ヒースが甲高い声で言った。

「あれって、感染^{うつ}るらしいじゃないか？ 俺だつてごめんだ」

「感染^{うつ}るって……」

何が？ と訊きそうになってデイモルフオセカは顔を歪める。無意識に女から体を引いてしまう。その僅かな動作に女が反応した。

「あたしは関わってないわ。感染ってないわよ！」

女に睨まれて、デイモルフオセ力はびくりと肩を震わせた。

「だが、あんた、もう元の生活には戻れないぜ？」

ヒースは冷たく言い放つ。

「ここは腐りきったハデスより更に腐った場所だ。もう分かっているだろう？ここで、俺の言うことを大人しく聞いて生きていくか、別の場所へ逃げてそこで更にひどい目に遭うか、どっちかな」

「なによそれ。あんた何者なの？」

睨みつけて咬みつく女に、ヒースは容赦ない平手打ちをくらわせた。

「人に名前を聞く時は、まず自分の名前を名乗るのが礼儀ってものだ」

その顔は憎悪に満ちていた。

「あ、あたしはカメラリアよ」

女は怯んで、うわずった声で名乗る。

「それでいい。俺はヒース。カメラリア、一ついいこと教えてやろう。ここに住んでる男たちだがな、まだたくさんいるぜ。ろくでもない奴らばかりさ。この部屋だけは、俺が許可しなければ入ってこれない。この部屋にいられるかどうか、あんた次第ってことだ」

ヒースの言葉にカメラリアはびくりと体を震わせた。

「ねえ、ヒース、訊いてもいいかな？」

気絶するように眠り込んでしまったカメラリアにブランケットを掛けながらデイモルフオセ力は話しかけた。隣の部屋は酒盛りでも始めたのか、ドアを閉めていても騒々しい声が微かに漏れ聞こえてくる。

「なんだ？」

小さな明かりで本を読んでいたヒースが顔を上げた。

「ヒースは、どうしてここに……」

デイモルフオセ力の言葉をヒースが遮る。

「俺がどうしてもここに居るかは教えるつもりはないぜ。事情があるから、それだけだ」

そう言い放つと、ヒースは再び本を読み始めた。

この部屋には上等そうな家具が一式揃っていた。柔らかそうなスプリングのきいたベッドも、温かな色のソファも、読書用の小洒落たランプも、小さなテーブルと椅子も、飢えないだけの食料と水も、書物も……。

「外の男の人たちは、ヒースの何なの？ 友達？ 親戚？」

「冗談はやめてくれ。俺が一番関わり合いになりたくない連中だ」

ヒースは不快そうに顔を顰めた。

「勝手に住み着いてるんだ。追い出す理由もないし、面倒くさいから放つてある。それだけだ」

「ふうん。ずっとここに一人でいたの？」

「ずっとつて訳じゃない。現に、今はおまえらがいるだろうが？」

「……お父さんやお母さんは？」

「親父は時々会いにくる」

「お母さんは？」

「うるさい。俺は本を読んでるんだ。静かにしろ」

ヒースは眉間にしわを寄せる。

「ごめんなさい……」

デイモルフオセカは俯いたと同時に、自分の服から立ち上る臭いに顔を顰めた。布を引っ張り上げて臭いを嗅いでみる。クラクラするくらい臭い。デイモルフオセカの仕草にヒースが失笑する。

「ここにはシャワーがないんだ。今日はシャワーのあるところまで行けない。その古い服を出せよ、新しいものと替えてやる。体は拭くくらいしかできないな」

部屋の隅の暗がりですく。ヒースはその間に汚れた服をどこかに持っていき、代わりに新しい服を用意してくれた。

「ありがとう。ごめんね。こんな新しい服……良かったの？」

ヒースが持ってきてくれた服は真新しく、地下都市流行の服ら

しく、今まで着ていたものとは随分デザインが違っていた。
「良かったも何も……普通だろ？　こんなの……」
ヒースは不思議そうに首を傾げた。

* * *

次の日目覚めると、デイモルフオセカの足には細い紐が結ばれていて逃げられないようにつながれていた。

「これ何？」

デイモルフオセカは茫然と紐を持ち上げる。

「紐だ」

ヒースは、読んでいた本からちらりと目線を上げてデイモルフオセカを見ると鼻で笑った。

「そんなの、見れば分かるよ。なんで私の足に紐が結ばれてるのかって訊いてるんだけど……」

「この部屋の中でなら自由に動き回れるように調節してある。問題はないだろう？」

デイモルフオセカはあつけにとられてヒースを見る。ふと気づくとカメリアの姿がない。

「カメリアは？」

「あいつなら、出て行った。馬鹿なやつだ。もう元の生活になんて戻れやしないのに」

元の生活……デイモルフオセカは小さな溜息をついた。

「ねえ、ヒース、私、話しておかなければならないことがあるんだけど……」

デイモルフオセカはぽつりぽつりと言葉を選ぶように話し始める。ヒースは顔をあげてデイモルフオセカを見つめた。

「昨日話していた、森の民の話んだけど、実は、私ね……」

深刻な顔をして、視線を泳がせるディモルフォセ力をヒースが遮った。

「そんな話、どうでもいいじゃないか。もうちょっとこっちに来いよ。そっちは暗いだろ？」

ヒースが近寄って来たので、ディモルフォセ力は咄嗟に身を引いた。ヒースはぴくりと体を強ばらせる。

「そ、そうだ、この部屋、もっと明るくしようか？ 外に行けば光苔がたくさんあるんだ。とって来る」

ヒースは少し慌てた様子でドアの外に出た。

「よう、ヒース。お前がこんな時間に部屋から出てくるとは珍しいな」

「！」

しまった、まだ男たちが部屋に残っている時間だった。

そう気付いて引き返そうとしたヒースは、あっという間に男たちに囲まれてしまった。

「あの部屋にいなきや、あの妖しい術は使えない。そうなんだろ？ リーダー格らしい男がにやにや笑いながらヒースに近づいてくる。

「勘違いもいいところだ。どこにしようが問題はない」

ヒースは言ったが、その声は明らかに上ずって震えていた。

「そうかな？」

男はズいっと近寄ってヒースの顎をつかんで上向かせる。

「昨日捕まえた女を逃がしたようだが、逃がしていいと誰が言った？」

「逃がしたんじゃない。勝手に逃げたんだ」

「逃げないようにできたはずだろ？ その証拠にもう一人のやつは逃げないようになっているか？」

「……」

「おまえ独り占めしようなんて考えてるんじゃないだろうな」
男は凄んだ。

隣の部屋からヒースのどなり声が聞こえた。デイモルフオセカは驚いてドアに駆け寄る。隣の部屋でヒースが男たちに囲まれて羽交いじめにされたまま殴られていた。

「ヒース？」

デイモルフオセカは瞠目する。

「俺の部屋に勝手に入るなっ」

ヒースの制止にも関わらず、男たちはニヤニヤしながら奥の部屋にズカズカト入り込んできて、デイモルフオセカの腕を掴んだ。

「！」

抵抗するデイモルフオセカはあっさりと拘束され、床の上に乱暴に押し倒された。両腕を押さえつけられ、もう一人がデイモルフオセカに馬乗りになる。

「おまえは、そこで指でもくわえて見てな」

男たちはヒースを散々殴った後、両手両足を縛りあげて床に転がした。

胸の辺りの布をビリリと破かれたその瞬間、デイモルフオセカの目の前が真っ白になった。気を失った訳ではない、実際に辺りが真っ白な光に包まれたのだ。

それまで、紐だと思っていた足の拘束がシュルリと解け、空を切ってしなやかな鞭のように男たちに襲いかかった。男たちがかわした紐の鞭が部屋の壁に当たり、轟音とともに壁に亀裂が走る。

「うわっ、なんだこりゃ！」

男たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「おまえ……森の民なのか？」

再び静寂が戻った部屋の中、蒼白になったヒースがデイモルフオセカを見つめる。

「わ、私……説明しようとしたんだよ？」

デイモルフオセカは、上ずった声でヒースに話しかける。

「出てけ、出て行けよ。感染するだろう！俺は森の民なんかじゃない！おまえのが感染っただけなんだ。そうだ、おまえがうつしたんだ。すぐに治る。だって、俺は森の民なんかじゃないんだから！」
ヒースはまくしたてた。

やがて完璧な沈黙が部屋を支配した。デイモルフオセカは服の乱れを整えると、ヒースに微笑んだ。

「ヒース、さよなら。元気で……」

デイモルフオセカは俯くと部屋を後にした。

鞭になっていた木の根がゆらゆら揺れる。

——さよなら、デイモルフオセカ。

その木がそう囁いたのを、デイモルフオセカは確かに聞き取っていた。

あの木は、もう随分前からあそこにいて、ヒースに寄り添ってきたのだ。ヒースに疎まれても、利用されるだけだとしても……保護者として……。

森の民の居住区、地上にあるアール・ダー村から逃げ出して地下都市ハデスに来たデイモルフオセカは、自分が地下都市のことを何一つ知らないのだという現実に打ちのめされていた。森の民が忌み嫌われている現状も、その理由さえ、彼女は知らなかった。

第七話

惑星ハルには文明が存在する。

文明を築いたのは人類。現存する種族は『一般人』と『森の民』と『ファームの民』の三種だ。一般人とファームの民は地下都市ハデスで暮らし、森の民だけが、地上の森アール・ダー村で暮らしている。

一般人は強大な科学技術力を発展させ文明の保持に力を注ぎ、ファームの民は自らの体に葉緑体を持ち光合成を行うことができる。そして、森の民は植物を操る能力を持ち、その力を行使することで文明を支えてきた。

森の民は、そのほとんどが森の民の親から生まれるが、ごく稀に一般人から生まれることがある。能力が発覚すれば、政府により捕獲され、管理され、利用される。

育児に関して、一般人の親の心配事は主に三つ、病気、学校の成績、そして、森の民の力を発症すること、と言われている所以だ。ゆえん

* * *

目を覚ますと、デイモルフオセ力は誰かの腕に抱きかかえられて毛布に包まっていた。バスローブの布を通して伝わってくるその人の体温が温かく心地よい。しかし、その人の顔を見てデイモルフオセ力は驚愕した。さっきのあの赤目男だ！デイモルフオセ力はもがいて逃げようと試みる。

「……ん」

男が身じろぎをした。

デイモルフオセカは、はっとして動作をやめると、男の顔を覗き込む。男は疲れているように見えた。青白く、眉間に寄った皺が苦悩しているように見える。

「痛っ」

デイモルフオセカは目のあたりを押さえる。痛い。さっき逃げ込んだ下水道で男に殴られたのを思い出した。

この人が助けてくれたの？

デイモルフオセカは考え込む。少なくとも、この人は事情を聞くうとしてくれたのだ。それがどれ程感謝すべきことなのか、デイモルフオセカは、ようやく気づいた。

「僕はカナメ・P・グラブラという」

「グラブラさん……あの、随分ご迷惑を掛けてしまったみたいで……ごめんなさい。それに……」

デイモルフオセカはおずおずと男を見上げる。

「カナメと呼んでくれて構わない」

カナメの言葉にデイモルフオセカは小さく頷いた。

「それに、あの……助けていただいたみたいで……ありがとうございます……」

「礼には及ばない。君を保護していた僕には、君の安全を確保する責任があった」

「はあ」

安全を確保する責任……かあ。ずいぶん硬い職業の人なんだろうとデイモルフオセカは検討をつける。

「それで、さっきの続きだが、君の事情を説明してもらいたいんだけどね」

デイモルフオセカは視線を落したまま、観念したように話し始めた。

「簡単に言うと……規則を破って逃亡中です。あの……私は……通報されるんでしょうね？」

デイモルフオセカは頼りなげにカナメに視線を合わせる。どうせ通報されるならば、ここで事情を話すことに意味はない。

「公安に通報するかどうかは君次第だ。僕には事情を聴くだけの権利があると思うよ。しかし君が本当のことを話してくれないのなら、今からすぐにも公安に連絡する。僕には君を匿う理由はないし、メリットもないからね。ただ君が、僕の植物を助けてくれたみたいだから、少しばかりお礼をしてもいいとは思っている」

「植物？　もしかして、アレオーレのこと？」

言ってから、デイモルフオセカははっと息を呑んだ。

もしかして、森の民だってこともばれている？　状況はどんどん悪くなっているようだ。

そういえば、この人は感染することが気にならないのだろうか？

森の民の力は感染すると思われていて、地下都市では嫌われているらしいことを、デイモルフオセカは知ったばかりだ。しかしカナメは、デイモルフオセカが森の民であることには特に気にする様子もなく続けた。

「アレオーレ？　こいつそういう種類の植物なの？　それとも個体の名前？」

カナメは胡散臭そうに、アレオーレがパタパタと部屋の中を飛び回っているのを目で追う。

アレオーレは固体の名前だ。種類はカクタス。

カナメの部屋に忍び込んだ時、デイモルフオセカは枯れかけていたアレオーレを見つけた。助けるつもりで力を使ったら使い過ぎたのだ。疲労していて力のコントロールがきかなかった。否、コントロールすることが元々苦手なのだ。結果、アレオーレは植物でありながら自分で移動できるようになり、しかし逆に力を使い果たしたデイモルフオセカは昏倒したのだった。そして、そのアレオーレは、デイモルフオセカが意識を失う直前に見た時とも形態が異なっていた。羽などなかったはずだ。もしかして、意識がないうちに力を使ってしまった？　この人はそれを見たの？

「ずいぶん昔に友人からもらった植物なんだけど、何年も経つうちに元気がなくなっていてね。何をしてもダメだった。枯れそうになつていたんだ。そこで特別樹脂を作ってもらって、できるだけ枯れないように封印をした」

カナメは一呼吸おき、デイモルフオセカの反応を見る。俯いて、つま先を見ていたデイモルフオセカの視線が揺れている。

「……アレオーレはアール・ダー村でもらったんだ」

カナメは試すように、様子を窺うように言葉を紡いだ。カナメの言葉にデイモルフオセカははっと顔を上げる。

「アール・ダー村に行ったことがあるの？」

デイモルフオセカの中で警戒と信頼がせめぎ合う。

「ずっと昔にね。僕の友達アール・ダー村に住んでいた森の民だった」

カナメは探るようにデイモルフオセカを見つめた。

「私は……私も森の民なの。アール・ダー村から……逃げて来たの」
デイモルフオセカはためらいながら小さく呟いた。カナメは小さく溜息をつく。

やっぱりそうかという落胆と、イブキの案に乗るためには、かなり規則違反をしなければならないという途方に暮れた思いと、しばらくこの子をここに置かなければならないことへの暗澹とした思いが、ないまぜになった為だった。

できるだけ穏便に、しかも素早く行う方がいいだろう。かわいそうだが、少し従順になつてもらう必要があるそうだ。

カナメは目を細めると、威圧的に響くように声を低めた。

「君はさつき規則を破って逃げていると言ったよね」

カナメの問いにデイモルフオセカは小さく頷く。

「なんという規則違反だか、君はわかつてる？」

デイモルフオセカが戸惑ったように首を振る。

「では、教えてあげよう。ハル連邦憲法第三章第四十一条、国民としての任務を遂行する義務の放棄。もしくは、刑法第二百四十七条

式項、任務違背行為にあたる。しかも、森の民の居住地は厳しく政府によって決められている。正当な手続きなしに地下都市に侵入することは国家反逆罪だと言われても反論できない。最悪の場合、分解処理になる可能性も否定できない」

デイモルフオセカは息をのむ。国家反逆罪……分解処理……。なんて重く、恐ろしいその言葉の響き。この人は裁判官か、もしかしたら公安の人なのかもしれない。デイモルフオセカは既に捕獲された気分で頂垂れたが、カナメの容赦ない言葉は続いた。

「君、ご両親はいるの？ 未成年だよ。監督不行き届きということで、さて、どこまで責任をとらされるだろうね。いくら森の民だろうと容赦されないと思うが……」

カナメの威圧的な口調に、デイモルフオセカは驚愕して顔を上げた。

「！」

パパとママにまで罰が及ぶ？

たぶんこうだろうと自分で考えていることと、他人からそうだとされることには雲泥の差がある。デイモルフオセカは自分の置かれている状況が思っていた以上に悪いことに愕然とする。

分解処理……。地下都市では罪人を罰する為に行われると噂で聞いていたことはあったけど……。

自分だけならまだいい、でも、両親を巻き込むかもしれないことをデイモルフオセカは失念していた。周りを顧みなかった自分の軽率さに呆然とする。どうしたらいい？ 体がかくかくと震えて来る。

「で、何をやった？」

カナメの質問の意味が分からずに、怯えたデイモルフオセカの瞳がカナメを注視する。

「殺し？ 盗み？ 何かやったから地下都市に逃げてきたんだらう？」

「……何もしてないっ」

声が震える。

「じゃあ、何のためにこんなところまで来た？ 森の民の住居法を知らなかった訳じゃないだろ？ 犯罪になることがわかってそれを犯すということは、それ以上の罪を犯したとしか考えられないんだけどな」

「本当に何もしてない。ただ……逃げただけだもん……」

滲んでくる涙を手の甲で何度も拭う。

「何があつた？」

何か事件にでも巻き込まれたかとカナメは思いつく。

「……嫌だったの……私は、誰にも悲しんで欲しくなくて……」

カナメは無言のまま、話の続きを待つ。

「……ねえ、どうして森の民はアール・ダー村から出てはいけなの？ なのに、どうして死んだら地下都市に送られるの？ どうして……私たちには選択の余地がないの？ わからない、わからないよ。私達は政府の操り人形じゃないよ？」

疑問だらけなのだ。納得ができなかったから、前に進めない。前に進む為にアール・ダーを逃げ出した。

「……結婚しなさいって政府から命令が来たの。でも相手の人には恋人が居たんだよ？ 私たち『森の民』には愛し合う人を決める権利さえないの？」

流れる涙さえぬぐおうともせずにデイモルフオセ力は続けた。

「ハル政府にとって森の民って何？ 有益な植物を作り出す為だけの道具？」

自分だけの都合で逃げたつもりはなかった。だけど、自分以外の誰かに迷惑がかかるかもしれないことを慮おもんはれなかった。

カナメは眉間にしわを寄せる。

ハル政府のやり方が強引なのは百も承知だ。それは、一般人に対してもファームの民に対しても同様の事。ハル政府が強権を発動するのには、きちんとした訳がある。しかし……森の民はその理由を知らない。森の民たちは、母なる惑星ハルが危機的状況にあることを知らされていなかった。

『カナメ、私の子どもたち、森の民のことをお願いね。きっと、たくさん辛い思いをするわ。力を持っている為に、私みたいに辛い思いをする。だから力を貸してあげて……お願いよ』

かつてアール・ダー村で、アイリスはそう言った。

アイリス、君の心配が、こんなに時間を隔てた今現実になっているよ。

そして胸の内で静かに決心する。

何かやらかしているのならば、イブキの案に乗ってもいいかと思っていたが……この子はダメだ。イブキには悪いが、なるべく速やかにアール・ダーへ帰した方がいい。

カナメは小さく息を吸うと、俯いてぼたぼた涙を落としている森の民に対峙する。

「そうやって規則を破って地下都市にきたところで、そんな疑問に答えがもらえると、君は本気で考えているのか？ そんな子供じみた考えで、こんな所まで来るなど分別がなさすぎだと思わないか？

君はご両親がどれほど心配するか考えられなかったのか？」

カナメは眉間に皺を寄せてデイモルフオセ力を睨みつける。

「……君は法を破ったんだ。公安に掴まれば、当然無事では済まされない。無事に家に戻りたいのならば、大人しく言うことを聞くことだ。さもなければ、即刻公安に引き渡す。その場合は両親ともども刑罰は免れないだろう」

シンと底冷えのする眼でカナメは突き放すように言った。

デイモルフオセ力はゴクリと唾を呑みこむ。

やつぱりもう一度、逃げなきゃ……。だって、私はもう家には帰れない。だけど、パパやママを巻き込む訳にもいかない。そんなことになるくらいなら、どこか人知れず、下水道でも死んでしまつた方がまだましだ。

デイモルフオセ力はめまぐるしく考えを巡らせた。

答えを求めて泳いでいた視線が定まってくる。どうするか答えが

出たらしい。カナメはデイモルフオセカの瞳を見つめながら確信する。心の中の決断が瞳に反映されてくる。

その強い双眸にカナメは見覚えがあった。デイモルフオセカの瞳は深い翠色で、その人とは違うけれど、決断をした時の、あの潔い瞳。目を離せなくなる。

アイリス、君にそっくりな森の民だ。大丈夫、きつと無事に返すから。可哀そうだけど、下手な考えの芽は摘み取らせてもらうよ。君のようにはしない。

つい緩んでしまいそうになる顔を引き締めて、その瞳の光が失われることを知りながら、カナメは、その決意を挫く言葉を突きつけるべく口を開いた。

「君、自分だけが、どこかでひっそり死のうなんて考えていないか？」

カナメは冷たく一瞥する。自分の言葉に動揺した様子を見て、カナメは自分の危惧している考えが彼女の中で進行していたことを確認する。

彼女の考えていることをさせるつもりも、公安に知らせるつもりもカナメにはない。

「君は、僕が君の名前を知っていることを覚えている？」

どこか不穏な言い方に、デイモルフオセカは戦慄して紅い瞳を見つめた。

「それがどういうことだか分かるか？」

公安に捕まるよりも更に悪い事態に自分は陥っているのではないか、小さく震えながらデイモルフオセカはその瞳を凝視する。カナメは効果的に響くように、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「君が死のうが生きようが、君のご両親の処分は僕次第だということだ」

デイモルフオセカは一瞬目を見開いて呼吸を止めてから、目を閉じた。

なんてこと……私はこの人に本当の名前を言ってしまったのだっ

た。

「分解処理のやり方が二つあるのは知ってるか？ 一つは普通に分解する方法、もう一つは刑罰として分解する方法だ」

カナメの静かな、しかし心を竦ませる底冷えのする声と紅い瞳に絡めとられたように動けない。

「大の大人が泣き叫ぶくらい苦痛らしいよ。意識があるままで、じわじわと肉や骨が分解されていくんだ。ご両親をそんな恐ろしい目に、遭わせたくないよね？」

「パパもママも関係ないの。私が……私が勝手に……」

デイモルフオセカは無意識のうちに右手で神経質に左の掌をゴシゴシと擦っていた。過去の記憶がフラッシュバックする。

「カメラリア！ 手を、手を伸ばしてっ、早く！」

地上へ続く緊急脱出用の梯はしに掴まって、デイモルフオセカは、切羽詰まった声で手を伸ばした。

何か来る。それが分かったのは光苔から伝わってきた動揺だった。嫌よ、触らないでっ！ 森の民なんかに触られたくないわ」

当然、カメラリアは光苔の動揺に気づかない。森の民であるデイモルフオセカを嫌って、手を取らなかった瞬間、彼女の命が尽きた。

ヒースの住処すみかを出た後、しばらくしてカメラリアと合流した。カメラリアには、自分が森の民であることをすぐに話した。元々嫌われていることが分かっていたし、距離を置きたいのならば、それで構わなかった。ただ、嫌われている理由を知りたいと思ったのだ。でも、カメラリアは感染るから嫌なのだとしか言わなかった。

もしかしたら、彼女はその本当の理由を知らないのかもしれないかった。子供が貧しい家の子を苛めるように、容貌の変わった子を仲間外れにするように、ただ意味もなく嫌うさまに、彼女の態度は似ていた。森の民の力が感染ったからと言って、何に困るのか、デイモルフオセカにはまだ理解することができていなかった。

轟音をたてて流れて来たどす黒い濁流に吞まれて、カメラリアの体は一瞬にして消失した。最終的には、危険を察知して伸ばしたカメラリアの手をデイモルフオセカの左手が掴んだはずなのだ。しかし気づいた時には、本体をなくした肘から先だけの手をデイモルフオセカは握りしめていた。

デイモルフオセカは悲鳴をあげて、反射的にその残った手を振り落とし、結果、その手も溶解した。

自分が森の民だと言わなければ良かった……。

そうすればカメラリアはデイモルフオセカの手をとったはずだった。

もつと早く光苔の様子に気づいていれば良かった……。

下水道の壁面の上部にしか光苔が生えていなかった、その理由に、もつと早く気づくべきだったのだ。

聞かれるままに、自分の名前を答えなければ良かった。

自分の迂闊さを責める声だけが頭の中で木霊する。鼓動が速くなつて呼吸が荒くなる。

しかし、カナメは容赦なく続けた。

「僕はいつでも、君と君のご両親を通報することができる。だから君は僕の言うことを聞かなければならない。分かるよね」

親を人質に取るような姑息なことはしたくはなかったが、彼女に下手なことをされれば、取り返しがつかなくなる。たとえアイリスとの約束がなかったとしても、ハルにとって貴重な人材である森の民を死なせる訳にはいかない。カナメの狙いは、デイモルフオセカに、抵抗することなくアール・ダーへ帰る気になつてもらふことだ。事を無事に運ぶ為には、カナメの指示に従順になつてもらわなければ困る。カナメにだってリスクが発生するからだ。

カナメの言い含めるような淡々とした声には有無を言わさぬ圧力があつた。デイモルフオセカはゴクリと唾を飲み込む。デイモルフオセカの脳内に警告ランプが点滅する。

「おいおい、こんな子供相手になに脅しかけてるんだよ」

急にドアが開いて、イブキが呆れたような顔で入ってきた。

「イブキ？　また来たのか。なんで、イブキが僕の部屋に勝手に入ってくるんだよ。それにノックくらいしろよな」

カナメの瞳から急速に力が抜ける。

「コブから鍵を借りたんだ。あいつには合鍵渡しといて、俺にはくれないのか？」

「コブは勝手に合鍵を持って行つたんだ。心配だからって」

カナメは渋面で返す。

「俺も合鍵作つところ。心配だから」

イブキが片眉をあげてニヤリと笑って見せた時、背後でドサリと倒れる音がした。驚いて振り返つたカナメが見たのは、デイモルフオセカが左腕を抱え込んだまま床に倒れたところだった。

「おい、やり過ぎだろ。孫くらいも歳が離れてるんだぜ？　手加減てものを知らないのかお前は」

イブキが顔を顰める。

「孫どころじゃないだろ、それ以上の歳の差だ」

カナメはデイモルフオセカを抱き上げてソファに横たわせると、蒼白になって目を閉じている顔を覗きこむ。

確かにちよつとやり過ぎたらしい。一度逃げ出されて、警戒し過ぎてしまったようだ。カナメは大きな溜息をついた。

第八話

最初に極冠の氷が解けた。解けた氷は、さして大きくはない惑星ハルの大陸をじわじわと飲み込んだ。僅かな高地を残して、ハルは一旦、青い水球となった。

逃げ惑った人々は、わずかに残った高台の陸地を拠点として地下都市を形成し、細々と生き延びた。次いで大地は干上がり、惑星ハルは完全に生物を拒絶する不毛の大地となった。

ジタン末期の大災害である。

人類を含め生物が生きていけたのは地下都市と、高地でシールドを施すことのできた三つの地上、それがハルに残された最後の地上のオアシスだった。

三つの地上のうち、一つは人を寄せ付けぬジャングルで、一つは五年前に流星群に直撃されて壊滅した。そして最後の一つ、ハルの地上の森『アール・ダー村』、ここに森の民は住んでいた。

森の民の数は僅かに三千、植物を操る不思議な能力を持っていて、ハルの最後の地上を守りながら暮らしている。大半の者は体が弱く、寿命も短い。日増しに苛烈さを増すジタンに、その力を使いながら植物とともに生きている種族だ。その特殊な能力の故に政府からは手厚く保護されている。エリアEの植物は地下の寂光の下でも光合成ができ、大量の酸素を地下都市全域に提供できるように改良されていたが、それらはすべて森の民によって改良された植物群だった。

不思議なことに、森の民の力の源は未だに解明されておらず、森の民を分解再生すると、その力が失われてしまうことが確認されて

いる。地上と地下都市は隔絶している。一般市民が地上で暮らすことはなかったし、森の民が地下都市で暮らすことは、一部の例外を除いて、なかった。それがハル連邦政府の方針だった。

「イブキ、この子はアール・ダーに返そう。こいつは単なる家出娘だ。こんなことに巻き込むべきじゃない」

ソファに横たえたデイモルフオセカを心配そうに覗きこんでいたカナメは、立ち上がってイブキに向かい合う。

「こいつが帰りたいと言ったのか？」

「いや、そう言う訳じゃないけど……」

「だったら、この子に決めさせよう。おまえが決めることでもないだろう？」

「しかし……」

「お、目を覚ましたぞ」

イブキがデイモルフオセカを覗きこむ。カナメは不機嫌そうにマグカップの飲み物を啜った。

デイモルフオセカはソファの上で目を覚ました。明るいキャメル色の髪と薄い褐色の瞳をした男が覗き込んでいる。精悍な顔立ちで、デイモルフオセカの結婚相手だったシーカスに少し雰囲気似ていると、デイモルフオセカは震えながらそう思う。震えていたのは、その男が怖かったからでも、寒かったからでもない。手の感触が……デイモルフオセカの手を掴んだカメリアの手の感触が、あまりにも生々しく蘇えっていたからだ。

救えなかった命…… たった今そこにあった命、でももう取り返しのつかない命。涙が次から次へと零れ落ちる。

「おい、大丈夫か？」

「手が……」

デイモルフオセカは小刻みに震えていた。

「手がどうかしたか？」

抱え込むようにしている左手を拳にしたまま小刻みに震えている。拳はガチガチに強張っていて、デイモルフオセカ本人でさえ解くことができないようだった。イブキは左手の指を一本ずつ解いていきながら、掌を確認する。

「手だけが残ったの……」

「なんだって？」

「あとは全部溶けてしまった。……カメラリア。私のせいだ。私の……」

デイモルフオセカは焦点の定まらない瞳から涙をこぼす。

「おい、落ち着け。ここまで来る間にあつたことか？」

下水道では、時々清掃と称して溶解液を流すという噂を聞いたことがある。目的は沈殿した汚物の除去ということらしいが、その中に犯罪者やドロップアウトした人間が逃げ込んでいることを、政府が知らない訳がなかった。ハデス地下都市市長ルドのやりそうな荒っぽいやり方だ。

イブキの大きな掌がデイモルフオセカの頭をふわりと包んだ。デイモルフオセカの瞳がようやくイブキの顔に焦点を合わせる。

「忘れる。どうにもならないことをいつまでも覚えていたって仕方がない。だから……忘れるんだ」

デイモルフオセカはイブキを見上げて逡巡する。

忘れない、でも忘れてはいけない。二つの気持ちが天秤の上でどっちつかずで揺れている時、そんな不安定なつらい状態を、たとえば間違いであつたとしても、収めてくれる他人の意見はありがたいことだ。気弱くなっていたなら尚更だ。デイモルフオセカはその意見に縋りつきそうになって、しかし、思いとどまった。

——本当に、それでいいの？

心のどこか深いところで声がする。

「そんなことを簡単に忘れられるなら、もっと楽に生きてるだろ。こんなに面倒くさい生き方をしているこいつが、そうそう簡単に忘れられるもんか」

まるで、デイモルフオセカの心の声に応えるかのように、紅い瞳のその人は、間髪いれずにそう言った。

その言葉は、不思議なくらいストーンとデイモルフオセカの心に収まる。

忌まわしい記憶を、今封印して忘れて楽になったとしても、体に入り込んだ異物のように、それはいつしかじわじわと拒絶反応を起こし、心を蝕むに違いなかった。心の中できちんと消化し、吸収し、血肉にして初めて自分のものにすることができ。カメリアに起こった出来事も、彼女の思いも、その存在も、無かったことになんてできる訳がないんだから……。

この人はそれを知っているんだ。

敵なのか、味方なのか、親切なのか、辛辣なのか。

ダイニングで何か作り始めたカナメの背中を、デイモルフオセカは複雑な思いで見つめる。

考え込んでいるデイモルフオセカの目の前に、突然大振りのマグカップが差し出された。見上げると、カナメが温かな湯気のあがった飲み物のカップを手渡した。

「この暑いのに熱い茶かよ」

イブキの呆れた声が降ってくる。

「ハーブティーだよ。気分を落ち着けたい時につてメニューに書い

てあつた」

「俺には冷たいのくれ。ハッピーな気分になるやつな」

「了解」と言いながらカナメは再びダイニングへ消えていった。

そっか、私以外の人は暑いんだ。デイモルフオセカは渡されたマグカップを冷えた指先で包みこむ。カップの温かさが手に心地よかつた。

「お前なんていう名前だ？」

イブキが話しかけてくる。

「……デイモルフオセカ」

カナメには本名を言ってしまったのだ。今更偽名を使うことには何の意味もない。デイモルフオセカは沈んだ声で答える。

「デイモルフオセカ、これだけは説明しておかなければならない。

俺達は君とは他人同士だ。親兄弟ではない、もちろん配偶者でもない。血のつながりもなければ、法で定められた関係もない。冷たいようだが、俺たちには君を匿う理由も義理もない。匿ったのがバレれば俺達だってヤバイことになる。しかし俺達は君を公安には突き出さなかった。それは、俺達に計画があるからだ」

「イブキ、その話はまた今度にしないか？」

カナメが割って入る。

「カナメ、地下都市で過ごす時間が長くなればなるだけ、この子は危険な状態になる。俺は一刻も早く計画を進めて、この子の安全を確保したいと思う。それがこの子の為だとも思っている」

「……」

イブキの言葉にカナメは黙りこむ。そんなカナメを一瞥して、イブキは続けた。

「その計画には君の協力が必要だ。俺達の計画に協力してくれるな

ら、公安には突き出さない。身の安全を保障しよう。必要ならば助力も惜しまない。我々はある程度ならば、君に便宜を図ってやれる立場にある。そこで、だ。俺達と一緒に事に当たる際に必要なことはなんだと思う？」

イブキは器用に片眉をあげて見せる。デイモルフオセカは力なく肩を竦めて首を左右に振る。

「信頼だ。俺達は君に嘘はつかない。君も嘘をつくな」

「僕は嘘をつかないなんて言ってないよ」

カナメがイブキに飲み物を渡しながら文句を言う。

「そっか？……よし、じゃあ、この人は嘘をつくかもしれない。俺はつかない。そういうことだ」

イブキは肩を竦める。

「何を……すればいいの？」

デイモルフオセカは不安そうに顔を上げた。

人は嘘をつかないで生きていくことができるだろうか。

デイモルフオセカの不安そうな顔を見ながらカナメは考える。人間社会において、嘘は必要悪だ。ならば、嘘をつかないと言った時点で人は嘘を言ったことになる。この子はそんなことさえ考えつかないのだろう。それほど彼女は若く、経験が乏しいのだ。カナメは小さく溜息をつく。

「君を分解再生させてほしいんだ」

イブキはどこまでも単刀直入だった。デイモルフオセカの目が見開かれる。

「イブキ、それは……」

そんなことを知らせれば、彼女はアール・ダーに帰れなくなってしまう。地下都市の無修正情報を知った森の民は、もうアール・ダーでは暮らせない。再び口を挟みかけるカナメを、イブキは片手で制した。

「確かにショックな話だと思う。でも内容を知らないまま何でも協力しろなんて、俺は言うつもりはない。しかし、これは、森の民の為でもあるんだ」

イブキは続けた。

「森の民の力は謎だらけだ。その力が何に由来しているのかさえ解明されていない。これはかなりレベルの高い機密なんだが、現在、政府は森の民の分解再生に成功していない」

「やめろ！ イブキっ。そんな事を森の民に容易く話すなっ……」

イブキはこの子をアール・ダーに返さないつもりなのか？

「分かっているさ、カナメ。それ以上言うつもりは無い。おまえが森の民を庇う気持ちも分かっているつもりだ。だけど、森の民に関しては、お手上げ状態なのも事実だ。分かっているだろう？」

にらみ合う二人を呆然と見上げて、デイモルフオセカは口を開いた。

「あの……人を分解再生することができるの？」

「ああ、できる」

イブキの言葉にデイモルフオセカはゴクリと唾を飲み込んだ。

デイモルフオセカの姉、アリッサムが亡くなったのは初等部の事だ。姉の亡骸は、泣いてすぎる両親の手からもぎ取られるように地下都市へと送られた。

森の民の亡骸が地下都市に送られるその理由。死者さえも蘇らせられるという地下都市の科学技術の話。

本当だったんだ。でも、森の民は分解再生されないって……それって……。

デイモルフオセカは項垂れる。

カナメとイブキは、これまでに数え切れないほどの森の民の遺体

を分解再生した。結果は大きく二つに分かれた。普通の何の能力も持たない一般人として再生するものと、能力を持って再生するもの。しかし、能力を持って再生したものは、まるで壊れたぜんまい仕掛けのおもちゃのように、僅かの時間で能力を放出し尽くし、息絶えた。

分解ミスか、再生ミスか、あるいはこれは遺伝子に刻まれた能力ではないのか。カナメとイブキは原因究明に明け暮れた。生きている森の民を研究するべきだ。二人は政府に何度も掛け合ったが果たされなかった。森の民は厳重に保護されている。特別保護種なのだ。生体だろうが死体だろうが、遺伝子に変わりはない。遺伝子でなければなんなのだと突っぱねられた。

「人類のうち、森の民だけが再生されない……そう言うことなの？」

「残念ながら……」

イブキは森の民の一部が再生されないのだとは訂正しない。能力を持たない森の民など、政府にとって何の価値もないからだ。

地下都市にすれば、もしかしたら姉に逢えるかもしれないという幽かな希望。

なんと甘く、浅はかな期待だったのだろう……。

デイモルフォセカは大きく息を吐き出すと、顔を両手で覆った。

「……僕は森の民の研究をしていてね、情報を集めたいんだ。森の民はアール・ダー村で保護されていて、滅多にお目にかかれないから、君からの様々な情報は貴重なデータになると思う。それに、情報収集時に分解再生の問題点が発見されれば良い訳で、特に、どうしても君を分解再生しなければならぬという訳ではないんだ」
「見かねたようにカナメが静かに補足する。」

頭を抱えたまま考え込んでいたデイモルフオセカの耳に、カナメの声が染み込むように入り込んでくる。さっきとは全然違う労わった様子の声。

この人は、私を安心させようとしているの？ ううん、そんなはずない。この人は人の心を操る為に色々なしゃべり方ができる人なんだ。

デイモルフオセカは警戒心のこもった視線でカナメを見上げる。

「あなたは嘘をつくって言ったわ」

「必要がない時に嘘はつかないよ」

カナメの言葉は穏やかだ。

「……」

しかし今はもう、何も判断できる気がしなかった。

デイモルフオセカは押し黙ったまま項垂れた。

「とりあえず、今日は無事、意思の疎通も図れたことだし、飯でも食って寝た方が良くないか？ もうこんな時間だ」

意志の疎通が図れたか？ と呆れた声で返すカナメには答えず、イブキはコブからもらった食糧袋をガサゴソと漁り始めた。

* * *

奥の白い小部屋にソファを運び込んでいるカナメを手伝いながら、デイモルフオセカは静かに問いかける。

「ねえ、森の民でなければ、死んでも再生できるんだよね？」

「できるね」

小部屋をデイモルフオセカの寝室にする為にソファを運び込みながら、カナメは返答する。

「再生したい人は、誰でも再生できるの？」

「誰でもは無理だな。再生の為の厳しい条件があるからね。ねえ、君、地下都市のことをあまり知ろうとしない方がいい。次にイブキが来た時には、計画には協力できないと言いなさい。君はアール・ダーに帰るべきなんだ。もし君にその気があるのなら、今からでも明日朝一のガイアエクスプレスを手配するよ」

「……帰れないの。私、帰る場所が……もうないから……」

デイモルフオセカの言葉に、カナメは小さくため息をついた。

第九話

デイモルフオセカはモニターの前で、目を見張っていた。

『流れ落ちるロング・ドレープがあなたを主役に仕立てます』

光沢のある滑らかなシャンパン色の生地、ネグリジェが、モニターに映し出される。

ふええ。こんなの着て寝たらパーティに行く夢を見たりして……。次、カチリ。

『妖精のため息でつくった極上の生地で、素敵なお夢の世界へ』

ふんわりして肌触りの良さそうな薄緑色のセパレートパジャマだ。ふうん。これいいかも。次、カチリ。

『寝相が悪くても大丈夫、耳つき・しっぽつき・モコモコ生地、どうやっても可愛くしか見えません』

白い生地のフード付きパジャマにキャメル色の耳としっぽがついている。

へええ、なるほどなるほど……。私、寝相が悪いからなあ。これもいいなあ。次、カチリ。

『主役は素肌、あやうげなラップデザインのパジャマが、あなたを魅惑の夜へといざないます』

てろんとした生地の黒いネグリジェで、巻いてあるタイプなので寝ている間に肌蹴てしまいそうだ。

思わず、デイモルフオセカはモニターに食い入るように見入ってしまう。

魅惑の夜……。それって……。

その時、突然背後から声を掛けられてデイモルフオセカは文字通り飛び上がった。

「デイモルフオセカ、君はパジャマを選ぶのに、どれだけ時間をかければ気が済むんだ？」

振り向くとカナメがあきれ顔で佇んでいた。

先ほど、カナメから上着を渡された。もう着ないから、これの代わりに夜着を用意しなさいと言われたのだ。渡された上着はとても上等そうな手触りの良い布で、しっかりした作りのものだ。

まだ着れそうだけど……。これの代わり？ なにそれ。いや、それよりも……。

「これ……もう着ないの？」

デイモルフオセカは不思議そうにカナメを見上げる。

「さすがにそのデザインは、もう着る気になれない」

そう言われてデイモルフオセカは上着を広げてみる。深い緑色の上着には、豪華な刺繍が施されていて、森の民の長老がこんな上着を着ていたと思うだす。

「これカナメの？」

「そうだけど？」

随分渋い趣味……。だったのかな？ 趣味が変わったってこと？

首を傾げて考え込むデイモルフオセカに、どの夜着にするか自分で決めなさいとカナメは言っ、彼女をモニターの前に連れて行ったのだった。

「あ、あの……ごめんなさい。たくさん種類があるから迷っちゃって……。本当にどれでもいいの？」

背後のカナメに問いかける。

「それにするつもりなのか？」

モニターをチラリと見て肩を竦めるカナメに、デイモルフオセカは火がついたように真っ赤になった。モニターでは、危うげなラップデザインパジャマを来たモデルのお姉さんが誘うようなポーズをとっている。

「き、着ませんよっ、こんなのっ」

慌てたディモルフオセカの指がモニターの画面を上滑りして、考えていたのとは違うパジャマが確定してしまった。

わあっ、こんなの選んじやったし……。でも、これはちよつとなあ。変えられるの……。かな。

しかし、訂正を言い出す間もなく、モニターの横にあつたダストボックスのようなものがパカリと口をあけた。しかも、有無を言わさぬ口調でカナメが指示を出す。

「ほら、早く上着を入れる」

「え？ あ、でも……。あ、いえ……。まあ、いつか。あの、これ？」

手にしていた上着を持ちあげるとカナメが頷くので、慌てて上着を放りこんだ。入れた途端に口がパタンと閉じて、ういーんと稼働する音が聞こえた。まもなくモニターに数値が表示される。確認ボタンを押すと、そこからディモルフオセカの選んだパジャマの横にあつた数値分が差し引かれ、更に隣にあつた蓋つきのボックスの蓋が穏やかに点滅し始めた。カナメが開けるようにそれを指すので開いてみると、中にはディモルフオセカが選んだパジャマが入っていた。

アール・ダー村では、汚れた服は洗う、破れた服は縫う。それが当たり前だった。地下都市では違うらしい。破れた物も汚れた物も気に入らなくなった物でさえ、すべて分解して新しいものに再生するのだ。質量が同じものなら物々交換になるし、質量が少ないものに換えるときには、余った分のポイントがクレジットとして貯まる。逆に分解した物よりも大きいものと換える場合には、ストックしていたクレジットから引き落とされるのだ。

「アール・ダー村にも分解再生装置があるはずだろ？」

出てきたパジャマに呆然とするディモルフオセカに、カナメは怪訝そうに首を傾げる。

「うん、管理棟にあるよ。だけど、こんなことができるなんて知ら

なかった。だってね、その機械に触れるのは長老さんだけなんだよ。新しい服は季節ごとに長老さんがみんなに配ってくれるの。だから、この機械がそんなものだって知らなかった」

「アール・ダーでは運用方法が違うのか……」

アール・ダー村の運営状況を少し確認しておいた方がいいのかもしれない。カナメは考え込む。

次に、デイモルフオセカはシャワールームで呆然とする。
なにこれ……。

シャワールームだと教えられたドアを開けて、中を見て途方に暮れる。

オフホワイトの壁で囲まれた部屋の中に、筒状の半透明の個室があった。筒の中には、いくつかスイッチがあるようだ。

デイモルフオセカは筒の中に入って、しげしげと中の構造を見回す。

どこからお湯が出るんだろ。確か、シャワーを使う時にはソープが必要だったと思うんだけど……それは、どこにあるの？

さっぱり分からなかったので、仕方なくカナメを呼ぶ。

「シャワールームの使い方が分からないだって？ アール・ダーではどうしてんだ？」

カナメがあきれ顔でシャワールームにやって来た。

「ほとんど水浴びで済ませてたから。わっ、私だけじゃないよ？

アール・ダーでは大抵の人が、それで済ませちゃうし……」

アール・ダー村には水浴びをする為の泉があった。ダフネの泉という。泉の周りを香りの良い月光樹という香木が取り囲んでいるのだが、その月光樹は特別な性質を持っていて、精油のような成分を根から分泌していた。だから、泉の水には月光樹の良い匂いが移っていて、ソープなど使わなくても、その水を使うだけで体も髪もきれいにすることができた。

「もしかして……ダフネの泉？」

ふと思いついたように問うカナメに、デイモルフオセ力は頷く。
「懐かしいな。あの泉、まだあるんだ」

そう言って楽しげに笑うカナメに、目が釘付けになってしまう。

この人は、こんな笑い方もするんだ……。

「ダフネの泉を知ってるの？」

「ああ、知ってる。アール・ダー村に行ったのは子どもの頃なんだけど、その時にもあったよ」

子どもの頃に行った？ 一般人がアール・ダーにやってくることは滅多にない。たまに視察で来るのだって、必ず大人だ。一般人の子どもが来たなんて話をデイモルフオセ力は一度も聞いたことがなかった。

奇妙な違和感。

「このスイッチを押すと全部オートで洗浄してくれる。これが温まるだけの時、で、こっちが……」

スイッチを指差しながら教えてくれているカナメの顔が、やけに近いことにふと気づいて、デイモルフオセ力は動揺した。うろたえて後ずさった拍子に、肘が何かのスイッチを押してしまう。軽い警告音になって、筒のドアが閉まってしまった。

「あっ」

二人で睜目して見つめ合う。

「何か押しちゃった。どうしよう」

カナメは顔を顰めた。

「オートだと、終わるまで十五分はここから出られないな」

「えーっ」

突然足元からブワツと湯気が立ち上る。

「きゃあ！ なにこれ」

「心配ない。ただの蒸気だ」

カナメは面白そうにデイモルフオセ力を見下ろす。

ほどよく湿って温まったところに、香りの良いソーブが降り注い

だ。ほどよい硬さのブラシでまんべんなくブラッシングされて、それが終わると上から下から勢いよくお湯が降り注いだ。お湯が降り注いできた瞬間、カナメがディモルフオセカの頭上で両腕を伸ばして、彼女を自らの体で庇ってくれたのだが、大した甲斐なく二人してびしょ濡れになる。

頭上でくつくつと笑う声がして、ディモルフオセカは顔を上げた。カナメのずぶ濡れの髪の毛の先から雫が滴り落ちて、ディモルフオセカの顔をつたう。

「……ごめんなさい」

「随分長いこと生きてるつもりだったけど、服を着たままシャワーを浴びたのは初めてだ」

カナメはそう言って、楽しそうに笑った。

「……私も初めて……」

困って小さく笑うディモルフオセカをカナメは優しくに見下ろす。ふいにカナメの手が、ディモルフオセカの短くなってしまった髪を一筋すくった。

「この髪はどうした？ 森の民の女性は髪を大切にするものだと聞いているが……」

ディモルフオセカの髪は、アール・ダーを出た時には腰よりも更に下、足首に届くほど伸びていた。物心ついた時から切ったことがなかったのだ。それを三つ編みにしていた。

「……私……すぐ喉が渴いてて……」

地下都市に来てすぐにディモルフオセカは困窮した。水一杯でさえ手に入れることができなかったのだ。そんな時、優しそうな老婆が声を掛けてきた。

見事な髪の毛だねえ、と。

「それで、たった一杯の水と髪を交換したのか？」

カナメは顔を顰める。

「こんなに短く切られちゃうなんて、思ってた……かった……んだけ……ど……」

笑って言うつもり言葉は、とぎれとぎれになり、震えて続かなくなり、やがて掠れて消えた。

こんなはずじゃなかった。だけど地下都市に来てから、すべてがこんな調子だったのだ。

「バカだな、君は……」

小さくしゃくりあげるディモルフォセカの髪をやさしく梳きあげながら、カナメはそう言うと、すぐに伸びるさと付け足した。

すべての工程が終わると、開いたドアからカナメは出ていった。
「君はもう一度、今度はちゃんと服を脱いでからシャワーを浴びなさい」と言い残して。

第十話

星ウサギという動物を知っているだろうか。かつて惑星ハルにいた動物だ。今はもう絶滅してしまつて、遺伝子情報でしか残っていない。

白いボディにキヤメル色の耳と尾、尾の先が蛍光を発するので星ウサギと呼ばれる。かつて毛皮の美しさと手触りのよさで乱獲された。生態ピラミッドのほぼ底辺に位置する草食獣であるにもかかわらず、繁殖力がそれほど高くない生き物で、まもなく絶滅に迫り込まれた。カナメは子どもの頃、その星ウサギを飼っていたことがあった。アール・ダー村でのほんの僅かな間だったが……。

デイモルフオセカのベッド用にソファを白い小部屋に運びこんだ後、カナメは落ち着かない気持ちで自分の寝室のベッドに寝転んだ。本当ならば、寝室を明け渡すべきなんだろうけど……。一応女の子なんだし……。しかし、今ここを使わせる訳にはいかないしなあ。寝転んだまま、カナメはあれこれ考える。

何故落ち着かないのかは分かつていた。自分の部屋に他人が居ることに慣れていないのだ。カナメはその長い人生の中で、唯一いた配偶者とは、共に過ごした期間があまりにも短かった。

結局寝つけずに、ダイニングで飲み物を作ったり、リビングをうろついたりした挙句、カナメは白い小部屋のドアを小さくノックしてみた。

やはりソファではなく、ベッドをリビングに運んで、そこで寝かせた方が良さだろうと考えたからだ。いくら小柄だからとはいえ、リビングに置いてあったソファで寝るのは窮屈だろうと思えて

きたのだった。しかし返答はない。ふと、気になったカナメがそつとドアを開けてみると、そこには、星ウサギがソファの上で丸くなって眠っていた。

キヤメル色の長い耳が折れ曲がって顔を覆っている。

カナメは一瞬瞠目した後、小さく吹きだすと、ソファでぐっすり眠っているらしい星ウサギの耳を持ちあげてみる。そつと顔を覗きこんだカナメは、しかし慌ててその肩をゆすった。

「おい、君、大丈夫なのか？ デイモルフオセカ？」

常夜灯に照らされたデイモルフオセカの顔色はひどく青白く、ぐったりして見えた。苦しげに閉じられた瞼、小刻みに震える体。夜着から出ている小さな手は、氷水につけていたのではないかと疑うほど冷たい。

「……っ」

幽かに身じろぎしてデイモルフオセカが目を開けた。

「どうした？ 具合が悪いのか？」

「……寒い」

この部屋だけは空調を切っており、地熱で暑いくらいなのだ。カナメはデイモルフオセカの額に手を当てる。指先ほどではないが冷えきっている。カナメは医療用キットを取り出すと、体温や血圧を測る。

すべてが低い。否、低すぎる。

「君、元々、こんなに体温が低い人？」

デイモルフオセカは小さく首を振ると、消え入るような声で、今まで体温が低いなどと言われたことは無いと言った。

カナメはデイモルフオセカを抱きかかえてソファに座ると、自らの手で指先を温める。

「ごめん……なさい。迷惑かけて……ばかりで……」

「いいから眠りなさい。疲れているのかもしれない」

「……地下都市に来てから、眠るのがいつも怖かったんだよ。急に寒くなつて、目を開けてられなくなるの。そのまま死んじゃうような気がする……」

ぐったりと肩に寄りかかるディモルフオセカの頬を掌で温める。

「怖いよ。私……また、目覚められるかな……」

「大丈夫だ。付いてるから。ちゃんと起こしてあげるから」

カナメの言葉に小さく頷くと、ディモルフオセカは墜落するように眠りこんだ。

森の民が植物に力を使った後、低体温症を起こすことは良く知られている。しかし、ディモルフオセカは力を使った訳じゃない。アレオーレはこの小部屋を嫌って付いてこなかったし、ヒカリゴケだって家の中には持ちこんでいない。では何故これほどまでに体温が低下してしまうのか。少し調べてみる必要があるそうだ。

まもなくカナメもまた急速な眠気に襲われる。再生したばかりの体と心がインターフェースをとる期間なので、カナメもまた体調が万全ではないのだ。しっかりとディモルフオセカを抱き抱え直すと、カナメも墜落するように眠りこんだ。

* * *

ディモルフオセカは水の中を歩いていた。

水は冷たく氷のようで、体が動かない。それでも水の抵抗で思うように動けないのだ。しかし前に進まなければいけない。それだけが分かっていて。

ごぼつごぼつと吐きだした息が泡になって上っていく。

——苦しいよう。寒い……。助けて……。誰か……。

目の前が暗くなって、一歩も前に進めなくなってしまう。水はいよいよ冷たくなり、重くなり、肺に入ってくる空気は滞っていく。視界が狭まり、そのまま暗く閉ざされていくかに思えた……。その瞬間、まばゆい赤い光が差し込んできた。

——ああ……。温かい。

デイモルフオセカは、その光の源がジタンだとすぐに気づく。

——こんな深い水の底にまで、ジタンの光が……。

暖かく包み込まれるような日差しの中で、デイモルフオセカはほっと息をつく。しかし、次の瞬間、現実を思い出して呻いた。

——私、アール・ダーには戻っちゃいけなかったんじゃない？
デイモルフオセカを見て困惑する人、人、人……。

『デイモルフオセカ、政府の決めたことは絶対なのよ。結婚をやめたいなんて馬鹿なことを言わないで』

——ねえ、ママ、どうして私の目を見て言ってくれないの？

『デйм、もしオーランティアカに戻って来なければいつでも戻ってくればいいんだよ。ママが何と言おうが構うもんか。パパが何とかするから……』

パパ？ ママと何があつたの？ 喧嘩しないで。何があつたのか教えてよ。

『……姉さん、俺と逃げようか？』

ホルト？ みんなどうしちゃったの？ みんな変だよ？ みんな、私に何を隠しているの？

——そうだ……。私はアール・ダーに戻ってはいけなかった。みんなに困った顔をさせてしまうから……。私は戻ってはいけなかったのに……。

デイモルフオセカは耳を塞いで蹲った。

カナメは砂漠を歩いていった。

どこもかしこも暑く乾いている。ひどく喉が渴いていた。カナメの周りでたくさんの人々が、やはりカナメと同様に足を引きずりながら歩いている。誰も口を閉ざし苦渋の表情を浮かべている。何度も足を砂にとられ、体が傾ぐ。ジタンの光は益々苛烈さを増していた。

木陰を探すが、見渡す限り砂ばかり。しかし、そうであるのに、カナメは少しずつ自分の体が冷やかになってゆくを感じていた。足取りも軽く、喉の渴きさえ癒されていく。徐々に軽快になっていくカナメの足取りに、不思議そうな顔で隣の男が声をかけてきた。

『おや？ あなたは何をお持ちですか？』

その男は漆黒の瞳を悪戯っぽく輝かせた。カナメは男の言葉を怪訝な思いで聞き、持っていた荷物に目をして驚愕する。

「これは……」

隣の男も一緒に覗き込む。

「ハルだ……」

『ハルですね』

カナメが驚いて、男は納得した様子で、同時にその名を口にするとそれは、ひんやりした透明な水を湛えた瑠璃色の球体で、ゆっくりとカナメの手の上で回転していた。

これを持っていたから涼しかったのか。

カナメもゆるゆると納得する。

『いいですね、それ。私に譲ってくれませんか？』

男は密やかに問いかける。

「いや……これはちょっと……」

カナメは口ごもり、思わずハルを男から隠してしまう。

『ははは、そうですね。私があなたでもそう言いますよ。埒もないことを聞いてしまったようだ』

男は破顔すると、着ていた真つ黒なマントを翻した。途端に砂塵が舞い、カナメは目を閉じた。

第十一話

イブキが小型大脳コンタクトに、デイモルフオセカの記憶を採取しようと言い出した。その器械は、カナメとイブキが互いに小型化を競って作っていた試作品だった。

これなら独立していてどのシステムにも繋がっていないので、情報が増えだす心配がない。その作業が終わってからガイアエクスプレスに乗せられるよう手配すると、イブキは言い張った。地下都市某研究所からの要請で、彼女を研究対象として招いたという形をとれないか既に検討を始めているのだと言う。

実際に人を再生する為には、からだ本体の情報だけでなく記憶も採取しておく必要がある。しかし、今までの森の民の分解再生は生体を扱っていなかった為、記憶採取をしていなかった。記憶のあるなしが力の有無につながるとはとも思えないというのが政府の言い分だったが、大脳コンタクトによるストレスが森の民の力を削ぐ、あるいは消滅させることの方を、政府が恐れているのは明らかだった。森の民と言っても、すべての者が強い力を持っている訳ではない。そんな者はむしろまれで、数人がかりで一つの植物の改良を行う場合がほとんどなのだ。だから森の民は多ければ多いほど良く、一人として損ないたくないというのが政府の本音だった。

もしデイモルフオセカが、目の前でアレオーレの形態を変化させていなければ、イブキはこれほどまでに彼女を分解再生することに拘らなかつただろう。昏倒するほど体力を失っていて、かつ意識もないまま、植物の形態を変えてしまうほどの力を放出した彼女だからこそ、イブキはデイモルフオセカに興味を持ったに違いなかった。

しかも、当の本人であるディモルフオセカは、アール・ダーには帰れないのだと頑なだ。

カナメは半ば投げやりな気分になって、イブキから渡されたメモリースティックを小型大脳コンタクトに突っ込んだ。

白い小部屋の椅子に座って、ディモルフオセカは不安そうにカナメの背中を見上げる。大脳コンタクトという器械を取りつけて、記憶を採取するのだと言う。

記憶の採取？ 何、それ……。

部屋は、床も壁も天井も真っ白なので何だかひどく落ち着かない。先ほどまでじゃれていたアレオーレは、この部屋には決して入ろうとしなかった。

きよときよとと辺りを見回すディモルフオセカに、機材を手にしたカナメが近づく。

「どうする？」

カナメはディモルフオセカの表情をちらりと見てから、唐突に問いかけた。

「どうするって……何を？」

「もし君が家出したことを後悔しているのならば、記憶採取はしない。明日のガイアエクスプレスに乗れるように、今ならば、何とかすれば手配してやれる。家に帰りたくなっただんじやないのか？」

カナメは仏頂面でそう言った。

今朝目覚めて、ディモルフオセカは驚いた。暖かいジタンの日射しだと思ってホッとしたのは勘違いで、カナメの体温で温かった

のだ。低体温症……森の民が時々起こす症状だ。地下都市に来てから、デイモルフオセカは頻繁にこの症状に悩まされるようになっていた。ここにいてさえ、自分は誰かに迷惑を掛けてしまうのかと唇をかむ。

帰りたくないと言えば嘘になる。だけど、帰れる場所は既になかった。

オーランティアカの家は、デイモルフオセカの結婚話を機に、色々なことがうまく行かなくなっていた。まるで肝心な歯が折れてしまった歯車のように、妙なふうに空回りして、両親とも弟ともぎくしゃくした状態になっていた。それがどうしてなのか、デイモルフオセカにはさっぱり分からない。更に、結婚相手だと政府から指定された相手にも問題があった。彼には将来を約束した恋人がいたのだ。自分の存在が、周囲の人すべてを困惑させ混乱させ、悲しませていた。デイモルフオセカが帰りたい場所は、昔の、姉のアリッサムが亡くなる前の穏やかで幸せだった日々だ。だけど、それはもうどこにもなかった。

「……私が帰ったら、あなたたちは困るんじゃないの？」

こんなことを訊いてしまうのは、自分の存在を認めてもらいたいからだ。自分は居場所が欲しいだけなのだ。これは甘えだ。訊いた途端、そう気づいて後悔する。

「困るのは僕たちではない。分解再生ができなければ、そう遠くない未来で困るのは森の民だ。しかし、それは君が義務や責任を負わなければならぬことではない」

「分解再生ができないと、なぜ森の民が困るの？」

「それは言えない。そう言っただろ？」

「私が協力すれば、森の民の役に立つ？」

「役に立つかどうかは分からない。少なくともマイナスにはならな

い」

「やりがいの無い言い方ね」

デイモルフオセ力は拗ねた瞳でカナメを見上げる。カナメは軽く肩を竦めた。

「だけど……デイモルフオセ力は思う、少しでも森の民の為に可能性があるのなら……。少なくとも無駄にはならないはずだ。」

「ねえ、それって痛いんじゃないよね？」

「……大人でも泣くほど辛いやつだ。痛くは無いけどね」

「え……」

「正確に言えば人による。辛い記憶が多ければそれだけ辛い。楽しい記憶ばかりならば少しも苦痛ではないだろう」

自分の記憶はどうだっただろう。確かにここ数カ月、辛い記憶ばかりだ。だけど、それまではずっとアール・ダー村で幸せだったのだ。両親がいて、姉弟がいて……。

「それから、これは言っておかなければならないと思う。大脳コンタクトを使うことによって、森の民の力を失う可能性がある」

「森の民の力を失う？」

「可能性を否定できない」

森の民の力を忌み嫌っていたヒースの顔が浮かぶ。彼はそれを試してみたのだろうか……。

「森の民の力が無くなれば、私はアール・ダーに戻る理由が無くなるの？」

「だから、問題なく帰りたければ今すぐ帰る方がいい」

「……でも、もう帰る場所が無いし……。いいよ。協力する」

カナメの真剣な瞳に少しだけ怯みつつ、デイモルフオセ力は答えた。

一瞬顔を顰めた後、そうとだけ返事をする、カナメはデイモルフォセカの頭に機材を取りつけた。

カナメは気まずい思いで、自室のベッドに横たわる。

利用するだけなら、犯罪者だった方がまだ良かった。

少なくとも、居場所がないと家出した少女にやらせることじゃないよな。

あの子は僕とは違う。政府の言うがままに、それも三百年もの長い間、唯々諾々と敷かれた道の上を、ただがむしゃらに走ってきただけの僕とは違う。用意された道を否とすることが三百年前の自分にできただろうか、そして今の自分にはできるだろうか。

デイモルフォセカは小部屋で記憶採取装置を取り付けられている。完璧な分解再生するには、まず記憶を採取しておくことが必要なのではないかと、イブキとカナメは以前から考えていた。森の民の記憶を採取したことは数えるほどしかない。森の民は体力的にばかりでなく、精神的にも繊細だった。略式の簡単な記憶採取であったにもかかわらず、シヨックのあまり力を失った例もある。それ以来、森の民の記憶採取はストップしたままだ。ハル政府は、一人でも多くの森の民を『使える』状態にしておきたいのだ。

記憶採取を始めて間もなく、彼女は涙を流し始めた。記憶採取は近い過去から採取が開始される。ここにたどり着くまでに辛いことがたくさんあったのだろう。予想していたことではあった。

記憶採取装置は、昔のつら過ぎて忘れざるをえなかった悲しい記憶までも残酷なまでに掘り起こす。この装置が残酷なことは、自分が一番よく知っていた。何度この装置に自分の記憶を明け渡した

ことだろう。

彼女は力を失うのだろうか……。

カナメはふと何かを思いついたように起きあがると部屋を後にした。

第十二話

「今日中に、あの趣味の悪い監視カメラを撤去して欲しいんだ」
カナメは休暇中にも関わらず、エリアAにある都市管理センターの窓口に来ていた。

「カナメさん独身でしょ？ 付いてても特に問題ないと思うけどなあ」

顔なじみの職員はメタリックフレームの眼鏡を中指でずりあげながら、ニヤリと笑う。

市の条例で、七十歳以上の独居老人の寝室には監視カメラを設置することになっていた。孤独死を減らす為だと市長は言うが、プライバシーの侵害にも程があるとカナメは思う。

「再生治療を受けたんだ、もう必要ないはずだろ？」

カナメは渋面で反論する。

「今、結構人手不足でねー、最速で三日後ですかねー」

職員は端末モニターを確認しながら言った。

「三日も待てるか。ああ、そうだ、自分で外してもいいんだよね？」

「やめてください」

職員はやけにきつぱりと言い放つ。

「なんで？」

「粉々に分解するつもりでしょう？」

「……」

カナメは絶句する。誰がどういう噂を流しているのか知らないが、どうやら自分は分解魔だと思われるらしい。

分解。確かにこの言葉は、カナメの長い人生の中で大きな部分を占めてきた。子供のころから、ありとあらゆるものを分解すること

に情熱を注いできた彼は、やがて生物をも分子レベルまで分解する分解装置を開発した。逆の過程をたどって、イブキは再生装置を開発した。だから分解再生装置は二人の共同作品なのだった。

分解再生装置は地下都市ハデスの生活を一変させた。狭くて不衛生で不自由だった地下都市は、究極のリサイクル生活を可能とした快適な機能的未来都市と呼ばれるようになった。

この装置のことを語る時、人々は尊敬と畏怖の念をもって、その開発者のことをこう呼ぶ。破壊神カナメ。創造神イブキと。

「おいつ、カナメじゃないか？　なんでこんな所にいるんだ」

背後から自信に溢れた声でハデス地下都市市長ルド・B・ラキニアタが声をかけてきた。カナメはげんなりと振り向く。いつみても元気いっぱいで、無駄に眼光鋭い顔を見ると、自分の生気が吸い取られていくような気がする。

「おまえ、まだインターフェース休暇中だろ？」

ルドは顔を顰めた。再生治療後は一週間の休暇が義務付けられている。新しい体と心がインターフェースをとるのに、それくらい時間がかかるからだ。

「ちよつとした手続きの申請だ」

カナメは大したことではないと言いたげに言葉を投げだした。

「手続き？」

「グラブラ主席技官は寝室の監視カメラの撤去を申請しに来たんですよ」

ルドに知れると、色々面倒だと判断したカナメが、適当にはぐらかそうとした先に職員が答えてしまう。

「ほう」

ルドが目丸くする。

「……」

カナメはズルズルと沈み込む心持で、ルドの目が好奇心に輝きだすのを見つめた。

「お前の部屋には、寝室だけじゃなく各部屋に監視カメラを付けてやろうと思っていたのだが。遂に妻でも娶る気になったのか？ それとも恋人でもできたか？ それとも……何か別のアヤシイ趣味ができた訳じゃないだろうな？」

「アヤシイ趣味って、例えば何です？」

カナメは脱力して問い返す。一番性質の悪い人間に見つかってしまったようだ。

「俺がそんなこと知る訳ないだろう？」

「……」

「そうだ、カナメ。あの森の民の母親な、特例で再生者リストに加えておいたぞ？ ただし再生されるのはプランE完了後だ。感謝しろよ。貸しだからな？」

そう言っただけで、今度はやけに笑う。カナメはルドを見つめて苦笑した。プランEの完了などいつになるのか……。

「ルド、次の会議の時間が迫っていますが」

秘書の声が、カナメには天使の声に聞こえた。

「おう、分かってる。じゃあカナメ、また今度な。アヤシイ趣味は程々にしろよ？」

ルドは無駄にさわやかな笑顔を作ると颯爽と去って行った。

だから、何だよアヤシイ趣味って……。

カナメは呆然とその後ろ姿を見つめた。

「カナメさん、なんとか頑張って二日後には撤去できるようにしますから、くれぐれも分解しないようお願いします」

端末のタッチパネルを操作しながら職員が声を掛ける。

「君はなんか誤解してないか？ 僕が何でもかんでも分解するとか

……」

「何でも分解したいと思う訳じゃあないんですか？」

職員の男は声を潜める。

「……君は何を分解することを想像して言ってる？」

カナメは怪訝そうに首を傾げる。

「最近、居住区で起ってる事件を知ってますか？ バラバラ殺人事件ですよ」

男は声を低めて、不気味な顔を作って言った。

「……」

カナメはげんなりした顔で黙り込む。

「どうして犯人はバラバラにするんでしょうね？ カナメさんなら気持ちがかかりますか？」

「僕にわかる訳がないだろう？」

カナメは憮然とする。

「ははは、冗談ですよ。いやいや、カナメさんも気を付けてくださ
いね？」

職員はにっこり笑った。

「次に君がバラバラにされてたら、僕を疑ってもいいよ。もっとも、僕は微粒子になるまで分解するのが趣味だから、君だって誰も分らないかもしれないけどね？」

カナメがにっこり笑い返すと、職員は笑顔のまま凍りついた。

二日後の撤去を申請すると、カナメは都市管理センターを後にする。

戻ってみると、デイモルフオセカの記憶採取はワンサイクルが終了していた。ワンサイクルで一年分よりも少し少ないくらいの記憶を採取できる。すぐに機材を取り外したが、かなり消耗している様

子だ。

元々体力的に弱っていた彼女には、それでもかなりの負担らしい。記憶採取を始めてから低下気味だったバイタル・サインは、外した後も低レベルのままでなかなか回復しない。何度か体を揺ると反応はあるので、しばらく様子を見ることにする。

一日ワンサイクルが限度だな。

ベッドを使えば、少しでも楽になるかと思い、寝室の監視カメラの撤去を申請しに来たのだが、藪蛇だったかもしれない。カナメは盛大な溜息をついた。

第十三話

『姉さん、エウオニムス家なんかに行くことないよ。ここに居ればいいんだ』

ホルト……それはできない。それは……できないよ……。

デイモルフオセカはソファの上で目を覚ました。部屋の中は漆黒の闇が支配している。驚いてソファの背もたれから身を起こすと、すぐ傍で密やかな声がした。

「暗いから気をつけて」

「カナメ？ これは一体……」

暗闇に慣れてくると、そこはただ単に真っ暗闇なのではないことに気づく。まるで砂粒を撒き散らしたような光の粒が、天井と言わず壁と言わず床と言わず、辺り一面に散開しあるいは集合し……。光る星雲が渦を巻き、暗黒星雲が宇宙に干潟をつくり、他の島宇宙が儚く光る。

デイモルフオセカは目を見張った。

「ソファに座ったまま振り返ってごらん」

言われるまま背もたれの向う側に目を向けると、遙かかなたにメラメラと真っ赤に揺らめく爪の先ほどの大きさの丸が見えた。

「ジタン……」

「近づいてみようか？」

カナメがそう言った途端、ゆったりとした速度で星が背後に流れ出す。

ガス状の大型惑星の横を幾つも通り過ぎ、暗く凍りついた大地をもつハル型惑星を二つ通り過ぎたところで、目の前に、青く輝く水を湛えた惑星が目の前に現れた。

「ハル……」

デイルフォセカが感極まったように呟いた。

これは人々の記憶の中にあるハルだ。ハルがこんな状態だと、心から信じられるのは、ある意味幸せなことなのだろうとカナメは思う。

森の民の力、それはハルの悲鳴が生み出した能力なのかもしれないと、カナメは密かに考えている。

ジタン末期の大災害から二百年余りが過ぎたころ、ジタンからの有害な光線と熱に耐え、大気を一定に保とうとする能力がアール・ダー村の植物に備わった。その適応力の速さ、能力変化の的確さに当時のハル政府は驚愕した。

それが森の民のなせる技であるということが判明した時、ハル政府は困惑した。

アール・ダー村は療養の村。治る見込みのない虚弱な人たちが最終的に住むことを強要された、言わば姥捨て山的な村だったから。

森の民の力で、僅かに残ったハルの地上は、当初ハル政府が見込んでいたよりも長くその寿命を保っている。森の民の出現がなければ、日に日に苛烈さを極めるジタンの光線の前にアール・ダーはとつくに壊滅していただろうし、地下都市のバイオングでさえ、順調にその機能を果たすことはできなかったに違いない。つまり、ハル文明の滅亡をぎりぎりの崖っぷちで留めているのは、森の民だということになる。

森の民たち自身は知らぬ事だろうが、今や、森の民は国宝級の扱いだ。できれば、こんな形では関わりたくなかった。カナメは小さく溜息をついて、ハルの青い光に照らされたデイルフォセカの横顔を見つめる。

映像が終わって、徐々に部屋の明かりが戻ってくると、デイモルフオセカは自分が前と同じ白い小部屋に居たのだと気づく。カナメはソファの足元に足を投げ出した体勢で床に座っており、その横に何かの機材が転がっていた。配線コードが引き抜かれたように剥きだしのままねじれている。

「デイム、今日から君は僕の寝室を使いなさい。監視カメラを外しておいた」

「え？ 監視カメラ？」

「ああ。市長の変な趣味なんだ。気分悪いから自分で外した。そのうちの市の職員が回収しに来ると思う。誰か来たら、君はどこかに……隠れて……て……」

カナメの言葉は次第にゆっくりになり、小さくなり、やがて途絶えた。

「カナメ？」

穏やかな寝息が聞こえる。うつすらと汗ばむ額。疲れているような、苦悩しているような、憔悴した横顔。

この部屋はデイモルフオセカの為に空調を切つてある。カナメにとっては暑いのだ。空調の使い方を知らないデイモルフオセカは、考えた末、小部屋のドアを開け放すことにした。閉まらないようにドアに椅子を挟む。リビングでフワフワ飛んでいたアレオーレが喜んでデイモルフオセカにじゃれついてきたが、彼女が再び小部屋に戻ると再びリビングに戻って行った。余程この部屋が嫌いらしい。

ドアの隙間から涼やかな風が吹いて来る。

アール・ダー村のオーランティアカの家は、大して大きくない家だったが、どの部屋にも大きな窓がついていた。明るい光と風が吹き抜ける部屋。光に満ちた場所。ことは正反対だ。窓は無く、ジタンの光も届かない。

昔は良かった。ママがいてパパがいて弟のホルトがいて、小さいころはアリッサムもいて……幸せだった。

「どうしてこんな事になっちゃったんだろ……」

冷えてきた部屋の中、一人身震いする。座ったまま眠り込むカナメを揺する。

「ねえ、こんな所で眠ると体痛くなっちゃうよ？ 私はソファで大丈夫だから、カナメ、ベッドで寝なよ」

「……うん」

返事とは裏腹にカナメが起きる気配はない。

「ねえってばあ」

揺すったり引っ張ったりしているうちに、ディモルフオセカも眠くなってしまい、カナメの隣に座り込んでウトウトし始め、やがて眠り込んだ。

カナメは走っていた。

霧が深いので、どこを走っているのかは分からない。しかし追われているのだと分かる。何故なら、ただ追われているのではないからだ。追ってくる者たちの濃密な殺意が押し寄せる。

追っているのは一人ではない。大勢の足音が迫ってくる。尋常な数ではない。大声で怒鳴っている者もいる。カナメのことを罵っているのだ。

その恐ろしいまでの、殺意を含んだ怒り。

声は叫んでいた。

「殺せ！」

多くのものが叫んでいた。

「あれは有害な化け物だ」

「災いを招く死神だ！」

ちがう！ 僕は死神なんかじゃない！

「違う！」

カナメは叫ぶ。しかしカナメの耳に聞こえたその声はくぐもった唸り声だった。不審に思っただけ自分の手を見る。それは闇に溶けたような漆黒の掌。カナメは目を見開く。その真つ黒な影のような掌には、骨が……それこそ夥しい数の骨がうず高く積み上がっているのだった。

そうだ……僕は殺した。人を引き裂いて、バラバラに……粉々にしたんだ。

死神だ！ カナメは戦慄して掌の上の骨を放り捨てると、頭を抱え込んだ。

うつ……うつ……僕は何をした？僕は、一体何をしてきたんだろう。

カナメは、慟哭しながら目を覚ました。汗びっしょりだ。

また、いつもの夢だ……夢だ。いつもの夢だ。自分にそう言い聞かせる。

分解再生されてからしばらくは、嫌な夢ばかりを見る。体と心がインターフェースをとるために見る夢なのだと言われる。見るのは悪夢ばかり。座ったまま両手で顔を覆う。

ふと気づくと、傍らにデイモルフオセカが寄り添うように眠っている。

「デйм？ デйм、起きなさい。こんな所で寝ていると体を壊すよ」

これじゃあ寢室のカメラを外した意味がない。カナメは苦笑すると、デイモルフオセカを抱えあげて、寢室へ運んだ。デイモルフオセカをベッドに寝かせると、力尽きたように自分も横たわった。

カナメは、三百年にも渡る、彼の長い人生の中で結婚したのは、ただの一度だけだった。それも半年暮して別れた。その後の政府からの介入はことごとく無視した。

何故かと問われれば、他人と暮らすことが苦痛だからと彼は答えるだろう。干渉され、生活のリズムを崩されると。相手が悪かったんだろうとイブキは言うが、二度と面倒なことはごめんだ。

しかし、事実は少し違う。カナメは薄々自認していることだが、変わることが怖いのだと思っている。心の奥底に沈んで幽かに光を放っている過去を、失う、もしくは忘れる、そうなってしまうのが自分は怖いのだと。

第十四話

濃厚でコクのあるカチャボスープに、新鮮なサラダ、少し焦げ目のついた人工肉のソーセージに焼きたての香ばしいパン。

いつもパンとコーヒーだけで済ましている朝食を、いつもよりフランスよく準備したのは、ひとえにデイモルフオセカの為だった。しかし……サラダはやめておいた方が良かったらしい。

「デйм……やめなさい。デイモルフオセカ……」

カナメは困惑して声を掛ける。デイモルフオセカの前にあるサラダの皿がなんだか変だ。コブからもらっていたエリアEの野菜を適当に盛り合わせたサラダだったのだが、芽吹いたり花が咲いたりでとてもサラダとは思えない代物になり果てていた。

寝ぼけ眼で食卓についたデイモルフオセカがまずやった事は、サラダの上に手をかざすことだった。しかも、まるで操られているかのように、ぼんやりしたままでだ。

デイモルフオセカが手をかざすとすぐに、サラダの皿は白く光ってこんもりと盛り上がり、前述したように、まるで花籠のような状態になったのだった。

「あ……またやっちゃった……」

カナメの声に、デイモルフオセカはふと我に返る。また、言うことは、今までもこのようなことが良くあったと言うことか。

「君はいつも生野菜を見るとそうなるのか？」

「う……私、力をコントロールすることができなくて……」

「生野菜は食べられないって訳だ」

「うつん、全然食べられないって訳じゃないよ？」

あきれ顔で問うカナメに、デイモルフオセカはモゴモゴ説明する。

植物の茎や根の先端にある生長点を除いてあれば大丈夫なのだ。生長点は、もっぱら細胞分裂が行われる部分であり、それがあれば、植物は成長しようとする。植物が成長しようとするれば、デイモルフオセカは自分の意志に関係なく、まるで植物に操られているかのようになり力を放出してしまうのだ。

オーランティアカの家では、デイモルフオセカの為にサラダに入った野菜の生長点を取り除くのは、もっぱら父親の役目だった。役目……というよりは、野菜嫌いな父親が自分の皿から生長点を取り除いた野菜をデイモルフオセカの皿に置いていたと言った方が正確かもしれない。時々、親の目を盗んで、弟のホルトも置いていたようだが……。

家の中で力をコントロールできないのはデイモルフオセカただ一人だったのだ。亡くなった姉のアリッサもコントロールできていたようだから、デイモルフオセカだけが違っていただろう。

「だから、いつもはパパが生長点を除いた生野菜を……むぐつ」

突然口の中にラディックを入れられて口ごもる。少し辛味のあるラディックの清冽な香りが口中に広がった。慌てて口に手をやるうとしたところで、厳しい口調の命令が飛ぶ。

「手を出すな。野菜に触るな。黙って咀嚼する」

デイモルフオセカは、びくりと動作を止めて、コクコクと頷くと咀嚼する。

サラダに関しては、最後のフリルルタス一枚に至るまで、指一本触る事を許可されず、まるで鳥のひなにでもなったようだとデイモルフオセカは小さくため息をついた。

来訪者がやって来たのは、食後のハーブティーを飲んでいた時だった。

「デイルム、小部屋に隠れていてくれ。たぶん都市管理センターの職員だろう」

デイルムは顔を頷くと、慌てて小部屋へと逃げ込んだ。

カナメはデイルムが小部屋に隠れたのを確認するとドアを開ける。

カナメの予想に反して、ドアの外にはルドが立っていた。

「よお、カナメ。ちゃんと大人しくしているか？」

無駄に爽やかな笑い顔には、好奇心むき出しの双眸が輝いている。

「ルド？ どうしたんです？ 何か急用ですか？」

カナメは一瞬瞠目すると、通せんぼをするように立ちはだかった。

「監視カメラの回収だ。なんだ？ 取り込み中か？」

ルドは、ドアを塞ぐように立ちはだかっているカナメの肩越しに中を物色する。

「いや、別に。今、監視カメラの回収と言いましたか？ 僕の聞き間違いでしょうね？」

カナメは顔を引きつらせながら問いかけた。

地下都市ハデス市長自ら、監視カメラの回収とは恐れ入る。口実に使うにしても、あまりにも見え透いているだろうとカナメはあきれ果てる。

「聞き間違いなどではない。お前早く外してもらいたがつてたじゃないか。俺くらいしか今日取りに来れる職員が居なかったのだ。市の対応が遅いとかケチをつけられるのは嫌だからな。邪魔するぜ？」

邪魔するなと口まで出かった言葉をぐつと飲みこんで、カナメは目をつぶって溜息をつく。

「で？」

ため息交じりにドアをきっちり閉めると、勝手にリビングに入り込んでキョロキョロ見回しているルドに、カナメは問いかける。

「で？　ってなんだよ。監視カメラの回収だと言っただろうが」

ルドは既に寝室のドアに手を掛けようとしている。

「地下都市ハデスの市長が？　国家公安委員会の委員長が？　監視カメラの回収ですか？」

カナメの皮肉を込めた口調にルドは爽やかな笑みを浮かべた。

「なんだ？　気に入らないのか？」

ルドは躊躇いもせずに寝室のドアを開けた。

「ん？　もう外してあるのか？」

「外しましたよ。そこに置いてあります」

カナメはリビングの小テーブルを指差した。

「それじゃあ、それもらってくか。……そうだ、その前に手洗いを借りてつてもいいか？　年をとるとナニが近くてな」

ルドはニヤリと笑う。

どんな情報を掴んでやってきたんだ？　このオヤジ……。カナメは内心冷や冷やししながら、素知らぬ顔で返答する。

「構いませんよ。どうぞ。それが済んだら本題に入るか、とつと帰るかして欲しいもんですね」

ハデス市長が直々にやって来たというのに、茶の一杯も出さないで追い返そうとするのは、おまえくらいだなどとブツブツ文句を言いながら、しかし、ルドは手洗いとは別の小部屋のドアに手をかけた。

「ルド！　そこは手洗いじゃないだろ！」

カナメの動揺した鋭い制止には構わず、ルドは勢いよく小部屋のドアを開けた。

「おや？」

ルドの声にカナメは覚悟を決めて目をつぶる。万事休す……か。
「おい、カナメ、あれはとうとう捨てちまったのか？　枯れてたも

んなあ。お前もそろそろアイリスを卒業って訳か？」

え？ 枯れてた？ カナメは目を開き、一体何の事かと一瞬考え込んでから、ようやくアレオーレのことだと気づく。当のアレオーレはどこかの物陰に身を潜めているようだ。なかなか空気を読む奴だと感心しながら、用心深く答える。

「割れたんだよ。アイリスは関係ない」

用心はしていたが、動揺していた。動揺のあまり昔の癖のため口に戻っている。カナメはぐくりと唾を呑みこんで小部屋の入口から中を覗き込む。そこにいるはずのディモルフオセカの姿は見当たらなかった。

「なーんだ」

「なんだって何？」

「お前のアヤシイ趣味が、ここに隠されているんだと思ったのに」
ルドはつまらなそうに鼻を鳴らす。

「だから、アヤシイ趣味なんてないって言ってんだろ？」

「なーんだ、つまらん」

「そんなことを確認する為にわざわざ来たのかよ？」

仏頂面のカナメに、おまえのその悪ガキ面と言葉、懐かしくていいな、すかして俺に敬語なんて使ってるお前よりずっと良い、と言いながらルドは鮮やかに笑んだ。

ディモルフオセカはドアに耳を寄せて外の音を窺っていた。誰かが部屋の中でカナメと話している声が聞こえる。カナメは都市管理センターの職員だろうと言った。でも、もしかしたら公安ということはないだろうか。ディモルフオセカはじりじりと最奥の机まで下がっていった。カナメが鋭く制止する声が聞こえた瞬間、ディモルフオセカは慌てて事務机の下の奥の方に身を潜めたのだった。

ルドは笑みを浮かべたまま、リビングのソファに腰をおろした。
「フォボスがプランEの始動を主張しているのは知ってるな？」
ようやく本題に入ったかと、カナメは神妙な顔で頷く。

数年前、ハルの衛星フォボスにあるフォボス市が、地下都市ハデスから独立した。革新的な市長が立ち、フォボスはあつという間にハル連邦政府から自治権を獲得すると、様々な計画を信じられないスピードで進め始めた。

「プランEの一部始動が決まった」

「一部始動……か」

プランEはエクソダス。つまり、惑星脱出だ。

もう何世代にも渡る長い間、ハル連邦の一般人とファームの民は、この計画を始動させる為に様々な計画を進めてきた。フォボスは、そのプランEの最前線基地だ。だからそのフォボスで計画を進めてきた者たちが、一刻も早くプランEを開始したいと考えるのは無理からぬことではあった。

「人数限定で脱出希望者を募ったんだが、希望者が殺到して百倍にも膨れ上がっているそうだ」

ルドは疲れたように笑んだ。ハデス市長であるルドは、その革新的な流れの重しとなるべく、急速な計画進行の危険性を指摘し続けてきたが、それも限界なのだろう。ジタンはもう間もなく爆発するという根拠のない噂があちらこちらで広まって、民衆はパニック寸前の状態にあった。

「へえ」

カナメは肩を竦める。

「お前、どうするよ？」

「どうするも何も、プランDが終了しない限り、僕はここを動く気はないよ。訊くまでもないだろ？」

「そう言うと思った。今日来たのはその件で、提案しに来たんだ。どうだ？ 生きた森の民を分解再生してみるか？」

「……確証のないまま闇雲に分解再生するつもりはないよ」

カナメはルドを睨みつける。

プランDは、言わばエクソダスの為の旅支度だ。脱出する為の宇宙船はほぼ出来上がっている。六隻の船に、ハルに棲息するすべての生物をデータ化して搭乗させる。それがプランDの概要だった。

「今度の流星群はかなり厳しいらしい。今、大気局は大わらわだ」

地表から水分を失い、大気的大部分を失った惑星ハルは、宇宙からの飛来物に対する守りが弱い。防護壁を失ったも同然なむき出しの大地になっている。隕石が流星として燃え尽きることなく地表に到達してしまえば、地表面だけでなく、その衝撃は地下都市にまで及ぶ。そうならないように、大気局は常にレーダーで監視し、問題のある大きさのデブリであれば、軌道を変えるか砕くかして衝撃を弱くするという作業を昼夜問わず行っているのだ。

「流星群の衝撃でパニックになった群衆が暴徒化することも考えられる。ハデス市長としてもそれは避けたい。だからプランEの一部始動をハデスも受け入れることにしたんだが、そうなってくると、やはり森の民の事が問題になってくる。フォボスの一部の急進派が、森の民を諦めて、その力のみを取り出すことはできないかと言い始めているのを知っているか？」

知っていた。だからこそ、カナメもイブキも森の民の再生に全力を注いでいる訳なのだが……。

「やつらが何をおっぱじめたか聞いて驚くな？ 森の民の力を取り出す為の植物を森の民に創らせようとしてるんだ」

「なんてことを……」

それは、まるで自分の生命力を絞り出す為の機械を自らの手で作らせているようなものだ。考えただけで気分が悪くなる。

「もう、国宝だ、特別保護種などと悠長なことは言ってられなくなっただけだ」

ルドはそう言つと苦く笑った。

第十五話

ハデス市長ルドを見送った後、カナメはたっぷり時間をとって、ドアの外を窺ってから小部屋のドアをそつと開いた。

ルドはカナメの子ども時代を知っている数少ない人間の一人だが、その大昔の時代からキレ者として常に人々を先導してきた人物だ。確証もなく行動する人間ではない。今回の抜き打ち的来訪も、何か情報を掴んでいる可能性が高い。昔からの馴染みとは言え、相手は公安のボスだ。法を犯して逃げ込んできた森の民を匿っている事を知られるのは非常にまずい。彼が生きた森の民の分解を示唆してきた事も単なる偶然とは思えなかった。油断はできない。

「デйм？」

カナメの声に、デイモルフオセカが机の下からモゾモゾ這い出し
てくる。

「そんな所に隠れていたのか」

カナメは安堵の溜息をもらす。

「誰だったの？ 公安の人？」

「公安の親玉だ。しかもそればかりか、ハル上で最も性質の悪い人間だ。君が隠れていてくれて良かった」

カナメはデイモルフオセカの頭をグリグリと撫でた。

* * *

「はぁ？ 宇宙人が攻めてくる？」

デイモルフォセカはぽかんとカナメを見上げる。

森の民を分解再生することに拘っている理由をしつこく質問するデイモルフォセカに、カナメは観念したように大きく溜息をつくと言った。

「いいか？ この事はトップシークレットだ。森の民に話した事があれば、僕だって無事では済まされない。君だってもう二度とアール・ダーには戻れない。誰にも言わないと約束できるか？」

カナメは真剣な顔でそう言った。

「誰にも言わない。約束する」

神妙な顔で返答するデイモルフォセカに、カナメは更に声を低めて話し始めたのだった。

「そうだ。しかもその宇宙人は、植物型だ。何をしゃべっているかさっぱり分らない。だから植物語を理解する為の植物を作らなきゃならないんだが、植物を改良する為には、森の民が圧倒的に足りない。そこで力の強い森の民を復活させるか数を増やすか、したいんだ」

カナメの説明にデイモルフォセカはポカンとする。

「ねえ、冗談だよね？」

「信じるか信じないかは君次第だ」

じつとり見つめるデイモルフォセカに、しかしカナメが動じる気配はない。

「……本当なの……ね？」

目を見開いて再度問うデイモルフォセカに、カナメは肩を軽く竦めただけだった。

「だったら、私役に立てると思う」

突然握りこぶしを突き上げて、任せなさいと言わんばかりに胸を

叩くデイモルフオセカに、今度はカナメがポカンとする。

「役に立てる？」

「うん。私、植物の考えてる事が分かるの。アール・ダーでも誰も信じてくれないんだけど、本当に本当に分かるんだからっ」

「はぁ……」

「で、その宇宙人はいつ責めてくるの？」

「え？ まぁ、そう遠くない未来に……」

「まだなのね？　じゃあ、それまでにどんな対応をするのか、どんな相手なのか作戦を練ったり調べたりしなくちゃだね」

「……なぁ、冗談だよな？」

「信じるか信じないかはあなた次第ですよ」

じつとり見つめるカナメに、デイモルフオセカは不満げに口をとがらせた。

「じゃあ、アレオーレの考えている事を教えてくれないか？　いやいや、まてよ、それじゃあ適当に言っても正誤判断ができない。そうだな……じゃあ、僕が何歳か、アレオーレに聞いてみてくれよ」
いいよ、と気軽に返事をして、アレオーレを掌に乘せて話しかけていたデイモルフオセカは、やがてしきりに首をひねりだした。

「どうした？」

「はつきりした年齢は分からないけど、アレオーレがカナメに初めて会ったのは三百年程前だって言うんだよ。おっかしいなぁ……この子たちが嘘を言うなんて今までなかったんだけど……。アレオーレ？　何か勘違いしていない？　あ、誰か別人と勘違いしてるのか……」

アレオーレはデイモルフオセカの言葉に、プンプンした仕草で飛び上がると、物陰に身を潜めてしまった。

カナメはあっけにとられる。

植物と会話をする森の民？

もしかしたら、森の民にはいくつかのタイプがあるんじゃないだろうか。力を持って再生されてもすぐに死んでしまう者と力を持たずに再生されるものがあると言う事は、まさにその証明と云えないか？ 森の民自身に様々なタイプがあるのだとしたら……。

「あ！ 私、カナメの名前、どこかで聞いた事があるってずっと思ってたんだけど、そう言えば同姓同名の人がいるよね。三百年くらい前に分解再生装置を開発した人が確かそうだったよ。初等部の歴史の教科書にあったもん。思い出したよ。もしかしてカナメの親戚の人？ 姓も同じだし……」

身乗り出して問うデイモルフオセカにカナメは困惑する。

「親戚……じゃないけどね」

本人だ。しかし……初等部の歴史の教科書なんか載ってるのか。軽く呆然とする。

「違うんだー。ん？ そいえば、分解再生装置の開発者はもう一人いたよね、確か……イブキ・ピラミダリスだったっけ……。あれ？ イブキって……」

「そうだ！ 言うの忘れてた。僕、今日で休暇が終わるんだ。だから明日から日中はこの部屋で君一人になるけど、大丈夫かな」

カナメは慌ててデイモルフオセカを遮った。ここで身バレするのはあまり好ましくない。地下都市の情報は、できるだけ知らせない方が彼女の為だ。

突然の話の切り替えに、特に不審がる様子もなくデイモルフオセカは頷いた。

「ぜっんぜん大丈夫だよ。でもさ、記憶採取が終わった後の空いた時間にヴィジシアター見てもいい？」

カナメの寝室の壁にはかなり大型のヴィジシアターが内蔵されていた。個人の部屋にあんな大型のヴィジシアターがあるのを、デイ

モルフォセカは初めて見た。だから一目見て以来、ずっと気になっていたのだった。

「構わないけど、ニュースチャンネルはロックさせてもらうよ。君は地下都市の事情を知らない方が安全だからね。それから、有料映像は程々にしてくれ」

「了解！」

ぱあっと顔を綻ばせたディモルフォセカに、カナメもほほ笑んだ。

第十六話

薄紅葵のハーブティーにレカンの輪切りを入れると、一瞬にして薄紅色から薄紫色に変わる。リラックスしたい時によくオーダーするフェリシアのお気に入りだ。肩で揺れるフワフワの金髪に淡紫の瞳、自分ではちっとも気に入ってないのだけれど、細い癖に胸周りだけはやけに豊満で、人が羨むほどの体型に恵まれたフェリシア・アメロイデスは、自室のリビングのソファで分厚い本をめくりながらくつろいでいた。

ハル大紀行、その分厚い本には、ジタン大災害以前のハルの自然が色彩鮮やかな画像で掲載されていた。山の尾根に積もる白い雪、雪解け水でできた川のほとりに可憐に咲く水葵。一面に広がる黄色い花の中で舞う虹色の蝶。紫色の夕べに浮かぶ赤い月と黄色い月。水辺で魚を狙うエメラルド色の尾羽をもつ鳥。そして……海に掛る虹。どれもこれもフェリシアが肉眼で見ることないまま失われてしまった景色ばかりだ。

ハルが、これほどまでに美しかった時代に生まれたかったと、何度見てもそう思う。地下都市生まれ地下都市育ちのフェリシアは、幼いころから、最後に残された地上の森にあるというアール・ダー村にあこがれていた。しかし、行きたいというフェリシアの願いがかなえられることは無く、同じことだからと、両親は彼女をエリアEによく連れて行ってくれた。しかし、そこはフェリシアが思い描いていたハルの風景とは、何かが決定的に違うような気がしていた。

地下都市の人間がアール・ダー村に行けるのは稀なことだ。地上最後のオアシス。その村に行けば、かつてのハルのカケラでも見ることができるのではないかとフェリシアは今でも思っている。仕事

柄、森の民と接触する機会が多少ある為、地上を懐かしむ彼らの言葉が、更にフェリシアを煽っているようなところはある。

本を支える手が痛くなってきた、フェリシアはそれをテーブルの上に置いた。この本を手に入れるのに一年かかった。それくらい、この本には大量のクレジットが必要だったからだ。紙を使った写真集は超高級品だ。それでも、どうしてもこの一冊は手に入れたかった。

急にエントランスのドアが開いて誰かが入ってくる。呼び鈴もなく入ってくるならば、それは彼だ。それ以外にはいない。フェリシアは溜息をついた。

「……いたのか珍しいな」

イブキは一瞬目を見張ると、肩を竦めた。

「あなたこそ、こんな時間に帰ってくるなんて珍しいですね」

二人は配偶者同士ということになっているが、お互いに住居で顔を合わせることはほとんどない。逆に仕事内容がダブっているフェーズでは毎日のように職場で顔を合わせることになる。

「また、その本を読んでいるのか？」

片眉をあげて見せる。その表情がフェリシアには気に入らない。馬鹿にされているように感じるからだ。イブキはアール・ダー村に行ったことがあると言う。そこで、記憶を見せて欲しいと頼んだのだが遠回しに断られた。新婚といえど、政府が決めた結婚だ。多少の我がままならば聞いてもらえるのではないか、などと思ったのが間違いだったらしい。

「どんな本を読んでいようと、私の勝手だと思えます」

本を抱えて、もう一方の手でティーカップを持つとダストシュー

トに放り込む。彼に対しては、必要以上につんつんしてしまっている自覚はある。しかし、どんな風に接したら良いのか分からないまま、時間だけが過ぎてしまった感があるフェリシアには、今更どんな態度をとれば良いのか分からないのが本音だ。逃げるように自室に引き上げようとするフェリシアを、珍しくイブキが呼び止めた。

「なあ、君に頼みがあるんだ」

イブキは、帰宅する道すがら大きなため息をつく。

カナメが再生治療後のインターフェース休暇から復帰して、既に一週間が過ぎていた。いつもなら、一週間びつしり休暇をとった拳句、頭が痛いだの、眠れなかったから調子が悪いだのと言ってグズグズと病休をとってから、ようやく職場復帰するやつで、職場に来れば来たで、今度は帰宅拒否症に罹ったように仕事に没頭して帰宅しないやつなのだ。

それが、正規の休暇が明ける三日も前から出てきて、毎日のようにほぼ定時で帰宅するとなれば、誰もが怪しむに決まっている。怪しまれる事を知っていながら、なんら取り繕う様子もないカナメに、イブキの方がハラハラする。

カナメはペットを飼い始めたらしいなどと、なんで俺が説明して回ってるんだよ。こんなことなら、俺がデイモルフォセ力を引きとっておけば良かったか。イブキは眉間にしわを寄せる。

しかし……。

カナメの傍に誰かを置いておきたかった。それが森の民ならば、尚更あいつの気を引けるだろうことも計算済みだ。

再生されるたび、疲れ果てたように諦めたように荒んでいく瞳に、少しでも光を取り戻せるのならば、多少の危険があっても試してみる価値はあると思ったのだ。

初めからイブキの狙いは、森の民の研究というよりもそちらの方が主だった。しかし、その効果は些か度が過ぎているようだ。

実は、元々面倒見の良いやつではあったんだよな、子どもの頃から……。

アール・ダー村に初めて行った子どもの頃を思い出す。カナメが拾った星ウサギは、結局最後までカナメの手からしかエサを食べなかった。

「何ですか？ 頼みって……」

フェリシアは怪訝そうにイブキを見上げた。

「明後日から一週間ほど、カナメ・グラブラのコンパートメントに行ってくれないか？」

「どういうことですか？」

カナメ・グラブラは明後日から仕事でフォボスに行く予定になっているらしい。そこで、彼の飼っているペットの世話をしたいのだと言う。

「それは、私がしなければならぬことなんですか」

「俺じゃダメなんだとさ」

イブキは不満そうに肩を竦める。

「じゃあ、ここに連れてくるとか……」

「……色々事情があつて、外に出したくないんだ。君も行けば分かると思うけど……」

「まさか、違法生物ではないでしょうね」

「あー、ほぼ正解かな」

「悪事の片棒を担ぐなんて、私嫌です。それに私が通報するかもしれないとは思わないんですか？」

「行つて実際に見てみるといい。君は通報する気にはならないはずだ」

イブキは意味ありげな瞳でフェリシアを見つめる。

とにかく明後日行つてみることを洪々了承して、自室に引き上げたフェリシアは、本をサイドテーブルに置くと、大きなため息をついた。

どうして私なの？ さっぱり分からない。

希代の天才、彼の手にかければ、夢物語でしかなかった装置が現実になってゆく。彼とその友人のカナメ・グラブラは、ある意味、神にも例えられるほどの有名人だ。そんな彼との結婚話が持ち上がった時、フェリシアは困惑した。フェリシアは、もう二度と家庭を持つ気などなかったからだ。

確かにフェリシアはハルのブレインとして再生治療を繰り返し、彼らほどではないにしても長い人生を送っている一人だ。だけど、イブキ・ピラミダリスともなれば、結婚したいと思うブレインの女性などワサワサいるはずで、望みもしていない自分が何故選ばれたのか、さっぱり分からないのだ。

フェリシアには、かつて愛し合つて結婚した人がいた。子どもも生まれて、この人と娘と三人で一緒にハルを脱出できれば良いとそう願っていた。それが、娘が三歳になった頃、何もかもが崩れ去った。

娘が、森の民の力を発症したからだ。

* * *

二日後の夕刻、フェリシアはエリアEで仕入れた新鮮な野菜をいっぱい詰め込んだ袋を抱えて足早に歩いていった。

フェリシアが世話をしなければならぬ動物は、どうやら星ウサギらしい。イブキはそうほのめかした。星ウサギなど、とうに絶滅した生き物だ。

まさかとは思いつつも、ハル大紀行で星ウサギのページにしげしげと目を通す。新鮮な野菜が主食で、特に好物なのは星ブドウらしい。今は星ブドウの季節ではないので、代わりに星ブドウジュースでも用意しようかと思案する。

昨日、職場にカナメ・グラブラがフェリシアをわざわざ訪ねてきた。

「フェリシア・アメロイデスって君？」

カナメは人気のない場所までフェリシアを連れて行くと、声を低めて話した。

「すまない。君まで巻き込んでしまった。イブキから既に聞いていると思うけど、明日からよろしく頼むよ」

「はい。私でできるだけのことはするつもりです。お世話するのに何か気を付けることはありますか？」

フェリシアがそう問うと、簡単な取扱説明書のようなものを作ってきたからと、メモリーを渡された。

「特に、夜眠った時に気をつけて欲しいんだ。理由は分からないんだけど、眠ると低体温になってしまうらしくて……」

星ウサギの生態は謎のままだ。やはり色々扱いが難しいらしいと、フェリシアは神妙に頷いた。

「あの、具合が悪くなった場合は、どうしたら……」

「その時は、イブキに相談してくれるかな？ できればフォボスの僕のオフィスにも連絡をもらえるとありがたい。体力はあまりないようだし、精神的にも繊細なところがあるくせに無茶なことする子だから、手が掛って申し訳ないんだけど……」

精神的に繊細な星ウサギ？ だけど無茶なことをする星ウサギ？
フェリシアは首を傾げる。

カナメから渡されたメモリーには、好き嫌いや、野菜を与える時の注意や、眠った時に注意することや、拗ねた時の対応の仕方などが細々と書かれていた。

拗ねた時の対応……ねえ。星ウサギがヴィジシアターを見て機嫌を直すなんて知らなかったわ。

どちらかと言えば、無口、無愛想、いつも不機嫌そう、というイメージが強かったカナメ・グラブラの意外な一面に目を白黒させながら、フェリシアは注意事項を頭に入れていく。こんな風に濃こまやか
に面倒を見てもらえる星ウサギは幸せだな、などとも思う。そして、その注意事項をすっかり頭に入れた頃には、フェリシアは星ウサギの面倒をみる気満々になっていた。

結果として、張り切ってエリアEにまで足を伸ばして、大量の野菜を手に入れたと言う訳なのだった。

第十七話

今日からしばらくカナメが帰って来ない。仕事が忙しくて帰れないのだと言う。代わりに、夜だけ人を寄越すと言っていた。イブキの配偶者だと言う。どんな人なのか、少し緊張する。

カナメがいない間は、記憶採取は中断だ。

デイモルフオセカの記憶採取は既に半分ほど終了していた。デイモルフオセカの人生の約八年分の記憶がカナメの持っているメモリースティックに採取されたと言う訳だ。記憶採取した直後は、しばらく現実と過去が入り混じって混乱してしまう。気持ちが不安定になる。だけど、デイモルフオセカが森の民の力を失うことはなかった。それにホツとしたのか、がっかりしたのか、実は自分でも良く分かっていない。混乱を収束させるのに半日はかかってしまうので、落ち着いて考える余裕がないのだ。

眠くなると急速に体温が低下する症状は相変わらず続いていたが、それ以外は特に異常がなかった。低体温症を発症してしまう結果として、デイモルフオセカはいつもカナメと一緒にベッドで眠る事になっているのだけれど、心中は複雑だ。

カナメは仕事から帰っても、遅くまで小部屋の端末で仕事をしていることが多い。先に寝ていなさいと言われるので、ベッドの端っこで先に眠ってしまうのだけれど、ふと夜中に目覚めるとガツチリ抱き枕状態になっている。最初はぎよつとしたが、今ではそれが当たり前になっている。何よりも、カナメの腕の中は温かくて心地よかった。振りほどく理由が見当たらないので、そのまま再び眠り込んでしまう。

だけど……ですよ。

同年代の異性と毎晩一緒にベッドで寝ているのに、何も感じてもらえてないようなのは、自分、かなり残念な状況なんじゃないだろうか。

いや、何かして欲しいと言ってる訳じゃなくて……。ただ単に温めてもらっているだけの自分がアレコレ言える立場じゃないことも分かってるけど……。

姉のアリッサムなら、そんなことは無かったんだろうかなどと推測してしまう。幼いころから姉は華やかな人だった。亜麻色の巻き毛にアンバー（琥珀色）の瞳、賢くて優しく、強い力を持った森の民の姉。

そりゃ、自分のことをいいと言ってくれる人がいなかった訳じゃないけど……。

例えば、かつてアール・ダーで、こんなことがあった。

授業中、課題植物を前にディモルフォセ力は途方に暮れていた。

先生は、この植物の葉緑体を増やしてごらんなさいと言ったのだ。周りのみんなは真剣な顔をして課題植物の上に手をかざしている。植物の性質を変えることは、ディモルフォセ力にとってさほど難しい事ではない。では、何故途方に暮れているのかと言うと、彼女の力の発動は、植物次第であるという現実があるからだ。仮に目の前の植物が、葉緑体を増やしたいと思っているのならば、何の苦もなく彼女はそれをやったのけただろう。しかし、彼女の目の前にある課題植物はそれを望んでいなかった。

ズポツと自らの根っこを引っ張り出して、逃亡を始めた課題植物をどうすべきか、デイモルフオセカは途方に暮れていたのだ。

「デイモルフオセカ！ それは一体何ですか？ 早く捕まえなさい
っ」

先生の叱責が飛ぶ。

先生の声で我に返ったデイモルフオセカが、慌てて捕まえようと伸ばした手が、隣の生徒の課題植物に触れると、それも逃亡を開始する。逃げ回る植物と追いかける生徒たちで、授業は大混乱になった。

結局、逃げ出した課題植物をすべて捕獲するまで居残りと言い渡されて、一人森の中。

突然背後から、声を掛けられた。

「デйм？ 何してるんだい？ こんな時間にこんな所で……」
声の主は、シーカス・エウオニムスだった。プラチナブロンドに青い瞳、優しくて賢くてハンサムだとくれば、大抵の女の子は放っておかない。初等部の頃から彼は女の子の憧れの的だった。無論、デイモルフオセカも例外ではない。

エウオニムス家は、比較的オーランティアカ家の近くにあったせいか、デイモルフオセカが初等部に通うようになってからは、シーカスは何くれとなく気に掛けてくれているようだった。そのせいで、デイモルフオセカと姉のアリッサムは、クラスの子によく羨ましがられたものだ。

課題植物の顛末を話すと、シーカスは笑い転げた。

「君、本当に面白い子だね。君のそういう所、すごく好きだよ」

この好きは、ちょっと違うか……。

デイモルフオセカはがつくりと頂垂れる。

あの頃、シーカスとは本当にうまく行ってたと思う。

あの後、逃げ出した植物と一緒に探してくれて、見つかった時には、こんなすごい形態変化を一人でやったのかと、凄く褒めてくれたっけ。あの時は本当に嬉しかったなあ。

デイモルフオセカにとってシーカスは憧れのお兄さんだったし、シーカスにとってデイモルフオセカは放っておけない近所の子くらいのイメージだったんじゃないだろうか。それが、結婚話が持ち上がった……瓦解した。

考え込んでいると、部屋のドアを開ける音がした。

デイモルフオセカは慌てて小部屋に逃げ込む。誰かが入って来たら、それが誰か分かるまでは必ず隠れておくようにと、カナメに言われているのだ。

合鍵でドアを開けて中に入ったフェリシアは、部屋を見渡して小さく何度も頷く。

へええ、完璧ね。ちゃんと隠れているわ。星ウサギって、かなり知能の高い生き物らしいわ。たしか、警戒心も強いよね。

そうだ！

フェリシアは野菜を詰め込んでいる袋をガサガサ言わせ始めた。

小部屋の机の下に隠れたまま息を潜めていたディモルフオセカは、段々不安になってきていた。カナメの説明では、今夜来てくれるイブキの配偶者のフェリシアには、部屋に入ってドアをキッチンと閉めたら、ディモルフオセカの名を呼び、そして自らの名前を名乗るように頼んでいると言う。だから、相手がディモルフオセカの名前を呼ぶ事、フェリシア・アメロイデスだと名乗った事を確認した時点で姿を現すようにと言われていた。

しかし、名前は呼ばれず、名乗ることもせず、かなりの時間が経過している。

まさか公安？

公安は、政府の許可さえ下りていれば、個人のコンパートメントにも無断で入る事が出来るらしい。ディモルフオセカに緊張が走る。その時、ディモルフオセカの名を呼ぶ声がした。

「ディモルフオセカー ディム！ 私よ。フェリシア・アメロイデスよ。出て来てちょうだい。ディーム」

次いで、チヨツチヨツと舌を鳴らす音もする。それは小動物を呼ぶ時に出す音に似ていた。

首を傾げながら、ディモルフオセカは、それでも用心しながら小部屋のドアを細く開けた。そしてリビングを覗いて息を呑む。

何これ……もしかして……宇宙人？

第十八話

深緑色のマスクに、やはり深緑のマントのような布をずるずると引きずった人型の生き物が立っていた。頭から首にあたる場所までフリルタスの葉っぱで覆われていて、両手はハナツコリーだ。

もし、何の情報も持たずにこの状況に遭っていたならば、デイモルフオセ力は、それを変質者だと思ったかもしれない。しかし宇宙人と思い込んでしまったのは、ひとえにカナメからの情報のせいだった。カナメは、植物型の宇宙人がやってくるのだと言った。

もう来ちゃったってこと？ デイモルフオセ力は瞠目する。

「あ、あなた宇宙人ねっ？ も、ももも、目的は何なの？」
デイモルフオセ力は上ずった声で問いかける。

一方、宇宙人の方も驚いているようで、薄紫色の元々大きな瞳を更に大きく見開いて、ハナツコリーの手を差し出したまま固まっている。

「……女……の子？ 宇宙人？ 目的？ なにそれ……」

差し出されたハナツコリーに、突き出したデイモルフオセ力の指先が触れた瞬間、蕾が次々に開花して、まるで黄色い花の花束のようになった。

「あなた、森の民なのっ？」

宇宙人は、驚いた様子で深緑色のマスクを脱いだ。

デイモルフオセ力はぽかと口を開いたまま、中から出てきた見目麗しい女性と対峙した。

フェリシアは少し途方に暮れたまま、森の民の少女と食事を摂っていた。カナメの説明書にあったように、生野菜の生長点を取り除いてディモルフォセカのプレートに乗せる。先ほどから、ディモルフォセカはぽつりぽつりと、自分の身の上を問われるまま話してくれている。

アール・ダー村の生活や学校の様子、家族のことや森のことや村から見える空のこと。フェリシアが子どもの頃に行きたくて仕方が無かったアール・ダー村、そしてもう何十年も前に手放した娘が居たはずのアール・ダー村。

フェリシアの娘は子どもを二人残して、若くして既に亡くなっていた。森の民は元々短命なのだ。

娘の子どもたち、つまりフェリシアにとっての孫たちが、今どうしているのか、調べようと思えば分かる事だが、フェリシアは調べることができなかったからだ。想像できない自分が辛くてやめた。再治療を受けて若返った自分よりも年老いた孫を、想像したくなかったというのが本音かもしれない。

「ところで、宇宙人って何の事？」

不思議そうに問うフェリシアにディモルフォセカはびくりと顔を上げた。

え？　なに？　私そんな大層なことを訊いたかしら？

「……それって、トップシークレットなんですよね？　私……絶対しゃべらないって約束したのに……」

唇を噛んで俯くデイモルフオセカに、フェリシアは首を傾げる。

「誰と約束したの？」

「……カナメと……あの、私が口にしたことを誰にも言わないでも
られますか？ 私が知ってちゃいけないことなんでしょ？ 宇宙人
がもうすぐ責めて来るって……」

デイモルフオセカの言葉にフェリシアは一瞬瞠目してから、急に
俯いて肩を震わせながら慌てたようにパンを口に押し込んだ。

笑っちゃいけないんだわ。ここで笑ってはカナメ・グラブラがつ
いた嘘が無意味になってしまう。そして一方で思う。ハルが、宇宙
人が攻めてくるような豊かな惑星だったなら、どんなに良かっただ
ろうか……。

「フェリシア？ どうしたの？ 私、何かいけないことを言った？

そんなに口にしては不味いことだったの？」

不安そうに問うデイモルフオセカに、頬張ったパンをゴクリと吞
み込んで、小さく笑んで首をふる。

「大丈夫よ。私は誰にも言わないわ。あなたも気をつけて、二度と
他の人に言つてはダメよ」

フェリシアの言葉に神妙に頷くデイモルフオセカにフェリシアは
目を細めた。

カナメ・グラブラはこの子をアール・ダーに帰すつもりなんだわ。
宇宙人来襲は、その為の優しい嘘。

子どもの頃に森の民の力を発症した子どもは、記憶操作を施して
アール・ダー村に移送される。記憶操作ができないくらいの年齢に
なっていれば、フォボスに送られて、そこで労働に従事しなければ
ならない。フォボスにあるバイオラングであるエリアEは小規模な
がら六つもある。できてからの年数が浅いからか、ハル上にあるエ

リアEよりも、植物の状態が不安定で、維持管理に手が掛っていた。手が掛る……つまりそれだけ、そこで働く森の民にとっては重労働になる訳で、それはアール・ダーで暮らすよりも、格段に早く力を使い果たし、長く生きられないことを意味していた。

地下都市のことを何も知らせないということは、アール・ダーに帰す為の必要条件なのだ。カナメ・グラブラは、そんな突拍子もない嘘を、疑わせないほどに平然とついたらしい。彼の意志の固さを見た気がした。

隣のデイモルフオセカが寝息をたてはじめたのを確認して、体温を計る。なるほど、カナメ・グラブラが言ったとおり、急速に手足の先端から冷えていつているようだ。抱きかかえるように体を密着させて、手足を温める。

こんなこと、自分の娘にさえしたことがないと、フェリシアは苦笑する。彼はどんな思いで、この森の民の少女と毎晩こんな風にして眠っているのだろう。

申し訳なさそうに世話を頼んでいた顔を思い出す。彼は、今日の日の為に、寝具一切を新しく替えてくれていたらしい。デイモルフオセカがそう言っていた。

それに……。

『行つて実際に見てみるといい。君は通報する気にはならないはずだ』

フェリシアはイブキの言葉も思い出す。彼は、恐らくフェリシアの娘のことを知っていて、そう言ったに違いなかった。フェリシア

は小さくため息をつく。

フェリシアは大腦生理学を専門にしていた。今は森の民の力の発生のメカニズムを解明する為に、ほとんどの時間を費やしている。

森の民を救いたい。無事な形でプランEに組み込みたい。その思いだけで、もう随分長い時間を費やしてきた。イブキは、それを知っていたんだろうか。

久しぶりにみた夢の中で、フェリシアは生まれたばかりの娘を抱いていた。初めて抱いた赤ん坊の指先は、恐いくらい細くて小さくて……どんなことをしても私が守る、フェリシアにそう決意させたものだった。

遠い昔の甘やかな記憶。果たせなかった約束……。

第十九話

ズルズル　ぴちゃっ　ぴちゃ

薄闇の中で、一際濃く淀んだ闇がぞろりと身じろぎをする。

「ああ……おお　ううどうおお　うううう……」

その声は、懇願しているようであり、嘆き悲しんでいるようであり、いずれにしても地獄の底から響いているように聞こえる。

部屋に入って来た背の高い男は、その淀んだ闇に直面すると、まるでふわふわの子猫の相手をしているかのような甘ったるい声で話しかけた。

「どうした？　そのミルクは気に入らなかったか？　ちゃんと食事を摂らないと、元気にならないぞ？」

「ううどうおお、いいああああ　いいああ……いいいい」

「ダメだっ！　そんなこと……そんなこと二度と言っな」

男が怒鳴ると、闇は怯えたように部屋の隅で更に縮こまった。気まずそうな様子で男が部屋を出て行くと、後はただ、噁り泣くような呻くような声だけが、密やかに部屋を満たした。

サクツサクのパイ生地の中にコクのあるクリームを挟んで何層にも重ねたミルフィーユは、デザート之王様だとデイモルフォセカは思う。その上に宝石のような果物をふんだんに乗せるのは、フェリシアおススメのカスタマイズだ。デイモルフォセカはあつという間に、このデザートの虜になった。

今日は、フェリシアは来るのが遅くなるのだと言った。夕飯は先に済ませておいてほしいと言う。カナメの部屋に転がり込んで以来、一人で夕飯を食べるのは初めてだ。ぼつんとした気持ちで、モルオープンモニターにメニュー画面を呼び出して、気がついたらこのデザート注文していた。

モルオープンとは、分解再生装置の料理版だ。軽く稼働音がした後、呼音が軽やかに鳴り、がらんとだったオープンの中に、注文したデザートが忽然と出現する。モルオープンは、当然アル・ダー村の各家庭にもあったが、地下都市とはメニューが少し異なっているようだった。それに、森の民は果実や穀物などを自分たちで栽培しているので、普段の料理は手作りする家がほとんどだった。モルオープンを使った料理は、特別な日の料理といったイメージなのだ。

香りの良いお茶とパイを堪能しながら、デイモルフオセカはぼんやりと考える。

もうすぐ、カナメが帰ってくる。今日連絡があった。

カナメに早く会いたいのか、会いたくないのか、実は自分でも良く分からない。カナメが帰ってくれば記憶採取が再開される訳で、記憶採取は何度やっても慣れそうにないし、気持ちが不安定になるのが辛い。だけど、それよりも、記憶採取が終わってしまえば、恐らく自分はオーランティアカの家に戻されてしまふのだろう。そのことを考えると……気が重い。誰も自分の帰還を喜んでくれるとはとても思えないからだ。なのに、カナメはデイモルフオセカをアル・ダーに帰す気満々だ。

しかしながらデイモルフオセカの一番の悩みの種は、カナメと別れることを考えただけで、どうしてこんなに気持ちが悪くなるの

か……ということだったりする。デイモルフオセカはため息をつく。カナメは、厄介事である自分をさっさと帰してしまいたいと思っているに違いなかった。

一度、カナメに訊いてみたことがある。それは一番聞きたい事ではなく、二番目に気になっていたことだったけど……。

「え？ 森の民の力が感染るのが気にならないのかって？」

そう言ってカナメは首を傾げた。頷くデイモルフオセカにカナメは苦笑する。

「感染するんだったら、もうとっくにアール・ダー村に行つて、楽しく暮らしてるよ。僕ならね」

「アール・ダー村、楽しいかな……」

「君は楽しくなかった？」

楽しくなかったと言えば嘘になる。

暖かく降り注ぐ柔らかなジタンの光、どこまでも高く薄紫色に染まる美しい空。暑い日に泉で水浴びをしたり、友達とふざけ合ったり、バスケットにママお手製の美味しいタルトや果物を詰めて友人たちと森で遊んだり、キノコを採ったりするのはとても楽しい。星ブドウ狩りの季節には、村で一番大がかりなお祭りが開かれる。蛍光を発する星ブドウの棚の下で、大人も子供も陽気に騒ぐのも楽しかった。

「……でも、じゃあどうして地下都市の人は、森の民の力が感染するって思ってるの？」

デイモルフオセカの問いに、カナメは小さく肩を竦めて苦笑する。「またデイムのどうして病が始まったみたいだね」

「だって……知りたいもの」

「しょうがない子だな。さっき、僕は森の民の力は感染しないって言ったけど、厳密に言えば、稀に力が移ったのではないかと思われる事例が発生することがある」

例えば、一般人をアール・ダー村でしばらく過ごさせたとすると、ほとんどの人は何の変化もないのだが、稀に力を獲得するものが現れる。しかし、その人を再び地下都市で過ごさせると、一年も経たないうちにその力は失われる。かつて、そういう実験をしたことがあった。

カナメの説明にディモルフオセ力は首を傾げる。

「その感染った人は、一般人なの？ それとも森の民になったの？」
「力を保持できない以上、その人は一般人だ。その実験に関しては、詳しいメカニズムは解明されていない。分かっているのは、僕は、君と居ても森の民の力を獲得することはできないと言うことだけだよ」

そう言つて、カナメは肩を竦めて小さく笑った。

食べ終えた食器を片づけようとしたところで、誰かがドアの鍵を開錠している音が聞こえた。とりあえず、ディモルフオセ力は慌てて身を隠す。

フェリシアにしては早すぎる時間だ。予定が変わったんだろうか。それともカナメの帰りが早くなったの？

小部屋の机の下で身を縮めて耳をすます。聞こえてきたのはカナメの声でも、フェリシアの声でもなかった。

「デイモルフオセカ、俺はカナメの友人のコブ・ケルクスだ。出て来てくれないか？」

カナメの友人の、コブ・ケルクス？

デイモルフオセカは考え込む。確かにカナメからその名を聞いたことがあった。たしか、ファームの民で、エリアEから果物や野菜を持ってきてくれている人だ。彼は森の民を怖がっているの、持ってきた野菜や果物をドアの外にいつも置いて行く。だからデイモルフオセカはコブに会ったことが無かった。ちゃんと顔を出せばいいのにと、カナメが愚痴っていたのを聞いていた。そんなコブが、どうしてカナメのいないコンパートメントにやってきて、森の民である自分に会おうと思うのだろうか。

デイモルフオセカは、小部屋のドアを用心深くそつと開けてリビングを覗きこむ。薄く開いたはずのドアは、次の瞬間、強い力で引き開けられた。

「っ！」

驚いて目を見開くデイモルフオセカの目の前に、スラリと背の高い男が立っていた。銀色の鋼のような髪に冷ややかなアイスグレーの瞳。

「デイモルフオセカか？」

瞠目して佇むデイモルフオセカをしげしげと見つめた後、アイスグレーの双眸が弧を描いた。

第二十話

軌道エレベーターの天窓から見えるカーボンナノチューブの先端を、どこまでも目で追うと、遙かかなたにフォボスポートが見える。カナメを乗せた軌道エレベーターは、チューブをガイドにして這うようにスルスル進む。一見頼りなくさえ感じる太さのチューブだが、フォボスとハルをつなぐ大動脈だ。物資の移動にはこれを使うし、よほど急いでいる場合を除き、人の移動にもこれを使う。まるで母体と胎児をつなぐ胎盤のようだとカナメはいつも思う。

軌道エレベーターは巨大なドーナツ状の円盤で、人工重力が無い為、デッドスペースを可能な限り排除して大勢の乗客を収容できるよう客席は立体的に配置されている。ポートを出発して重力から解放されてしまえば、高い席にしようが不便は感じない。よって、ドーナツ外径窓側の高い席が人気なようだ。もともと、宇宙を覗きこむことによって気分が悪くなる人もいるので注意が必要なのだが。

エレベーターの中には、リフレッシュメントや食事をとれるブースも用意されているが、大抵は座席をフラットにして音楽を聴いたり眠ったりしてのんびりと過ごす人が多い。フォボスからハルまで丸一日かかるし、体に負荷を掛ければそれだけ無重力酔いしやすくなるからだ。

カナメは窓際中ほどの高さの椅子に座って宇宙空間を覗きこみながら、この一週間フォボスで起こったことを反芻していた。

今回のフォボス行きは、ハデス市長ルドの依頼で、急きよ決まったものだ。

「カナメ、この前話した森の民の力を搾取するという植物が、どう

やら完成間近らしいんだ。おまえ、ちょっとフォボスに行って見て来てくれないか？」

ルドはそう言った。

しかし実際に来てみれば、なるほど力を入れて研究はされているようだ。完成にはまだ程遠いようだ。お陰でフォボス市長には、来訪の真の目的を散々追及され、おまえはいつまでハルにしがみついているつもりなのかと嫌味を言われ、とつと森の民をなんとかしと文句を言われた。

——できるもんなら、とつくにやってるさ。

カナメは盛大なため息をつく。

せつかく来たのだからと、フォボスの分解再生装置や大脳コンタクトや、その他諸々の機器の点検をさせられて、フォボス市長に目一杯こき使われた揚句、次の来訪を約束させられて、ようやく帰途に就くことができた。

ただ、帰り際、フォボス市長に言われた言葉が妙に引っかかって仕方がない。

「カナメ、ルドには気をつけた方がいい。あいつは変わった。あいつは……いや、私の思いすごしかもしれないか……。とにかく、ルドに会ったら伝えておいてくれないか？ いい加減ハルにしがみつくのはやめると、私が言っていたってな……」

ブルネットの髪を結い上げた、やけに妖艶でかつ冷徹な雰囲気をもつフォボス市長は、ルドの同窓なのだと聞いている。かつては、夫婦だった時期もあるそうだ。その彼女が変わったと言っのならば、やはり何かあったのだらうと思う。要確認だな、カナメは記憶に刻む。

軌道エレベーターのもう一つの天窓からは、赤茶けたハルの大地が見える。海などとうになく、川があつたのだらう水が流れた後や、氷河が削つたと思われる大地に刻まれた深い谷が、未だ遠くを這いずっているドーナツから僅かに確認できる。ドーナツは乾燥した不毛の大地の上にある、まるで泡のように連なつた半球形のドーム群を目ざして進んでいた。ハルポートはその半球形のドーム内にあるのだ。与圧されたドームの中でしか、生身の人間はハルの大地を踏むことができない。

不治の病に伏した惑星ハルは身を縮めて、ただ黙々とその余命を消化しているかのように見えた。

一週間前、出発したハルポートの土産物屋にあつた星ウサギのぬいぐるみを何故かふと思い出す。星ウサギのぬいぐるみのお腹を押すと、きゅい、と鳴いた。

森の民は惑星ハルがこのような不毛の惑星になつてゐることを知らない。しかも、フォボスに人が住んでいるなど、夢にも思つてないだらう。その事実を知つた森の民は、二度とアール・ダー村で暮らすことはできないし、長く生きることできないからだ。

確かに、例えばディモルフォセカをアール・ダーに帰したとしても、彼女はいつか死ぬ。早く死ぬか遅く死ぬかの違いだけだ。再生できない命があるということが、我々を正気に保たせている。カナメはそう思う。

我々が開発した分解再生装置は、実は夢の装置などではない。そう思う。

分解した時点で生物は死ぬ。再生すれば、しかし、それは全く同一のものだろうか？

なるほど、遺伝子も記憶も全く同じだ。科学者の中には、それは同一のものだと証明する者も居る。しかし、カナメにはどうしてもそうは思えなかった。自分は分解された時点で死に、再生された時点で別の者になって蘇えっているのだという気がしてならない。それは皮膚感覚のような曖昧なものかもしれないが、しかし、だとすれば、分解再生装置は、惑星ハルに存在する最後の文明を滅ぼす凶器に過ぎないのだとは思えないか？ そんなものに縋る人々が正気だとは、カナメにはとても思えない。

しかし……そんなものに縋らざるをえないのが惑星ハルの現状なのだ。カナメはため息をつく。

生きているものはいつか死ぬ。文明は滅び、星でさえ永遠ではない。滅ぼそう、あるいは滅びようとする強い意思が、虚空の宇宙空間に満ち溢れている気がした。

存在するものはいつか滅びる。それが世の理ことわりならば、しかし生き延びようとあがくこともまた、命の理ことわりなのだとも思う。死に物狂いであがいている只中になれば、それが正気か狂気かなど、問う方がむしろおかしいと言うものだ。

カナメが今、あがいている理由は唯一つ、慈しむ命が手のうちにあるということだ。慈しむ命が手にあるからこそ、あがく力をも手にしているのだということになる。

手の内にある命……それを在るべき場所に戻さなければならぬのだと思う一方で、手放したくないと思い始めている自分に戸惑う。デイルフォセ力が部屋に逃げ込んで来てから、カナメの暮らしは一変していた。色々なことが彼女を中心にして回り始めている。ここで彼女を失って、果たして自分は元の生活に戻るのか。そう考

えただけで途方に暮れてしまう自分に呆れるほどだ。しかし、大脳コンタクトを使っても力を失わない彼女にとっては、アール・ダーで暮らすことが最善なのだと自分に言い聞かせる。

しかし、その前に……。

デイモルフオセカが見ることを嫌がるので、採取した彼女の記憶をざっとしか見ていないのだが、何かしら感じる違和感にカナメは気づいていた。

嫌がられても、アール・ダーに返す前に調べておいた方が良さそうだ。これも要確認だな。そう小さく呟くと、カナメはリクライニングのボタンを押して座席を倒すと目を閉じた。

カナメの友人のコブだと名乗る男と対峙したデイモルフオセカは、戸惑ったように、その冷ややかなアイスグレーの瞳を見上げる。

「コブ……って、ファームの民ではないの？」

ファームの民は、たしか体内に葉緑体を持ち、緑色の肌をしているはずだ。実際に見たことは無かったが、学校でそう教わった。コブだと名乗ったその男の肌は、カナメと同様に透けるような青白い色をしていた。

「良く知ってるな」

賢い賢いとコブと名乗った男は、デイモルフオセカの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「俺は葉緑体の色素を失ったんだ。アルビノって聞いたことが無い

か？」

アルビノとは動植物でメラニン・葉緑素などの色素を欠き、多くは白色となった固体のことだ。確かにファームの民にも、そういう人がいてもおかしくは無い。デイモルフォセカは、多少腑に落ちないながらも納得する。

「ほら、エリアEの果物を持ってきたぞ」

そう言つて、コブは果物が一杯詰まった袋をデイモルフォセカに手渡した。

コブはダイニングテーブルに乗っている食器を見て怪訝そうな顔で問う。

「もう食事は終わったのか？ まさかとは思うが、デザートだけ食べたわけじゃないだろうな」

内心ぎくりとしながら、デイモルフォセカは首を振った。慌てて食器をダストシユートに放り込む。このダストシユートは分解装置に繋がっている。放りこんだ途端、食器は闇に吸い込まれたように音もなく消えた。

すべてを呑み込んでしまう闇が、生活圏内に普通に存在する事に、最初は凄く違和感があった。もし間違えて、この中に大事なものを落としてしまったらどうするんだろう。取り戻す為に手をつっこもうものなら、その手さえ分解されてしまうと言うのに……。アール・ダー村では、分解装置は各々の家庭には無かった。恐らく中央管理棟にあったのだろう。不用品は管理棟に持って行くことになっていた。不用品がその後どうなっていたのかなんて、考えたこともなかった。

ふと、顔を上げるとコブが鋭い視線で見つめている。その透徹し

た瞳に、デイモルフオセカはごくりと唾を飲んだ。

「……なるほど。カナメが手を焼く訳だ」

すべてお見通しだと言わんばかりに肩をすくめると、コブは苦笑した。

「ダメダメ！ おまえ、やる気あるのか？」

コブが眉間にしわを寄せる。

やる気ないよ！ そんなの飛躍しすぎでしょお？

そう胸の内で叫びつつ、デイモルフオセカは教えられたセリフを再度口にする。

「そーゆーのをな、棒読みと言うんだ。もう一度っ」

コブは部屋に来るなり、根掘り葉掘りデイモルフオセカに質問した挙句、おまえはカナメのことが好きなのかと訊いた。

「え？」

それまでの質問、アール・ダーでの暮らしやカナメの部屋での暮らしとは全く異なった唐突な問いに、デイモルフオセカはポカンとする。

「思うに、カナメはおまえのことが好きだな。昔からの友人である俺には分かるんだ。で、おまえはどうなんだ」

「はあ……そりゃ、好き……ですよ。なんだかんだ言ってもカナメはすごく優しいし。だけどカナメは……」

カナメが自分のこと好きだとはとても思えないと、デイモルフオセカが言いかけたところで、コブは我が意を得たりとばかりに、破顔すると、カナメの心をがっちりつかむ方法を教えてやると言って、前述のレッスンを始めた訳なのだった。

「真面目にやらないのなら、今日の夕飯をデザートだけで済ませたことをチクるからな」

コブはアイスグレーの瞳で睨みつける。そんなことを告げ口されれば、怒ったカナメに、しばらくデザート抜きにされかねない。ここは大人しく従った方が得策かな……。

デイモルフオセカは小さくため息をつく、俺をカナメだと思えと言って背を向けて立っているコブに、背後から抱きつくと、教えられたセリフを呟いた。

「ありがとうカナメ、大好き！」

第二十一話

私は鏡が嫌い。暗闇の中に、物陰に、醜く歪んで息を潜める生き物の影を見つけてしまうから。

だから、部屋にある鏡はすべて壊してしまった。

粉々にひび割れた鏡は、しかし小さな醜い影を無数に映しだして、逆に私を竦み上がらせる。

——死にたい……。死にたい死にたい死にたい死にたい。どうしてもこんなにしてまで生きていなければいけないの？

あの人は、もうすぐ治ると言った。だけど、とても信じられない。もういやよ。終わらせたい……。もう終わらせたいの。

だれか、誰か、たすけて。

一週間ぶりに戻ってきた自分のコンパートメントのドアを開けて、カナメは呆然と立ちすくんだ。

ここは……。誰の部屋だ？

カナメの部屋は、もう何年も前に政府から貸し出された時のまま、何もいじっていなかった。だから全体的にモノトーンで寒々しい。それが一変していた。

暖かい黄色みを帯びた壁紙や、華やかな模様のカヴァーを掛けられたソファ、可愛いティーブルクロスを掛けられたダイニングテーブルの上には、今流行りの樹脂でできた造花が飾られ、焼き菓子

が盛られた籠からは甘い匂いが漂っている。

二日前、イブキからフォボスのオフィスに連絡があった。部屋の模様替えをしてもいいかという伺いだ。あまりにも部屋が殺風景で、デイモルフオセカが可哀そうだとフェリシアが言うのだそう。無論、フェリシアがクレジットは負担するというのが、カナメのクレジットを使ってくれて構わないと言っておいた。思っていたよりも、フェリシアとデイモルフオセカは相性が良いらしい。仲が良すぎるあまり、フェリシアが部屋にほとんど戻らなくなったので、仕方なく自分もカナメのコンパートメントに良く出入りしているのだとイブキは言った。こんな風にフェリシアと打ち解けられたのは結婚して以来、実は初めてなんだとイブキは照れ臭そうに言った。

だから、部屋の模様替えのことは既に聞いていて、了承済みではあったのだが……。

ドアを閉めて、デイモルフオセカの名を呼んだ途端、デイモルフオセカが小部屋から飛び出してきた。

「お帰りなさいっ」

飛び出してくるなり、デイモルフオセカはカナメに飛びつく。思いがけず飛びつかれてカナメはよろめいた。

「デйм、誰が来たのか確認しないうちに出てきちゃダメだろう？」

「だって、声で分かったもん」

少し上気した頬に、喜色を湛えた瞳が輝いている。戸惑ったカナメの腕はしばし空中でさまよった拳句、結局、デイモルフオセカをぎこちなく抱きしめ返した。

これじゃあ、まるで久しぶりに再会した恋人同士みたいだ。

カナメは苦笑して、僅かだが鼓動を早めた心臓のふるまいに戸惑う。

一方、デイモルフオセカは内心驚いていた。
カナメが抱きしめ返してくれた。

今日は朝からドキドキしていたのだ。カナメが帰って来たらお帰りなさいと言いなから飛びつく、それは、あれ以来再々やってきては、カナメの心を掴む方法と称して怪しげな助言とレッスンをしていくコブの指導の賜物だった。

そんなことしたら、絶対にカナメに嫌われて拒絶される。そう言い張るデイモルフオセカにコブは、そんなことは絶対に無い、昔から知っている俺の方が良く分かっているのだと言い張り、カナメの好む服、話題、果てはコロンまで指定して強制する。

コブの助言、実は凄いかも……。

いつものように先に寝ていなさいと言われたので、ベッドに横になったままカナメを待つ。起きて待つていようと思うのに、ベッドに横になってしまえば、あっという間に眠り込んでしまう自分の体質が今夜は恨めしい。

カナメに訊きたいことがあったのに……。

意識を浮上させようと何度も寝がえりを打つ。しかし甲斐なく、逆にいつもと違う滑らかな肌触りの夜着が素肌に纏わりついて、更にデイモルフオセカを心地よく夢の世界にいざなう。

今夜着ているパジャマもコブが指定したものだ。薄くテロンとした生地ของ ロングタイプのネグリジェで、アプリコット色の光沢のある生地は、デイモルフオセカの痩せぎすの体を比較的豊かに見せて

くれる。それでも抵抗して、おとなし目のデザインに変えたのだ。これを着ないと、コブはあることないことカナメにばらすと言った。例えば、カナメの悪口をイブキに言ってたとか、ヴィジシアターの有料アダルトサイトばかり見てたとか……。

「ちょっと待つてよ。あることないことばらす……って、それ、ないことないことじゃないの！ 私、そんなこと言っていないし、そんなの見てないし……」

憤慨して声を上げるデイモルフオセカに、コブはこう言っただけで睨みつけた。

「おまえは、ここに居たくはないのか？」

その一言にデイモルフオセカは黙りこむ。

自分でもどうしようもないくらい、ここを追いつめられることが恐ろしくなっていた。カナメが帰れない代わりにフェリシアが来てくれるようになってからは尚更、カナメの不在が実に心もとない。いつの間にか自分はこんなにもカナメに依存してしまっているのか、自分でも訝るほどだ。

ところで、どうしてコブは、カナメの心を掴む方法をこんなに熱心に自分に教えるんだろうか。ふと感じる違和感。

コブが最初に部屋に来た日、コブは自分の来訪をカナメには絶対に言わないと言った。散々森の民を恐れていた自分が、今更、森の民と仲良くしていると知れるのはきまりが悪いと言っただけだ。しかし、本当にそれだけだろうか。

コブには言わないと約束したけれど、デイモルフオセカはカナメに確認するつもりだった。

コブは、本当にファームの民なのかと……。

学校の教科書で習ったファームの民は、緑色の肌は葉緑体を持っているからであり、それによって彼らは体内で光合成ができる。だから水分やミネラルを経口摂取する以外は、食物を口にしないと習ったのだ。しかしコブは、デイモルフオセカがすっかり勧めた焼き菓子は何の躊躇いもなく口にした。食べても大丈夫だったのだろうか。アルビノだから、十分な光合成ができないのだろうか。

しかしその疑問をカナメに問うことは叶わぬまま、デイモルフオセカはいつしか深い眠りに引きずり込まれていった。

フォボスから帰って来たばかりで、できることならさっさと休みたいところだったにもかかわらず、カナメが小部屋に籠って大して急ぎでもない仕事をダラダラとしていたのは、ひとえに動揺していたからだった。

ぎこちなく抱きしめたデイモルフオセカの体の柔らかさに、ふと香った懐かしい匂いに、ひどく動揺していた。

更に、ぐっすり眠り込んでいつものように冷たくなっている彼女の体を、いつものように抱きしめて更に動揺する。いつもと違う薄い滑らかな布地が、彼女の体の線をダイレクトに伝えていたからだ。

今までは背後から抱きしめて温めながら眠っていたのだが、そうすると彼女の胸辺りに当たってしまう手のやり場に困るので、今夜は前から抱きしめてみる。冷えきった足先に足を絡ませ、冷えた指先を胸に抱え込む。それでもなんだか手のやり場がなくて落ち着かないので、彼女の髪を何度も梳きあげる。そうしているうちに、やがてカナメもまた深い眠りに落ちて行った。

第二十二話

やれることはすべてやった。

蹲って啜り泣く影に向かい合って、男は小さくため息をつく。

ハル一番の名医だと評判の医者に診せても、再生治療を繰り返してさえ、彼女が元に戻る事はなかった。再生が不完全な森の民ならばまだしも、一般人でこのような状態になってしまうのはひどく珍しい。十万人に一人あるかないかだろうと医師は言った。十万人に一人だろうが百万人に一人だろうが、当事者にとっては百パーセント、その現実と向き合わねばならない。次の手が無いまま、もう随分長い時間を費やしていた。

希望は摩耗して失望に変わり、やがてその奥から、手に負えないほど巨大になった絶望が浮上する。

後、俺にできることは、楽にしてやることだけなのかもしれない。でも一人ではいかせない。一人にはしない。

俺のせいだから……俺のせいなんだから……。

男はしばらく頭を抱え込んでいたが、やがて意を決したように立ち上がった。

だが、まだだ。まだ二人も残ってる。許さない。俺はあいつらを許さない。

真夜中にふと目が覚めたデイモルフォセ力は、いつもと違って、カナメに前方から抱き枕にされていることに気づいた。穏やかな寝

息が、ディモルフオセカの頭上から聞こえる。

胸元に挟まれた手でカナメの胸板をなぞる。いつ鍛えているのか、彼の胸筋はやけに硬くしまっている。首筋から鎖骨、鎖骨から大胸筋へと指先でゆっくりなぞっていく。好奇心のままに、最初はぎこちなく徐々に大胆になりながら、胸から肩、肩から二の腕へと指を滑らせる。

こんなに力が強そうな腕なのに、ディモルフオセカに触れる時は、まるで生まれたての雛に接しているかのような柔らかな扱いだ。でも、一旦この腕が本気を出せば逃げることは不可能だ。そう本能で感じる。

そう感じた途端、ひどく心臓がドキドキした。

恐かったからじゃない。それは……もつと息苦しくて、胸が締め付けられるように苦しいのに熱い、甘やかな感覚。

「少しおイタが過ぎないか？」

突然頭上から降って来た少し怒っているような声と、なぞっていた小さな手を掴む大きな手に、ディモルフオセカは息を呑んだ。

「ご、ごめんなさいっ。あの……起こしちゃった？」

「君がどんなつもりでこんなことをしているのか知らないけど、僕も一応男なんですね。君を地下道で襲おうとしていたやつと何ら変わらない。獣が食いつくかどうか試してみるなんて、愚かなことではない方が身のためだ」

そう言つと、カナメは手を放して起きあがった。

「違う！ カナメはあんな男とは違う。だって、カナメは私を助けてくれたじゃない。あんな人とは違う……」

慌てて起きあがりカナメの夜着の袖を捕まえたディモルフオセカ

の口をカナメの唇が塞ぐ。そのままベッドに押し倒されて、両手首を押さえつけられた。

「君は自分のやっтерることが分かつてないんだ。そうなんだろう？」

デイモルフオセカは瞠目したまま懸命に首を振る。

「私は……私はカナメの傍に居たい。森の民の自分がカナメの傍に居れるわけがないってことも分かつてるのに、それがどれほど無茶な事かっことも、カナメにとってはただの迷惑だっことも、分かってるのに……」

幾筋もの涙が零れ落ち、頬をつたって耳の奥にまで流れ込む。その冷たさにぞくりとして身震いした。

「どうしようもなくって……どうしたらいいか分からなくって……」
後は思いが膨れ上がって言葉にならなかった。

暗闇の中に響く嗚咽が恥ずかしくて、居たたまれなくて、だけど止めようがなくて困惑していると、再び唇を塞がれた。軽く何度も角度を変えて次第に深く。触れる唇の感触に夢中になっているうちに嗚咽は収まって、代わりに甘やかな吐息が零れる。

「デйм、僕など君にはちっとも相応しくない人間だ。君はここに来るまでに辛い思いや恐い思いをたくさんしただろう？ だから、たまたま君を助けた僕を美化して考えていただけだ。君は君の居るべき場所に帰って、君に相応しい人と未来を築くことを考えなさい。一時の気の迷いで、馬鹿なこととはしないことだ。だからすまない、今のは忘れてくれ」

目を潤ませて見上げるデイモルフオセカを置き去りにして、カナメは部屋を出て行った。

一人になった寝室で、デイモルフオセカはコブの言葉を思い出す。

カナメは臆病者なのさ。大事な人をまた失うことが恐いんだ。だからやつは、人であろうと物であろうと、頑なに所有しようとしな。その頑なことと言ったら、もう気が遠くなるくらいさ。おまえは、そんなカナメの懐に入り込むことができた数少ない人間だ。しかし、まだ奴の心の鍵を解いただけに過ぎない。ドアを開けて入ってみなければ、奴の中に巢食う闇を理解することも、その闇を抜うこともできない。俺は奴の友人として、何とかしてやりたいと思うてるんだが、俺にはどうしようもなくてな。おまえ、なんとかしてやってくれないか？

コブ…… やっぱり私じゃ無理みたい。森の民だし、それに私ね、アール・ダー村で嫌われ者だったんだ。力だつてコントロールできなかったから、森の民としても役立たずだったし……。

誰も面と向かつては言わなかったけど、いつもいつも、何かしら感じていた疎外感があつた。学校でだけじゃなく、家族の中でも……。

膝を抱え込んだまま、デイモルフオセ力はしゃくりあげる。

婚約が決まつてからは、既に恋人のいた婚約者のシーカスは、やけにデイモルフオセ力によそよしくなつていたし、両親は喧嘩ばかりするようになったし、唯一の味方だと思つていた弟のホルトが怒りっぽくなって、デイモルフオセ力に辛くあたるようになっていた。年頃の男の子だし、デイモルフオセ力の何かが気に障るのだらうと距離をとれば、更にそれが気に入らないと怒りだす。自分一人のせいで、周りの人すべてが不協和音を奏でているようだった。

だから自分さえいなくなれば、すべてがうまくいくんだと思つた

のだ。

だけど、結局、私は辛い現実から逃げただけだったのかな。私つてば、いつだって逃げてばかりで……でも、結局何も変わってなくて。相変わらず、ここでも迷惑をかけて困惑させて……。私、どうしてこんなにダメダメなんだろう。

私、どうしたらいい？ どうしたら良かった？

ベッドに突っ伏して、シーツの表面を指先でなぞる。幽かに月光樹の爽やかな香りがした。カナメはアール・ダーにあるダフネの泉の匂いがする。切ない気持で頬を擦りつける。

月光樹は、金色に輝く月ウエスペルの守護神であり美の女神であるウエスペルの化身だと言われる。赤い月は軍神ルシフェルだ。神話では、ルシフェルとウエスペルは美しい双子の兄妹だ。兄妹なのだけれど愛し合ってしまう。禁断の恋というやつだ。ルシフェルとウエスペルは神の怒りを恐れて逃げる。逃げて、逃げて、辿りついたのが、フォボスという大海だ。二人はそこで永遠の愛を誓い合つて海に身を投げた。哀れに思った神様は、二人とフォボス海を夜空の星にした。

二人が身を投げた海だから、フォボスは不吉な月と言われている。アール・ダー村で、フォボスを見てはいけないと言われている所以だ。

森の民は、どうして一般人に恋をしてはいけないの？ 兄妹じゃないけど、やっぱり、これも禁断の恋なのかな……。

怖い思いをした後だから勘違いしてるんだってカナメは言っただけ

ど、本当にそうなのかな。だって、カナメだって随分恐かったよ？脅かすし、怒るし、二言目には帰すって言うし……。なのに、ここを出されてカナメともう二度と会えなくなるって考えただけで、こんなに切なくて苦しくなるのはどうしてかな。

苦しい……苦しいよ……カナメ。

翌朝目覚めると、何事もなかったかのように、不自然なくらい自然に、前の暮らしに戻っていた。

カナメは仕事に行く前に記憶採取の器具をデイモルフォセカにセツトして出て行き、終われば、デイモルフォセカはヴィジシアターを見て好きに過ごす。

変わったところと言えば、あれ以降、カナメが二度と一緒のベッドで眠ろうとしなくなったことだ。代わりにどこで手に入れたのか、あるいは自作したのか、温め機能が付いたシーツをベッドに敷いた。

第二十三話 ＊（前書き）

残酷描写があります

第二十三話 *

今日は早く帰る、そう決めていた。

数日前、些細なことで彼女と言い争いをしてしまったのだ。自分が悪かったとは思っていないが、いい加減機嫌を直しておかないと厄介なことになることは経験的に分かっていたし、何よりも、ベッドで一緒に眠れないのが不便だった。もう何日もソファで眠っている、首の筋を痛めてしまったのだ。

コンパートメントのドアを開けた途端、彼は違和感に気がついた。

幽かに何かが滴る不規則な音。不均一に混ざりこんだ饅えた匂い。
ぴちょん ぽつん ぽつっ ぴちっ

果たして、リビングには大きな血だまりがあつて、そこから色々な部屋に点々と血の染みが続いていた。一つは寝室に、一つは書斎に、一つはシャワールームに。

彼は息を呑む。慌てて彼女の名を呼んだが、しかし返事は無い。

荒々しく寝室のドアを開くと、彼女はベッドに横たわっていた。

彼は安堵の声を上げる。

「なんだ、眠っていたのか。リビングの血はどうした？ 怪我でもしたのかい？」

よく眠っているらしい彼女の髪に手を伸ばした。しかし、その頭を支えているはずの首は頼りなく揺れ、次の瞬間、頭はごとりと鈍い音をたてて床に落下した。

「うわああああ」

いつもより外が騒がしいのは気のせいだろうか。

ディモルフォセカはドアに耳を寄せて外の様子を窺う。

慌ただしく近づいてくる靴音が聞こえて、ディモルフォセカは慌てて小部屋の机の下に逃げ込む。

緊迫した様子でドアは荒々しく開けられ、入って来た人物は無言のまま小部屋のドアも開くと、真っ直ぐにディモルフォセカが隠れている机に歩み寄ってきた。机の下のディモルフォセカは身を縮めて目をきつく閉じる。

「ディム！」

恐る恐る目を開けると、切羽詰まった様子の双眸が覗きこんでいる。

「カナメ……もう、ちゃんと名前を呼んでよね。びっくりしちゃったよー」

ほっとした様子でモゾモゾと机の下から這い出すと、途端にふわりと体が持ち上げられ、抱きしめられた。

「無事でよかった」

「カナメ？　どうかしたの？」

「三日後のガイアエクスプレスに乗れるように手配した。君はそれに乗ってアール・ダー村に帰るんだ」

記憶採取は後三年分を残すだけになっていた。カナメは、それが

終わったと同時にデイモルフオセカを帰すつもりらしい。

「……随分急なんだね」

抱きしめられたまま、デイモルフオセカは顔を歪める。

「大脳生理学研究所の職員が君に同行してくれることになってる。

彼女が、研究目的で君を地下都市に招聘したんだと証明してくれるだろう。彼女はフェリシアの知り合いで、とても親切な人だそうだから、きっと大丈夫だ。問題なく君はアール・ダーに戻るだろう」

「……戻りたくないよ。私、戻りたくない……」

デイモルフオセカはカナメを見上げて懇願する。

「君はアール・ダー村に戻って幸せになるんだ。君の幸せを……心から願っている」

「私、戻っても幸せなんかになれないよ？ カナメが居ないのに……」

「一人ぼっちなのに……」

見上げた瞳から涙が零れ落ちる。

「一人ぼっちなんかじゃないだろう？ 家族もいるし、婚約者も居る。なかなかハンサムで誠実そうな人じゃないか。君にはもったいないくらいだ」

カナメの言葉にデイモルフオセカは瞠目する。次いでクシヤクシヤに顔を歪めてわめき散らした。

「記憶を見たの？ 私の記憶を見たのね？ 嘘つき！ 見ないでって言つたのに……。カナメ、見ないって言つたのにっ！ 嘘つきっ、嘘つき！」

デイモルフオセカは寝室に駆けこむとドアを閉めた。ドアの向こう側から泣き声が聞こえてくる。

寝室のドアを見つめて、カナメは小さくため息をついた。

嘘つき……か。だけど、採取した記憶を見なければ採取した意味

がないだろう？ 何の為に記憶採取してると思ってるんだよ。

カナメは一人ごちる。

それに……。

カナメは更に深くため息をついた。

森の民は地下都市には居られないんだ。仕方がないだろう？

カナメだつて手放すことを望んでいる訳じゃない。時間を費やして、手間をかけて、一つ一つ紡いできた二人一緒の時間が、自分でも驚くほど大切なものになっている。だからこそ、もう二度と会えないだろうことを思えば、痛みにも似た寂しさが胸に湧く。

しかし、ここには未来が無い。僕は一般人で、彼女は森の民だ。

それ以前に、途轍もないほどの年の差なのだ。

再生治療を繰り返してカナメの体は摩耗している。再生治療といつても完全ではないのだ。子孫を残せるのは再生三回までが限界で、その後は限りなく困難になる。未来を紡げない一般人の自分と、未来を築くことを望まれている森の民の彼女。何一つとっても、何をどう考えても、一緒に居られる道が無かった。

カナメの住居があるこの地域は、高度警ら地域に指定されていて、セキュリティの厳しい地区だ。住人のほとんどがハルのブレインなのだ。しかし、そんなセキュリティの高さをあざ笑うかのように、今日、例の殺人鬼が現れた。

地下都市ハデスでは、近年、凶悪犯罪件数は増える一方だ。プランE始動への期待と不安で人々の心が不安定になっているのではないか、というのが専門家の意見だが、その不安要素を取り除く術は

なかった。もうハルの人々には退路がない。後戻りはできないのだ。

ここには未来もない、安全さえない。あとカナメにできることは、デイルフォセ力を、彼女にとって一番安全なアール・ダーに戻すこと、それだけだった。

第二十四話

カナメは小部屋の端末の前に座っていた。記憶採取装置からデータが送り込まれている端末に端子を差し込み、電極のついた器具を頭に装着すると採取されたデータが直接脳に伝達される。目を閉じれば視神経をはじめ、様々な五感を司る神経に作用して、まるでその記憶の中の登場人物になったかのように見たり聞いたり感じることもができる。大脳コンタクトと呼ばれる方法だ。

カナメはデイモルフオセカが横たわっているリクライニングの横に腰を下ろすと器具を装着しようとして、ふと手を止めた。

どうせ僕は嘘つきだからね。

嘘をつかないとは初めから言っていない。しかし、昨夜デイモルフオセカに嘘つきだと泣かれたことがかなり堪えているらしい。ひとり言い訳してみたことを呟いてしまっている自分に苦笑する。

「ああ、懐かしいな。アール・ダー村だ」

カナメがアール・ダー村に行ったのは三百年も前のことだ。デイモルフオセカの記憶の中のアール・ダー村は、一見したところカナメが訪れた頃とあまり変わっていないように見えた。

イブキとカナメが十三歳。驚異の早さで飛び級をして高等部に編入された二人は、既にその年高等部を卒業しようとしていた。

教育課程最後の休暇、三人はガイアエクスプレスに乗って初めてハルの地上に出た。アール・ダー村で研修を受けるためだ。研修という名のご褒美旅行だった。

イブキは自ら考案した新たなシステムへの褒美で、カナメは半年間教師ロボットを分解しなかったことへの褒美だった。自分のやったことに比べるとおまえのやったこと、否やらなかったことでは随分社会への貢献度が違う。おまえはいつでも優遇されていて不公平だったと、今でもイブキが文句を言う所以だ。コブは、お目付け役として同行を許可された。

当時難しい年頃で、並に輪をかけて生意気だった二人を、ほとんどの大人は腫れものように扱った。しかしコブだけは、持ち前の子ども好きを発揮して、根気よく忍耐強く二人の面倒を見たのだ。それを認められた。

何はともあれ、その旅行がきっかけとなって三人は、親友になった。

カナメは、デイモルフオセカが見ている記憶の中のアール・ダー村へと深く潜り込んでいった。

デイモルフオセカ、三歳の記憶は、眩しい強烈な光の記憶から始まっていた。

もう随分長い間、デイモルフオセカは泣いていたはずなのだ。なのに何が悲しかったのか覚えていなかった。ただ強すぎる光が恐くて、光の向うから吹いてくる風が恐くて、不安で、ただ不安で一人泣きじゃくる。見知らぬ部屋、見知らぬ家具、見たことのない透明な壁は少しスライドしていて、そこから風は吹いているのだった。

後ろでドアを叩く小さな音がして、栗色の長い巻き毛の女の子が入って来た。

「どうしたの？ 何が悲しいの？」

その見知らぬ少女は首を傾げて問いかける。

「ママが……ママがいなくなっちゃったの」

デイモルフォセ力はしゃくりあげた。

そうだ、ママと離れ離れになってしまったんだった。

幽かに浮上する記憶。

「ママなら下にいるよ？ 泣かないで？」

長くカールしたまつ毛が縁取る大きな褐色の瞳が、デイモルフォセ力を心配そうに覗き込む。

「ママ？ ママが下に居るの？」

目を見開くデイモルフォセ力に、女の子は力強く頷いた。

「行こ？」

伸ばされた女の子の手に、戸惑い気味に、同時に嬉々としてデイモルフォセ力は手を伸ばす。しかし立ち上がった途端、ズキンとひどい頭痛がしてよろめいた。一瞬目の前が真っ白になって歪む。

「何してるの？ 早くう」

女の子に急かされて、デイモルフォセ力は小さく肯いた。

階下には、確かに人がいた。新聞を広げて読んでいる男の人と、キッチンに白いエプロンを付けた女の子が立っている。

「ママあ」

女の子は、白いエプロンをつけた女の子の人に縋りつく。

「あらあら、アリッサム、どうしたの？ デイムと仲良くしている？」

「デイムはママがいなくて泣いているの」

女の子は少し緊張した面持ちでアリッサムと呼ばれた女の子に頷

き返すと、デイモルフオセカの目線に合わせるようにしゃがみこんだ。

「あらあら、デイモルフオセカ、どうしたの？ ママはちゃんと下にいたわよ。こんなに目を腫らして……可哀想に」

その女の人は、少し不安そうに首を傾げると、エプロンの端でデイモルフオセカの涙を拭いた。デイモルフオセカは混乱する。

この人が……ママ？ なぜ……。

「ママ？」

声に出して質問してみる。

「どうしたの？」

その人は深い肌色のふつくらした手で、デイモルフオセカの青白い手をとって返事をした。デイモルフオセカは戸惑う。彼女は、何故あなたがママなのかと問うたつもりだったのだ。ちらちらと様子を見ていた男の人が、新聞を置いてデイモルフオセカに微笑みかけた。

「どうした？ 夢でもみたのかい？ ぼうつとした顔をしているね」

「……」

この人は誰？

「ほら、パパのところへおいで。いつもみたいにキスをしておくれよ」

その人はにつこり微笑んで両手を広げた。

「……パパ？」

声が掠れる。

いつもみたいに？ いつもって……どうだったかな。

「なんだい？」

その人は返事をする。デイモルフオセカをふわりと抱き上げた。デイモルフオセカは硬直したまま抱き上げてくれた人の胸に頬を寄

せた。不安な時の癖で、左の親指を吸ってみる。

「ディム、いい子ね。あなたにはパパとママとアリッサムがついて
いるからね」

ママはそう言って、ディモルフオセカの頬にキスをした。

どうしてあなたたちが私のママとパパなの？ どうして返事をし
て、私を抱きしめるの？

しかし、それを問うことができない。何か尋常でない強い力が、
ディモルフオセカの中の疑問を否定する。世界が彼女の中の違和感
を全力で否定していた。そしてそれは更に、この世界の秩序の中に
身を沈めると無言の圧力を掛ける。幼いディモルフオセカには、そ
れを言葉にすることはできなかったが、本能で理解しやがて受け入
れた。

ディモルフオセカは泣いた。それは抗うことのできない圧力に対
する幼子の精いっぱい抵抗だったのだが、皮肉にも、泣くことに
よって昂ぶった神経は僅かに残っていた彼女の中の違和感をかき消
した。結果として幼いディモルフオセカは、それより以前の記憶を
完全に喪失したのだった。

採取された記憶を追いながら見ていたカナメは、慌てて浮上する
と記憶採取装置を緊急停止させる。しかし、時は既に遅かったよう
だ。

「ディム？ ディム……」

目を見開いたまま反応の無いディモルフオセカの肩を揺する。

違う……違う、違う！

天地が逆転して、頭から真っ逆さまに落ちたような気がしてディ

モルフォセカは目を覚ました。誰かが自分の名を呼んでいるのは聞こえていたが、何が何だか分からない。

ぼんやりとしたまま考える。

——この子は森の民なんかじゃない！

そう叫んで泣きじゃくる、夢に出てくる輪郭だけの女性、あれは……私のママだったんだ。ゆるゆると記憶が蘇える。

おいで、おいで、と名を呼んで、歩み寄れば抱き上げて、頬ずりをしてくれたあの人は私のママだった。好きで、好きで、片時も離れたくなかった人だった。輪郭の中に鮮やかな笑顔が蘇える。

そうだ……私のママは、私と同じ緑色の瞳をしていたんだった。

大好きだった笑顔もまろい声も思い出したのに、名前が思い出せなかった。

ごめんね、ごめんね、ママ。私はあなたの名前が分からない……。

泣きじゃくるディモルフォセカの肩を抱きしめて、優しく髪をなでながら、思い出すな。忘れる。忘れるんだと耳元で囁く心地よい響きの声を聞きながら、ディモルフォセカの意識は薄れていった。

第二十五話 *

どうしてもつと早く彼女の記憶を精査しておかなかったのか。嫌われようが泣かれようが、強行すべきだったのだ。消された記憶を再び消すことは、初回に比べると遥かに難しい。否、ほぼ不可能だ。しかも年齢の壁もある。

カナメは頭を抱え込む。

彼女の記憶を一目見た時に感じた違和感。答えの分かった今となつては、それは、あまりにも当たり前のことのように感じられた。

あんなに大柄な家族の中にあつて、デイモルフオセ力はあまりにも華奢過ぎるのだ。髪の色こそ同じ栗色だったが、それ以外、彼女は他の家族の誰とも似ていなかった。そのことに気づいていれば、すぐにでも記憶採取を中断していたはずだった。

「そうか……デイモルフオセ力は地下都市生まれの森の民だったのか……」

イブキが難しい顔をして呟く。

地下都市で生まれた森の民は、記憶を修正してアール・ダー村に送られる。しかし、記憶を修正できるのは幼い子供だけだ。だからこそハル政府は、——森の民の力は感染する。そんな確証のない噂を流してまで幼いうちに発症したものを確保しようとしている訳なのだ。だから、森の民の力が感染するという噂は、実は、その噂を恐れた者が通報することを見込んでの情報操作に過ぎない。

では記憶を修正できない歳になってから発症したものはどうなるのかと言えば、その者たちの一部は研究対象として地下都市で暮ら

すが、大半はフォボスに移送されて、そこで働くこととなる。森林として成熟していないフォボスのエリアEの植物たちは、力を大量に消費する。アール・ダー村で暮らすような訳にはいかない。

「何とかして、もう一度記憶を消すことはできないかな……目覚めてすぐに思い出した記憶を忘れるように暗示をかけておいたんだけど……」

頭を抱え込んだままカナメは呻く。

「難しいわね。年齢的にもアウトだし、更に、一度失って再度戻った記憶を消すことはとても難しいの。仮に暗示にかかって一時的に記憶を封印できていたとしても、入村時の記憶チェッカーを通過できないと思う。通過できるほどの処置をすれば、精神を壊しかねない」

フェリシアも呻く。

デイモルフオセカの母親も、かつての自分と同じように悲痛な思いで彼女を手放したに違いなく、それを思うと、まるでデイモルフオセカが自分の娘のようにさえ思えてきて胸が痛む。

フォボスになど行かせたくない。

「……フォボスなんかに行かせない」

まるでフェリシアの心の声に応えるかのように、カナメが呟いた。

とりあえず、アール・ダーまでの同行を頼んだフェリシアの友人には帰村の延期を伝えてもらっておかなければならないだろう。カナメはめまぐるしく考える。

「私の友人には、実験が長引いていて、アール・ダーに帰る日を延

期したと伝えるわ」

フェリシアはそう言ってくれたが、ガイアエクスプレスに乗せる為に、既に彼女の身元を晒したのだ。森の民の彼女が地下都市に居ることは、既に外部の人間に知られている。そう長くは、ここに置いておくこともできない。事態は悪くなる一方だ。

イブキとフェリシアが引き揚げた後、リビングの椅子に一人座りこんで、カナメは頭を掻きむしる。
どうする……どうしたらいい？

ふと、脳裏にアイリスの笑顔が浮かんだ。

『カナメ、ポモナの種類を公園に植えましようよ。きっと毎年たくさん実がなるわ』

そう言ってジタンみたいに笑った少女はもういない。蘇らせる術も、彼女が切望した世界も実現できぬまま、気が遠くなるほどの年月が過ぎて……。

ポモナの木はまだアール・ダー村の公園にあるのだろうか、毎年実をたくさんつけているだろうか。懐かしさで胸が痛くなる。

自分はまたしても、大切な人を救えないのかもしれない。

カナメは、強い催眠を掛けられて眠っているデイモルフオセカの髪を、途方にくれたままそっと撫で続けた。

部屋の中には鉄錆くさい臭いが充満していた。床に流れ出した夥しい血を気にすることもなく、男は淡々と作業を進める。

あの日、妻は一人で居住区を出た。地下都市の更に下にある地下道へ向かう為だった。我々が住んでいる居住区は高度警ら地区の中にあつて、セキュリティが非常に高い。だから用事で居住区を出ると妻が言いだしたその日、俺はくれぐれも気を付けるようにと繰り返した。

荒廃した惑星ハルの地下には、荒廃した闇が巢食っているからだ。

我々には秘密があつた。誰にも知られてはいけない秘密だった。だからこそ、妻は一人つきりで、人目を避けて出かけたのだった。

複数の人間に暴行されて……いや、遠回しな表現はやめよう。凌辱されて絞殺された妻は、その夜、冷たい骸となつて俺の元に帰ってきた。

死ぬ直前の記憶を可能な限り採取した後、俺は職権を最大限利用して、速攻で再生治療を施した。しかし、妻が元の姿を取り戻すことは二度となかった。不完全に再生された体は、まるで軟体動物にでもなつたかのように、その形状を維持できなくなつてしまつたのだ。

医者と言う、こんな症状は前例がない。非常に珍しい現象だ。十万人に一人あるかないかでしょう。

——だからなんだ？ 非常に珍しいからなんだと言うのか……。俺はわめき散らした。

再生を繰り返し長い歳月を生きていた俺と違って、彼女はとても若かつた。初めての再生だったのだ。歳の差を越えて、彼女は俺を

とても愛してくれた。彼女のほほ笑みは、激務に明け暮れる俺の癒しだった。彼女さえいれば、大抵のことは笑って済ますことができた。彼女の幸せが俺の幸せだったのだ。

彼女との間には、冷凍保存してあった精子を使って生まれた息子がいた。まったく問題が無かった訳ではないが、親子三人で幸せに暮らしていたのだ。

そもそも俺は、エクソダスにそれほど期待していなかった。もし親子三人、揃ってエクソダスができないのならば、一緒にハルに残ってもよいと思っていた。

我々はこの惑星^{ほし}で生まれたのだ。ハルを捨ててどこに行くと言うのか。俺は、親子三人で穏やかに母惑星最期の日を迎えられるならば、むしろその方がよいとさえ思っていた。

俺はけっして多くを望まなかった。ところが、周囲の者たちは、俺のことをそんな風に見てはくれなかったらしい。それを妻の最期の記憶を見て初めて知った。暴行に加わった者たちの顔の数名には見覚えがあり、その者たちは、異口同音に俺を口汚く罵っていた。

非難するならば良い。しかし何故それを弱い存在である妻にぶつける？

その者たちが妻に吐きかけた暴言が、妻に施した凄惨な暴行が、俺を呼ぶ妻の悲鳴が、俺の心に闇を巢食わせた。

俺は凌辱などという悪趣味な真似はしない。比較的安らかに死ぬように素早くくびり殺した後、しかしバラバラに切り刻むのは、あいつらに対する罰だと信じている。凄惨な死体となった妻を見て、

トラウマにでも何でもなつて、二度と再生する気にならなければ良い。自分の大事なものが助けを呼ぶ悲壮な声を、愛するものを失う悲しみを、その薄汚い脳みそに刻みつけられればそれで良かった。

そもそも、生命をも分解再生する装置とは一体何だ？ そんなものがあるから、人は命を軽んじるようになるのだ。物を大事に思わなくなるのだ。往生際が悪くなり、美しく滅びようとする意志が鈍るのだ。母なる惑星が滅びるのならば、そこで発生した文明もまた、ともに滅びるべきなのだ。

俺は犯行にかかわったやつら、分解再生装置などという忌まわしい機械を作ったやつら、ハルを見捨てて逃げ出そうとしているやつら、それらすべてを絶対に許さない。

男は切断した体の部位をそれぞれの部屋に置くと、血糊がべったりとついた皮手袋や切断用に使った刃物や汚れた衣類を、すべてダストシュートに放り込んだ。

第二十六話

抱きしめられたまま、デイモルフォセ力は頭を優しく撫でてくれる手に頬をすりよせた。同時に気遣わしげな声が降ってくる。

「デイム……君、記憶は……」

「……カナメ、森の民が地下都市のことを知るとどうなるの？ 私、もうアール・ダー村には帰れないんだよね？ 本当のママの顔思い出したの。もう忘れないと思う。私……処分されるの？」

見上げると、悲しげに顔を歪ませたカナメと目が合う。

「……やっぱり、忘れてなかったか」

「私、オーランティアカの本当の娘じゃなかったんだね。あ、でも心配しないで。なんかね、色々なことが腑に落ちてすっきりした気分なの」

何故自分は、家族の中でこんなにも小柄なのか。何故姉弟で、両親の扱いが微妙に違っていたのか。すべてがパズルのピースのようにピタリとはまっていく。

それは、姉のアリッサムが生きていた頃から感じていたことだった。幽かな違いでしかなかったけれど、子ども心にも何か妙に腑に落ちない差のようなものが、自分と他の姉弟との間にあると感じていた。

それは簡単に言えば、優遇する順番と優先する順番の違いだった。プレゼントや褒美に関しては、両親はデイモルフォセ力を微妙に優遇した。他の姉弟よりも、少し値の張るもの、少し豪華なプレゼント。それは小さいホルトが鼻屑だと陰でやかむ程度の僅かな差だったけれど、そこには確かに差が存在していた。そして逆に、怪我や病気の時には、ホルトやアリッサムの方をより優先して心配し

ているようにデイモルフオセカには感じられたのだ。

それはデイモルフオセカが養女であり、他人の子であるという意識がどこかにあったからだとしたら、妙にストンと腑に落ちる。

結婚話が持ち上がった時の母親のふるまいだって奇妙だった。森の民とは言え、結婚相手を拒否する権利だってあったのだ。

デイモルフオセカの結婚相手として政府から決められたシーカス・エウオニムスには恋人がいた。金色の髪に碧い瞳のその女性は、シーカスとは似合いの人で、二人は誰もが知っている有名なカップルだった。森の民といえど、ある程度結婚相手は選択できる。しかし、二人は結婚していなかった。シーカスの親が反対していたからだとか、政府の許可が下りなかったからだとかいう噂はあったが、本当のところはどうだったのかは分からない。

デイモルフオセカとの結婚話が持ち上がった時、一番喜んでるように見えたのはシーカスの両親とデイモルフオセカの母親だった。いや、デイモルフオセカの母親は、むしろほつとしているように見えた。だからなのだろう、この三者によって結婚話は勝手に勧められ、本人や他の者が気づいた頃には、もう覆せない程に話が進んでいた。

二人の結婚話は波紋を呼んだ。

シーカスとその恋人は、親や政府によって引き裂かれた悲劇のカップルとして、デイモルフオセカは恋人の間を裂く邪魔者として、周囲は認識した。それまで仲の良かった友は急によそよそしくなり、それほど仲が良くなかったものは、これ見よがしに嫌がらせの言葉をデイモルフオセカにぶつけるようになった。

『いくら政府から勧められたからって、普通断るでしょ？ そんな結婚話。信じられないよね』

『森の民にだって拒否権はあるのにね』

そのうち、噂はどんどんエスカレートして悪質になった。

——この結婚、実はデイモルフオセカの我がままで決まったものらしい。

とか、

——デイモルフオセカはシーカスの恋人に嫌がらせをしているらしい。

とか、身に覚えのない噂が立ち始め、デイモルフオセカは徐々に孤立していった。

デイモルフオセカは途方に暮れる。こんな話、白紙に戻してしまいたい。シーカスとその恋人だって気の毒だ。誰もが不幸になる結婚でしかない。

しかし、デイモルフオセカの願いは母親に却下された。

『デイモルフオセカ、政府の決めたことは絶対なのよ。結婚をやめたいなんて馬鹿なことを言わないで』

母は、自分をオーランティアカから出したかったのだ。そう考えればつじつまが合う。

デイモルフオセカを構い過ぎるとしょっちゅう父と喧嘩していたことも、ホルトと二人つきりでいることに過剰に反応していたことも、デイモルフオセカをよその子だと意識していたからではなかったか？

ずっと以前から感じていた幽かな疎外感の正体が、もしそれだとしたら、自分がオーランティアカの家に住ること自体、家族にとって困惑の種だったのではなかったか。

自分という存在の要らなさに、ほとほと嫌気がさす。

「私、どこに居ても要らない存在みたい。記憶が戻って良かった。そのせいでオーランティアカの家に戻れなくなっただのなら、もうこれでみんなを困らせることもないし、処分されるのなら、カナメだって私のことで悩まずに済むもんね」

そう言って弱く笑ったデイモルフォセカの頬を軽く平手がぶつ。

「君は本気でそんなことを言っているのか？ だったら僕は君を買いかぶり過ぎていたようだ。君はいつだって表面にとらわれずに物事の本質を捉えられる人だと思っていたんだけどな。がっかりだ」
頬に走った衝撃に驚いて、デイモルフォセカは目を見開く。カナメは続けた。

「オーランティアカの家の人たちが、事情はどうであれ追い詰められて逃げ出した君が帰って来なくてほっとしていると思うのか？ そんなに簡単に君を諦められるくらいなら、もらい子の君など、要らないと思つた時点でとくに手放しているさ。僕だって同様だ。要らないのなら、不法家宅侵入の君などとくに公安に引き渡している。そもそも要らない人間ってなんだ？ 君の中では要る人間と要らない人間に分類されているのか？ ならば君にとって僕は単に要る人間で、要らなくなればお払い箱って訳か？」

「違う！ そんなこと一度だっと思つたことないっ」

デイモルフォセカは拳を握りしめて、声を張り上げた。

「みんな大事だから、みんなが笑顔でいて欲しかったから、それ
自分の存在が邪魔するのなら自分なんかいない方が良かったって……
そう思ったの。私、カナメを困らせたくない、カナメのお荷物に
なりたくないよ。私……カナメが好きだから。もう、私のことで困
ってほしくないのっ」

涙が勝手に流れ落ちて止まらなかった。

「僕だって同じだ。君に笑顔でいて欲しいから、君に幸せでいて欲
しいから、あれこれ悩んで、色々あがいてる。僕はまだ諦めていな
い。君も諦めるな。どうしたら君が幸せでいられるのか。どうした
ら君を安全にアール・ダーへ帰すことができるのかを含めて、もう
少し考えてみるから……」

頬をつたう涙を指先で拭いながら、カナメはディモルフオセカの
額に口づけた。

カナメが考えさせてくれと言い残して部屋を出て行ってから、入
れ換わるようにコブがやってきた。

少し疲れた様子の、しかし少し荒んだ雰囲気の際は部屋に入って
くるなり、一つのメモリースティックをディモルフオセカに差し出
した。

「おまえ、カナメの正体を知りたくは無いか？」

「カナメの……正体？」

「あいつはおまえが思っているような善良で優しい奴なんかじゃな
い。ここにあいつの正体が記録されている。見てみるよ。その目で
ちゃんと見てみるよ」

「コブ？ どうしたの？ カナメと喧嘩でもしたの？ 何かあったの？」

差し出されたメモリーには手を出さずに、オロオロと言葉を紡ぐデイモルフォセカに小さく舌打ちをすると、コブは足音も荒く寝室に入ると、メモリースティックをヴィジシアターに挿入した。スイッチを押すと、間もなく映像が開始された。

画面いっぱい、どこかの研究室のような部屋が映し出される。白衣を着た男の人们が取り囲んでいるのは、繭のような細長いドーム型をしたカプセルだ。開けると指示を出した老人の服には見覚えがあった。精緻な刺繍が施された上着だ。顔にもことなく見覚えがある。瞳の色はごく薄い褐色で、その人とは違っているけれど、彼が歳をとればこんな感じになるのだろうと思わせる顔立ちだ。デイモルフォセカは首を傾げる。

——カナメ？ まさか……ね。

しかし次の瞬間、そんな疑問が頭から吹っ飛んだ。カプセルから出てきた少女にも見覚えがあったからだ。

亜麻色の巻き毛にアンバー（琥珀色）の瞳。華やかな目鼻立ちのその少女は、デイモルフォセカが見間違えるはずの無い、死んだはずのアリッサムだった。

少女は虚ろな瞳を開けると、まるで人形のように手をとられるままカプセルから出てきた。すぐに薄い検査衣のようなものを着せられたが、ほぼ半裸の状態で様々な検査器具が付けられていく。アリッサムは相変わらず無表情で、何をされてもまるで反応が無い。感情を感じられない。

——何？ 何が行われているの？

しばらくして、検査装置から送られてくるデータを見つめていた一人の男が振り返りざま首を小さく振り、この子は森の民の力を持つていないと告げると、年老いた男性は冷たく言い放った。

「そうか、では分解しておいてくれ」

——間違いない。あれはカナメの声だ。でも、どうして……。

「でも、カナメさん、そんなすぐに分解しなくても……せつかく再生したんだし……。こんな綺麗な子、すぐに分解するのはちよつと……」

後方で見守っていた男が、少し嫌な感じで顔を歪めて笑うと、カナメは鋭い一瞥をくれて冷たく言い放った。

「分解しろと言ったんだ。聞こえなかったのか？ 今すぐその子を分解するか、君をプロジェクトから外すか、どっちがいい？」

鋭い視線で睨みつけられた男性は、軽く肩を竦めると、無表情なままのアリッサムを再びカプセルに押し込んで、スイッチを押した。

——どうして？ どうしてなの？ アリッサムは生き返っていたのに……。どうしてまた分解されたの？ どうしてカナメはアリッサムを分解したの？ 森の民の力がなければ分解されるの？ どうして？ どうして？

気づいたら、デイモルフオセカはコブの腕を掴みながら、どうして、を繰り返していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1520w/>

光の砂漠 闇の迷宮

2012年1月4日12時21分発行